

ヲ馳下ル、公ハ色部捨八郎、齋藤下野守、岩井民部少輔、小倉伊勢守、五十公野右衛門等ノ諸將ニ軍士ヲ差副ラレ、信長ヨリノ寄手ニ差向ラル、此節ニ味方ノ士小森澤刑部討死ス、公ハ十八日納馬シ玉フ、同年夏五月四日、甲州武田勝頼ヨリ飛翰到來ス、先頃越中御出馬有テ、軍務盡ク命セラレ、御納馬ノ由、其間ヘアリテ珍重ノ旨申來ルニヨリ、返翰ヲ遣サル、其御書云

急度御脚力畏悦之至候、仍越中表仕置申竹令納馬之條、先日以飛脚申達候、定而可爲參着候、然者上方、關東表、何茂無事之由、目出、珍重候、如何様近日以使者可申述候間、御報不能詳候、恐々謹言、

五月四日

景勝

武田殿

六月三日
同日小森澤刑部大輔カ男鍋磨ニ御書ヲ下サル、去ル二月越中小井手ノ一戰ニ、老父刑部大輔討死ス、其軍功甚顯著ス、此ニ依テ今度本領ハ申ニ及ス、食祿ヲ増シ賜ヒ、殊ニ長ノ一字ヲ下サレ名ヲ改メテ又四郎ト稱ス、其御書ニ云
老父刑部大輔、於越中小出之地討死不便之至候、因茲本領並爲新地遣置候、知

行分郡司不入新給令免許者也、仍如件、

天正九年

六月三日

景勝

小森澤鍋磨

〔加賀藩史彙〕

一 三月、越後ノ國主上杉景勝次喜平越中ヲ侵シ小井手城新川ヲ圍ム、公柴田勝家等ト赴キ、援フ、遂ヌルニ迫ヒ、景勝兵ヲ收メテ退ク、

松倉城主河田長親卒す、

〔景勝年譜〕

九年夏四月八日、山本寺松三景長、中條越前守藤資、竹俣三河守慶綱、吉江常陸入道宗信ニ仰下サルハ、去月二十四日、河田豊前守病死スルニヨリ、松倉城廂用心等油斷ナク番兵ノ輩ニ急度軍用ヲ申付ヘシ、越府ヨリ在番ノ面々モ當十日此地ヲ發スヘキ條、其地ニ於テ諸事軍議スヘキ由公命アリ、其御書云

河田豊前守病死、依之彼城備等堅固之様可被仰付候、在番之衆當十日被相立候間、近々可爲參陣候、萬緒可有御相談候、恐々謹言、

四月八日

景勝

正親町天皇正九年

山本寺松三殿

中條越前守殿

竹俣三河守殿

吉江常陸介殿

越中松倉城番ノ輩ニ條書ヲ出サル、本丸、二ノ丸ニハ越府ヨリ遣ス番兵ヲ移シ置、外曲輪ハ地着ノ者ヲ置ヘシ、二ノ丸ヨリ内ヘハ他國ノ者一切ニ入サル様ニ禁止スヘシ、外曲輪門番人モ地ノ者ヲ申付其内ニ一兩人越府ノ者ヲ加ヘ置ヘシ、地下ニ至ルマテ非分ノ儀申掛マシキ由ナリ、

掟

一、實城中城番人者、自爰元差越者共相移、其外之曲輪者、地衆可差置事、

一、外構之屋布等、無理不可取之事、

一、附地衆並地下人至迄、非分ノ儀不可申掛事、

一、自中城内江他國之不案内成者、不可入事、

一、外張之番實城城番之儀者、從爰元差越者共可致之候、外曲輪之門番者、地衆可致之間、一人充差副可致之事、

一、用心普請等、無油斷可致之事、

右條々堅申付、自然有我儘之儀者、急度註進可及其沙汰者也、

天正九年

五月廿八日

御朱印

七月
同月十七日、越中松倉城主河田豐前守病死以後ハ假リニ蓼沼掃部助、小倉伊勢守ヲ鎮將トシテ差置ル、コレニ依テ御書ヲ賜フ、此ヨリ先ニ山田修理亮參府ニ付テ松倉、魚津兩城仕置堅固ノヨシ言上ス、彌政務ノタメニ大石右衛門ヲ差越レ松倉、魚津ノ横目ニ命セラル、蓼沼小倉事ハ魚津地ニ勤番スヘシ、長々陣勞タリト雖モ用心普請等嚴密ニ申付ヘシ、黒金兵部少輔事歸府ニ及ス差置ヘキ條其心得有ヘシ、並制札遣ハサル、間、則兩地ニ立ヲクヘキトナリ、其御書云、
山田修理亮參府付而、兩城仕置之段、閉届候、偕又大石右衛門差越候、松倉、魚津之地横目可入置候、各事魚津之地可差置候、長々陣勞與云、乍太儀其儘居詰用心普請等可申付事肝要候、謹言、

七月十七日

景勝

追而黒金兵部少輔事茂其儘置詰候間、其心得尤候以上

正親町天皇正九年

正親町天皇天正九年

葵沼掃部助殿

小倉伊勢守殿

六七二

十年壬午春正月朔日二日三日諸臣登城シテ新陽ノ佳儀ヲ祝シ奉ル、遠境ノ御味方ヨリハ例ノ如ク使介ヲ以テ慶賀ヲ申上ル、

正月十日、色部修理大夫長實ニ御書ヲ下サル、去歲越中松倉城主河田豊前守病死スルニ依テ魚津、松倉兩所ニ番兵並ニ横目ヲ差置、狼狽此ナキ様ニ政務ヲ沙汰致スヘキ旨申付、且又、本庄彌次郎繁長ニモ諸事仰遣サレ別シテ示合セ油斷有ヘカラストナリ、其御書云

馳一簡候、越中表無替儀候、舊冬魚津松倉之仕置成替如何茂堅固候間、可心安候、萬端之儀本庄江申越之條被聞届、別而有入魂、國家安全之圖肝要候、謹言

正月十日

景勝

色部修理亮殿

〔信長記〕

五月廿四日、越中國松倉と申所、楯籠候、御敵河田豊前病死仕候、信長公の蒙御憎者悉天狗と相果候、

○信長記は五月二十四日に係く、蓋傳聞を記せしあり、今年譜に據り、三月に

收む、

四月甲午

成政、婦負郡五艘村、渡舟の制を定む、

〔婦負郡櫻谷村高等小學校報告〕 櫻谷村大字五艘村 當時神通川は五艘田

刈屋兩村の中央を貫流し、渡舟五艘にて辨せり、五艘の村名の之に起因すといふ、

定

一侍奉公人に、舟賃不可取候事、

一舟賃の儀は、四艘の外余慶に不可取若し隠して舟賃餘慶に取候は、急度可爲曲事、

一夜中狼に、舟を越渡し申間敷事、

一懸づくの諸勝負、停止之事、

一旅人たりとも、餘慶に舟賃不可取候事、

右之條々堅く可相守、若し違亂の輩有之に於ては、可處嚴科者也、

天正九年午四月

佐々藏之介

正親町天皇天正九年

六七三

六月 朔 癸巳

勝興寺兵燹に遭ふ、是に至り、瑞泉寺も亦兵火に罹る、

〔瑞泉寺記録帳〕

然るに井波之有様、見給ふに、昔之形とてり土手掘而已、草

原にて様く、東西之井波に小家百軒不足、緯如上人、明徳元年に此地に、一字之

坊舎、御建立有しより、七代之寺務兵部卿佐連顯事也に至る迄、凡雪霜百九十年

之間、御宗門繁昌して、蓮乘之代より利波郡を領し、坊主大名にて二十七ヶ寺坊

號十八人、與力付大身五人、町家三千餘軒有て、越中之府とも可云所あり、然に

去ぬる天正九年六月、佐々成政入國之節、一字も不殘燒亡、

〔東礪波郡井波町役場調査〕 天正九年六月、佐々成政の臣前野小兵衛の爲め

兵火に罹り、井波三千軒悉皆燒失、

〔雲龍山勝興寺系譜〕

天正九年四月、石黒道之不意ニ夜討ニ入ル、之レ城主顯

幸石山本願寺加勢ノ爲、家臣ヲ召具シ、在京留主ヲ窺シナリ、家臣木戸刑部同主

計等士卒僧俗ニ下知シ、秘術ヲ盡シ血戦シ、敵將數多ヲ討捕、家士ニハ沼田高友

軍中ニ討死ス、敵手ノ一軍間道ヨリ放火シ、之レヲ防クト雖モ、オリフシ魔風烈
シク、終ニ坊舎殿閣灰燼トナリス、

八月 朔 壬辰

三日、于甲成政、埴生八幡宮に參百俵の田を寄進す、

〔護國八幡宮文書〕

○西礪波 埴生村

爲本知、埴生口御神領分百四拾俵、井同埴生之内百六十俵、合參百俵、任先規之旨、

宛行候、全知行不可有相違之狀如件、

天正九

八月三日

成政花押

埴生民部丞殿

埴生八幡宮江寄進分

一 參拾五俵者 見トウシの 菫正月二月之祭

一 參拾俵者 せくの 後三月霜月之祭

一 七拾五俵者 八月放生會御祭 井神典之御修理共

正親町天皇天正九年

一 壹貫百本 此米四俵 壹斗六升 每月御供料

一 拾俵者 寶光房

一 拾俵者 寶積房

一 拾俵者 愛染房

一 拾俵者 玉藏房

一 拾俵者 遍照房

一 拾俵者 修行房

一 拾俵者 千手房

一 拾俵者 本覺房

一 拾俵者 灯明田

一 拾俵者 大宮内

一 拾二俵者 禰宜大夫

一 九俵 承仕給

都合二百六十九俵 壹斗六升者

右如先規 八幡宮御祭並勤行定灯以下無懈怠可被相勤之狀如件

天正十

九月十五日

佐々内藏助成政

〔越中志〕

〔参考〕

ノ中ニアリ、
義仲ノ願書覺明カ其筆ハ失テ、今殘レルハ後人ノ書タルナリ、表サシノ鑄二筋

アリ、是ハ昔、儘ナリト云、

松永、柳原、胡頼子原ナトハ八幡ノ近邊ニアリ、クミノ木原ハ八幡ノ後、松永、柳原

ハ地生ノ右ナリ、

佐々内藏助成政富山城主ノ時、富宮寄進之狀、地生八幡宮寄進分

織す、上文に同じ、
此頃マテハ如此房中多ク、社司社家數十人アリテ、大社ナリシカ、今ハ漸ク神主

一人、房中纔ニ一二ヶ所アリ、

十月 壬辰

二日、織田信長、能登を以て前田利家に賜ひ、七尾城に治せしむ、

正親町天皇天正九年

〔前田家譜〕

十月二日、織田公利家ヲ能登全州ニ封シ、長連龍ヲシテ麾下ニ

隸セシム、是ニ於テ利家居城ヲ七尾ニ定メ、稅政ヲ省キ賞罰ヲ明カニシ恩惠ヲ窮民ニ施ス、封内ノ者大ニ悅服ス、時ニ異僧アリ七尾ニ客寓シ人ノ爲ニ神ヲ禱ル、其言ト願ル驗シアリ、國中奔波シ禱ヲ請フ者常ニ門ニ填ツ、左右ノモト利家ニ勸メラ一見セシム、利家曰ク是必ス幻術ヲ以テ衆ヲ惑スナリ、誅セサル可ラ

〔利家夜話〕

〔前二大納言權九ノ御年トアリ〕 同年森邊合戦の時、一番首御取被成候、利家御奉公ニ御出被成、始テ五十貫被下候、其後加増ニテ百五十貫ニ成リ、又森邊合戦の後、御加増被下、貳千四百五十貫成、其後越前府中ニ而三萬三千三百石被下、其後能登を一國被下、又後加州石川河北兩郡大關ヨリ被下、其後越中を我等切取りおまゝなるを、加様色々若時より、骨を折差上候侍ハ心を富士の山程ニ持奉公可仕由常々御意被成候事、

〔三州志〕

冬十月二日、我公ヲ以テ能登二州ニ封シ、長連龍ヲシテ麾下ニ隸セシム、是ニ於テ利家居城ヲ七尾ニ定メ、稅政ヲ省キ賞罰ヲ明カニシ恩惠ヲ窮民ニ施ス、封内ノ者大ニ悅服ス、時ニ異僧アリ七尾ニ客寓シ人ノ爲ニ神ヲ禱ル、其言ト願ル驗シアリ、國中奔波シ禱ヲ請フ者常ニ門ニ填ツ、左右ノモト利家ニ勸メラ一見セシム、利家曰ク是必ス幻術ヲ以テ衆ヲ惑スナリ、誅セサル可ラ

ノ附庸トス、連龍此時能登郡中三萬三千石ニ信長公ヨリ菅屋福富ノ二將ハ安土ヘ歸ル、此時去長公ヨリ能登郡中三萬三千石ニ信長公ヨリ菅屋福富ノ二將ハ檢地ノ上ニ百歩ノ一反トス、此時越中ハ未タ信長公ノ手ニ全ク屬セサルヲ檢地ノ事ヲ其地ニ今猶古制ニ而ノ公ハ七尾ニ徙リ、玉ヒ、淺加友、數、柳、耳、底、記、ニ、能、登、伊、祖、能、登、入、部、初、之、所、ニ、開、闢、五、丈、火、ヲ、大、蛇、接、テ、人、ヲ、害、ス、故、此、邊、ヘ、近、ツ、ク、者、ナ、シ、門、ヲ、造、ラ、シ、燒、倒、ス、ル、ト、此、城、山、中、震、動、大、蛇、燒、死、ス、國、祖、移、シ、公、事、場、ノ、門、ト、ナ、ス、ト、此、蛇、骨、七、尾、ノ、至、仁、家、ニ、存、ス、ル、且、勇、敢、ナ、キ、コ、ト、巨、尺、取、石、ト、ナ、シ、未、森、城、ニ、守、在、羽、昨、奥、村、助、右、衛、門、永、福、木、下、貞、幹、與、村、氏、從、前、田、氏、自、其、先、在、於、尾、之、以、爲、村、邑、遂、ヲ、置、封、界、ヲ、守、ラ、シ、メ、未、森、ハ、越、前、二、州、ノ、界、也、越、前、永、福、永、福、同、盟、十、二、年、尾、州、荒、子、城、ヲ、守、容、易、ヲ、シ、ム、カ、ル、コ、ト、國、祖、命、テ、也、甲、州、ノ、信、支、ト、モ、其、義、胸、ニ、備、中、海、尻、類、ト、守、成、全、キ、武、門、ヲ、榮、光、義、先、示、ス、モ、居、ナ、シ、展、放、應、ニ、托、ノ、國、民、ノ、貧、苦、ヲ、問、德、惠、ヲ、施、シ、玉、ヘ、ハ、皆、甘、棠、ヲ、歌、テ、教、化、閭、州、ニ、至、ラ、サ、ル、所、ナ、シ、又、今、茲、信、長、公、ヨ、リ、公、ノ、前、封、壤、越、前、府、中、三、萬、三、千、石、ヲ、世、子、龍、ニ、賜、リ、信、長、公、ノ、翁、主、也、時、ニ、七、歲、院、殿、是、也、玉、泉、議、婚、ア、リ、府、中、ノ、邸、ニ、入、與、合、番、其、式、嚴、重、也、天、正、八、年、目、抄、ナ、ル、ニ、長、瑞、龍、公、ト、ナ、サ、シ、ム、府、中、ハ、勝、家、ニ、賜、ア、リ、ト、イ、ハ、モ、公、未、タ、府、中、ニ、居、玉、ヒ、能、州、ヘ、

正親町天皇天正九年

遺シ、七尾城ニ居シメ玉フトアリ、又一番ニ正八年ヨリ公ノ爲ニ同七年ニマ
テ、長連龍毎年越前府中へ参覲スリ、又一年ニ正八年ヨリ冬國祖能州七尾城ニマ
ナリ、玉波ハ此所ニ三年在リ所城ナリ、又州初到、今ノ地ハ千代町ハ古ノ千代町ノ出村ト
ナリ、

〔三州志〕

來因概覽

能登天正九年十一月二日、國祖ヲ以テ能登國州ノ譜ニ輪

目録三萬三千七百一十石トアリ、秀吉公諸國檢地封侯トナシ、國祖即チ七尾城ニ遷
ラセテ、按ルニ、國祖此頃ハ多クハ越前府中ニ居テ、引移サレ、小丸山城トナリ、城
命ス、小丸山遺跡ハ今ヲル、此後元禄十五年二月二日、此七尾國祖所ニ多クハ
居テ、小丸山遺跡ハ今ヲル、此後元禄十五年二月二日、此七尾國祖所ニ多クハ
テハ、毎年越前府中へ参覲スリ、同一年、國祖金城ニ入封マ、長連龍ヲ以テ
與力トナス、因概覽、餘考十月二日、爲テ、來

九日、庚申、神保長住、長澤蓮華寺及放生津八幡領町に制札を掲ぐ、

〔蓮華寺文書〕

梅澤山市

長澤蓮華寺

制札

一 濫妨狼藉山林竹木不可伐取之事、
一 寺内江軍兵推入不可有陣取之事、付寺内并寺口口從使不
可有之、以斷可相濟事、

制札

放生津

八幡領町

同三宮方

- 一 當町江方々上至先規無之旨
- 一 申懸は輩くせ事、はる事
- 一 ねし、いらいせ人うらとはる
- 一 くらはる事
- 一 諸うりりの物當座ニ替りを相
- 一 是、さけるとせからくせ事たる
- 一 是、事
- 一 ひき催促はけは、あはる事
- 一 是、事
- 一 如前々不入平夫む祿け徳米

命下モ七尾町跡名ハケル此後元禄十五年二月二日此七尾町ヲ祖越前ト改名ナ
居玉山越前府中龍天正八年ヨリ同十一年國祖金城ニ入封マ長連龍ヲ以テ
與力トナス○下覽十一月に考十月二日と爲セリ

九日、庚子、神保長住、長澤蓮華寺及放生津八幡領町に制札を掲ぐ、

〔蓮華寺文書〕○富山市 梅澤町

神保安藝守長住制札

長澤蓮華寺

制札

一 濫妨狼藉山林竹木不可伐取之事
一 寺内江軍兵推入不可有陣取之事
付寺内并寺口口從使不可有之以斷可相濟事

放生津

制札

八幡領町

同三宮方

- 一 當町に方々よ至先規無之旨
申懸は輩くせ事、はる事
 - 一 ねらういらいせ人うらとほ
うらほる事
 - 一 諸うりういの物當座に替りを相
ととせはるととからくせ事たる
原き事
 - 一 ひき催促はけは、あはるら
さほ事
 - 一 如前々不入平夫む祿け徳米
あはるらほる事
- 右条々於相背輩者速可處罪
科者也仍下知如件

天正九年 霜月十二日 長住(花押)

神保長住制札 水郡新湊町大西綱平氏所藏

制札

水郡新湊町大西綱平

一 南町

南町 南町 南町

一 北町

北町 北町 北町

一 東町

東町 東町 東町

一 西町

西町 西町 西町

一 南町

南町 南町 南町

一 北町

北町 北町 北町

一 東町

東町 東町 東町

一 西町

西町 西町 西町

一 南町

南町 南町 南町

一 北町

北町 北町 北町

一 東町

東町 東町 東町

一 西町

西町 西町 西町

- 一 寺領等任先規之旨一切不可有諸役之事付定役之事荒不作等錯
- 一 如前々棟別段別徳錢徳米平夫不可相懸之事
- 一 塔頭寮舎斷絶付而者從常住可爲策配之事

天正九年十月九日

長住花押

〔大西文書〕

○射水郡新湊町

制札

放生津 八幡領町

同 三宮方

- 一 當町江方をより先規無之旨申懸る輩くせ事あるへき事
- 一 ねしかかひらうせた人かしらとるべからざる事
- 一 諸うりかいの物當座に替りを相見ささるともからくせ事たるへき事
- 一 ひき催促さけさあるべからざる事
- 一 如前々不入平夫む糸かけ徳米あるべからざる事
- 一 右條々於相背輩者速可處罪科者也仍下知如件

天正九年霜月十二日

長住花押

二十九日申 佐々成政、黒部産馬を織田信長に獻す

正親町天皇天正九年

〔信長記〕

十月廿九日、越中よき黒部さちの御馬、當歳二歳を初として十九匹、
佐々内藏助奉進上也、

天正十年壬午 紀元二千二
百四十二年

二月 朔庚寅

九日、織田氏の兵、越中に入る、越中の守將須賀盛能、秋山定綱之を上杉景
勝に報す、是日景勝、上條政繁等五將をして、赴援せしむ、

〔景勝年譜〕

二月九日、越中ニ差置ル、須賀修理亮盛能、秋山伊賀守定綱方ヨリ
注進ノ趣ハ、去ル七日、信長ノ兵士馳向ヒ、町屋ヲ侵シ、猶餘勢甲信ニ屯シ、越中ニ
攻入ント計策ノ由ナリ、コレニ依テ、上條彌五郎政繁ヲ初トシ、其將隊頭五組ホ
ト今日相立ラル、並ニ當十六日頃公ニモ御出馬アルベキ旨公命アリ、其内各精
勤ヲ盡シ、敵人ノ爲メ不意ヲ討ルヘカラス、其御書云

如注進者、去七日凶徒其地取掛、町中相敗之由、口惜次第候、就之出馬之儀、彌相
急、今月十六日、爰元可打立候、其内無心元之候、上條始彼是五頭、今日中相立候、
雖不珍候、兩人今般猶以可抽粉骨候、謹言、

二月九日

景勝

須賀修理亮殿

秋山伊賀守殿

○上條政繁は初景義と稱す、此時島山義春を養子とし、政繁は既に薙髮して
宜順齋と稱せり、前後景勝の書を檢するに、上條入道殿とし、或は上條彌五郎
殿とせり、蓋入道は政繁にして、彌五郎は義春を云ふならん、本書彌五郎を政
繁とする、恐らくは非なり、此條景勝の書に上條始彼是五頭とあるは、其政繁
なるか義春なるかを知る能はずと雖も、義春は四月十三日を以て魚津に赴
援すれば、此時は蓋政繁なるべし、

二十五日、^甲上杉景勝、書を大關親憲に與へて、織田氏の兵の越中に入らん
とする虚實を探り、且つ魚津城の近状を報せしむ、

〔景勝年譜〕

二月廿五日、越中諸士ノ内大關常陸介親憲、岩舟丹波入道、黒金上
野介景信方ヨリ注進アリ、信長ノ兵士信甲ニ亂入ス、當國ニモ攻入ヘキノ由風
説アリ、コレニ依テ御書ヲ下サル、其御書云

注進之旨得其意候、彌實説聞届可申越候、魚津其外味方地之模摸如何、無心元
候、是茂聞届注進尤候、謹言

正親町天皇天正十年

二月廿五日

景勝

六八四

大關常陸介殿

岩舟丹波入道殿

黒金上野介殿

二月廿六日、大關常陸介秋山伊賀守ニ御書ヲ玉フ、其表普請晝夜ノ辛勞勝テ計ルヘカラス、彌念ヲ入念ルヘカラス、若未熟ノ者アラハ速ニ申越スヘシ、新地ノ事タル間、早速成就アルヘカラス、各勞苦ヲ感シ一椀一肴贈リ下サル、其御書云其元普請晝夜劬勞察之候、彌入念人跡衆無未熟様可申届候、若如在之仁於有之者、無隠可申越有、大方者新地之事候間、早速成就不可有之候、別而兩人肝要候、各椀肴遣候間、可相届候、謹言

二月廿六日

景勝

大關常陸介殿

秋山伊賀守殿

○秋山伊賀守は、須賀修理亮と同じく、頸城郡落水城を守るものなることは、上文二月九日條に見えたり、此に大關親憲、秋山伊賀守と連書すれば、親憲亦

伊賀守と同じく落水城を守りしなるへし、上文岩舟黒金の二人も亦然らん

三月卯巳未

十一日、巳小島六郎左衛門等景勝に通し兵を擧げて富山城を奪ふ、柴田、佐々、前田の諸將攻めて之を復し、遂に魚津、松倉の両城を圍む、

〔古今消息集〕

昨日書狀今日於犬山披見候、仍其面一投等在之、兩村押詰成敗仕候由、先以可然候、其付松倉江働之事、無油斷之旨、肝心候、越後之族少々罷出之由、神保かよより申越候、定而可北散候間、釣留可置之旨申遣候、猶々無油斷相助悉可打置之義專一候、吾等事五日從安土相立今日犬山着陣候、甲州諏訪之事、四郎去月廿八日從方居城へ逃入、居所へとも自燒仕候間、山奥へ何方共無之逃失候、先手之者共早至甲州打出候、城介同前候、我々出馬無專候へとも、連々關東見物望候、幸之義候間、打越候、四郎事彼等代々の名をくよし候、如此早々屬平均さる何之口も報事候、可成其意候也、

三月八日

信長判

柴田修理亮殿

正親町天皇天正十年

六八五

〔信長記〕

去程、越中國富山の城、神保越中守居城候、然而今度信長公御父子信州表、至て御助座候所、武田四郎節所を拘、遂一戰悉討果候間、此競、越中國も一揆令蜂起、其國存分、申付候へ、と有之、と越中へ僞申遣候事實、心得小野六郎左衛門、かき戸式部兩人一揆大將、罷成、神保越中を城内へ押籠、三月十一日、富山の城居取、仕、近邊、舉煙候、不移時、日柴田修理亮、佐々内藏助、前田又左衛門、佐久間玄蕃頭此等の衆として、富山の一揆城取巻候間、落去不可有幾程之旨注進被申上候。

信長公御返書之趣

武田四郎勝頼、武田太郎信勝、武田典厩、小山田長坂、釣閉初として、家老の者悉討果し、駿、甲、信無滞一篇、被仰付候間、不可有機遣候、飛脚見及候間、可申達候、其表之事、是又可爲存分事勿論也。

三月十三日

柴田修理亮殿

佐々内藏助殿

前田又左衛門殿

不破彦藏殿

〔景勝年譜〕

天正十年夏五月三日、本庄彌次郎ニ御書ヲ賜リ、今般新發田表へ相働キ近邊ノ地悉ク踏破リ利ヲ得ノ由、感悦ニ思召レ、彌彼表敵ノ自由ヲ押へ、味方周旋ノ擬尤疎略アルベカラス、信州口ノ軍務手堅公命アレハ必心肝ヲ勞スヘカラス、去ル三月中旬、越中富山事、先忠ヲ復スルノ處ニ、越前柴田修理亮打出テ、彼地取詰ノ節、万方手塞リ後詰ニ及ハサル、今以テ無念ノ至リナリ、然ラハ富山地ヲ退キ、五箇山地ニ取除キケルニ、其後柴田魚津、松倉表へ相働キ、張陣ノ由相聞フ、信州口ノ軍策、心元ナキ事、コレナキ間、近日無二無三御出馬有テ、北國弓箭ノ是非ヲ付ラルヘキト定ラル、委曲外山縫殿助見聞ノ通り才覺有ヘシ、其御書云

今般新發田表被相働、領中悉^(城)被成置之由、感悦之至候、彌彼表之義不致煩出之様擬任入候、將又信州口仕置手堅申付候條、可心易候、次三月中旬、越中富山復先忠候之處、越前之柴田打出、彼地取詰候節、万方手塞故不及後詰、于今無念此事候、然者富山地令退、五箇山地江取除候、其以來柴田魚津、松倉表相働令張陣候、於信州口無心元儀無之間、近日無二無三出馬、北國弓箭之是非可付相定

正親町天皇天正十年

六八七

打立候委曲外山見聞之旨可令才覺候吉事重而可申候謹言

五月三日

景勝

本庄彌次郎殿

〔加賀藩史彙〕

一 是月、越中富山、守將神保氏張ノ家臣、亂ヲ作シ富山城ヲ奪フ、公越前ノ國主柴田勝家、越中、國主佐々成政等ト赴キ擊テ之ヲ平ク、夏五月、軍ヲ進メテ、將ニ越後國主上杉景勝ヲ擊タントシ、魚津城ヲ守ル所ヲ圍ム、陳善錄、生田敵銳シ諸將或ハ披靡ス、公ハ則テ毫モ卻退セス、景勝軍ヲ出シ天山ニ次スルニ及ヒテ、公躬ヲ出テ、敵ヲ候ス、敵來リ追レハ輒ハ叱咤シテ之ヲ逐フ、敵敢テ前マズ、正俊覺書、將ニ天神山ヲ攻メントス、諸將先鋒ヲ爭フ、公徐カニ之ヲ解ス、勝家乃公ヲ贊シ諸將ヲ讓ム、錄、陳善既ニシテ景勝軍ヲ收メテ去ル、豐鑑、太前田金家譜天正十年二月、織田公甲斐ノ國主武田勝頼ヲ伐ツ、三月、越中訛尻尾ノ高左京鐵孫左衛門等ヲシテ魚津城ニ據ラシム、利家柴田勝家、佐々成政、佐久間盛政等ト土寇ヲ平ラケ、五月、兵ヲ進メテ魚津城ヲ圍ム、

〔三州志〕

九世餘考 粵ニ景勝後拒トシテ、本月二十日、銳甲三千餘、ハ五千計ト

リヲ帥キテ春日山ヲ發シ、越中黒部川ヲ涉リ吉田ニ塞ヲ營シ、二十三日、天神山ニ到テ陣ヲ布キ、成願寺川ヲ黒部以下ノ地名、隔テ小戰アリ、景周寛政丁巳ノ四紫茂路ヲ天神山下ニ至リテ之ヲ見ルニ、山ハ片貝布施ノ二川ノ間ニ在リテ老松ハ名野ニ陣取リシトアリ、大岩野ハ今勝家合シテ諸陣ノ前ニ壘柵ヲ設ケシム、公暨ヒ勝家、盛政、成政將卒ヲ率キ大哨トシテ敵ノ動靜ヲ窺フ、一書ニ時ニ寺川ニテ馬蹄ヲ冷サシメ、景勝ハ距埋ヨリ是ヲ望ムトナリ、景勝ノ將、蓼沼日向落合清右衛門、三俣九兵衛、中村但馬等十二騎齊ク進ミ、織田方ノ騎士三人ヲ斬リテ歩卒ヲ追フ、成政交及ニ堪ヘスシテ却ソク、盛政乃鉤鎗ヲ捫リ還拒セントスルニ、島津左京上杉馳來リテ擊ツコト急也、拜郷治太夫盛政ノ臣也、景周按ス羽長重ノ臣ニ拜郷治太夫見ユ、是ト同人ナラハ後ニ丹羽氏ニ仕ルナラン、且上文ニ見ユル拜郷五左衛門ハ、能美郡千代ノ堡主也、此治太夫ノ父ニテ志津景死ス、是ヲ斬拂ヒ盛政ヲ殺ソカシム、公ハ駿馬ニ鞭ヲ揚ケ直チニ前ニテ奮闘シ了テ緩ヲ收メ玉フ、公ノ山緒ニ此時、利家進退得其所人皆稱美之トアリ、又一書トス、景勝方ノ倉田佐五允、名山太、然レトモ織田方ノ諸銳將又軍ヲ天神山ニ進ノ擊チ破ラントス、此時盛政、成政相善ラス、先鋒ノ將ヲ爭テ止マス、左右ノ群將默然タリ、公前ニテ曰ク成政ハ越中ノ守護タレハ最先タルヘシ、然レトモ盛政

正親町天皇正十年

強テ乞コト、亦勇者ノ義志ナレハ廢スヘカラス、想フニ左右二隊トナリ並進セ
ンニ何ノ妨ケカ有ランヤト、勝家公ノ頓智ヲ賞シ軍令是ニ決ス、カクテ織田衆
猛進スレハ、上杉衆モ亦巨軍ヲ張テ會戦ス、

六九〇

〔参考〕

〔三州志〕

新故城也

天神山問也、左保内、東尾崎村、堅地也、加積郷、小川ノ山入ニ在テ、片具、布施、兩岸ノ

也、白魚津、一里、東、古ハ之ヲ茨城

ト云フ、景勝記ニ載ス、安陸亡論

天正十年五月、柴田勝家等上國ノ兵ヲ以テ魚津城ヲ圍ムト聞キ、景勝這天神山

迄出張ト、織田軍紀、太田日記等諸書ニ見ユ、大事ト思ヒ一盤ニ合戦ト、七日、計カハ所

ヲ後詰メ、天神山大岩野ニ陣スト云者、道時也、土肥家記ニハ此時ニ後詰ト、其働キ千

斗ノ人数ニテ魚津ニ向ヒ天神ヘ取上リ、對陣度々、足輕道合大軍ニ向詰ト、其働キ千

八、按群トアリ、係混目集、此事ナ、誤レリ、

四月

八日、丙申善德寺窺に景勝に通ず、是日、景勝書を遺りて兵を擧げしむ、

〔善德寺文書〕城〇東瀬波郡 城端町

飛脚到來得其意候、仍而先達柴田山内相助之處及防戦數千討捕之由、心地好候、

飛脚到來得其意候仍而

先達柴田山内相動候處及防

戦數千討捕之由心地好候次彼

徒越中表相動候魚津忝

倉如何にも堅固申付之間可心

安候然者門跡至于五ヶ山邊御

下向之由候幸之儀候間任兼日之首

尾國中相催可被揚放火事

肝要候有邊々者不可然候

越中能易其國御門徒中

於發向者當國差合今般

凶徒之根切可成之奈有其

心得一刻片時茂早々被揚

火先尤候恐々謹言

卯月八日景勝(花押)

天正十年五月柴田勝家等上國ノ兵ヲ以テ魚津城ヲ圍ムト聞キ景勝這天神山
也、白魚津一里東古ハ之ヲ蒞城
ト云テ景勝記ニ載ス、妄誕亡論
天正十年五月柴田勝家等上國ノ兵ヲ以テ魚津城ヲ圍ムト聞キ景勝這天神山
迄出張ト、織田軍紀、太田日記等諸書ニ見ユ、大抵甲陽軍一合ニ取勝我身ニカ、所
斗ノ後諸メ天神山大岩野ニ陣スト云者、道時也、土肥家經記ニ合大軍時ニ後諸トノ五
八、年庚辰ニ係混目集此事ヲ、誤レリ、

四月己丑

八日、兩善德寺筋に景勝に通ず、是日、景勝書を遺りて兵を擧げしむ。

〔善德寺文書〕

城東端波郡

飛脚到來得其意候仍而先達柴田山内相助之處及防戰數千討捕之由心地好候

飛脚到來得其意候仍而
先達柴田山内相助候處及防
戰數千討捕之由心地好候彼
徒越中表相動候魚津忝
倉如何にも堅固申付之間可心
安候然者門跡至五ヶ山邊御
下向之由候幸之儀候間任兼目之首
尾國中相催可被揚放火事
肝要候有違々者不可然候
越中能易其國御門徒中
於發向者當國差合今般
凶徒之根切可成之条有其
心得一刻片時茂早々被揚
火先尤候恐々謹言

卯月八日景勝(花押)

善德寺

次彼徒越中表相動候、魚津、松倉如何ニも堅固中付之間可心安候、然者門跡至手五ヶ山邊御下向之山候、幸之儀候間、任兼日之首尾國中相催可被揚放火事肝要候、有遅々者不可然候、越中能州其國御門徒中於發向者、當國差合今般凶徒之根切可成之條、有其心得一刻片時、茂早々被揚火先尤候、恐々謹言

卯月八日

善徳寺

景勝(花押)

〔善徳寺由緒略書〕 天正十年三月下旬、信淨院教如上人按察法橋、富井佐渡守、豊前淨喜寺等被爲召れ、當寺江御潛入、十有餘日御滞在有之候節、上杉家より被指越返翰文面あり 略 下

〔参考〕

〔城端御坊善徳寺由來〕 其後天正十三西三月下旬、教如上人飛州白川越ニ當國へ御下向有テ、當坊所ニ十四日御逗留遊ハサレ、善徳寺住職ヲ御身近ク召サレ、大坂石山十一年ノ間合戰中、御心痛ノ御物語等遊ハサレ候内、其頃越後ノ上杉景勝味方致サレ、略 中上人北國御下向ノ事、上杉へ御知ラセニ及ヒ、景勝返書當御坊へ向ケテ書簡到來致ス也、此文中ニ上人此度五ヶ山御通リ下向ノ山、猶

正親町天皇天正十年

正親町天皇天正十年

六九二

又内談モ有ヘク旨等於有之ハ其國ニ龍勢立ラレ候ヘハ夫ヲ相圖ニ越中善徳寺ヘ向ケテ登ルヘシ依テ夜々相圖見合ノ者申付置モノ也トアリ、
〔荒木文平古文書〕〇東國波事 去頃書中差越委及返答候キ乍幾度毎度之防戰得勝利如何ニモ仕置堅固之山無比類候如將先書當下勿出馬候て必度與郡人數召寄候然者甲州當方連々示合有子細今般長延寺爲使被差越候依テ萬端行計策以下調候于今口口延引候見角味方中見離口口之山據必底之旨其心得肝野ニ候長延寺近日可爲歸國之旨則可令出馬候其方之義愈堅固之仕置專
用ニ候尙自各可申越候謹言

十月三日

景勝(花押)

五箇山惣中

十三日、詳魚津城將中條景泰等、景勝の來援を乞ふ、景勝先つ上條義春等を遣はして、景泰を助め赴援を俟たしむ、

〔石母田文書〕

陸前

其表敵子今長陣之山辛勞心盡中々痛入候各心中之程思ひやり心も不成候隨分之乘てこもられぬ故城中無思日も山勿論左様にも可有之と令察候様部

父子三人喜四郎事ハ、すてに謙信御芳志御眼力を跡々けりさす候間、此度之義不殘候、長與次も謙信御介抱之者に候間、尤其所を可思候、若林、藤沼事ハは、本のさねに候間、是非無申事候、石口事何も兄弟共兼而及間と云、此度旗本に召遣候上ハ其さる可有之と思詰候、安部事ハ不及沙汰に候、藤丸事ハ於賀州登者に候間、是又無是非候、飯田事ハ若者之事に候間、究而一りと可察候、三河守先年之一乱にも無二に候、其上年比と云無事申事候、山本寺事、名半と云其身若きと云代々弓術之家に候間、此時究而是非と可思候、旁かゝる思日もちき事ハ有ましく候、將亦信州口仕置、藤原明候間、此節令出馬、北國弓矢之手付是非候、依之爲先勢、能州朝倉、遊佐家中兩三宅、温井並其外上條五郎、齋藤下野守、河田軍兵衛尉、不備山城者、境之城主何も折越候間、能州兼打立候を被飛脚見届候間、可被爲才登候、直馬ハ三日可爲歸候、直馬もき以前まつくら其地重而折越人數と合一ありひ肝要に候、目出度於其表可申候、謹言

天正十年

卯月十三日

中條 越 前殿

景勝

正親町天皇天正十年

六九三

- 寺島 六 藏殿
- 吉田 喜四 郎殿
- 龜田 小三 郎殿
- 藤丸 新 助殿
- 安部 右衛門 殿
- 山本 寺松 藏殿
- 竹俣 三河 守殿
- 蓼沼 掃部 殿
- 若林 九郎右衛門 殿
- 石口 采女 殿
- 長與 次殿
- 吉口 常陸 入道 殿

〔景勝年譜〕

四月十三日越中魚津ヨリ脚力到來ス、信長下知トシテ柴田修理亮カ兵士松倉魚津ノ兩城ニ向ヒ、小井手若ニ屯シ魚津城ヲ攻ム、防戦ニ於テハ、城兵等身命ヲ捨テ相働クト雖モ敵兵日々ニ増長ス、カクテ味方ニハ數日ノ籠

城ニ兵糧モ缺乏セリ、早ク御出馬ナクンハ後難計リカタシ、速ニ後援ヲ促サルヘシ、此ニ依テ同十三日加勢トシテ上條彌五郎、齋藤下野守ニ能州御味方ノ諸士ヲ差向ラル、公ニハ二三日遲引有テ御出馬有ヘシ、其内堅固ニ相守ルヘキ旨、嚴重ニ公命アリ、其御書云

其表敵在陣之由、皆々苦勞心懸中々痛入候、各心中之程想像心茂不心成候、隨分之衆、橋籠候故、城中無思由、勿論左様可有之、與令察候、織部父子三人喜四郎事、既謙信御芳志御眼力跡々茂不汚候間、此度之儀者不新候、長與次謙信御介抱之者候間、尤耻可思候、若林、蓼沼事、旗本之實與云、是非無申事候、石口事、何茂兄弟共兼而及間、今度旗本召仕候上者其驗可有之候、藤丸事於賀州壘之者候間、是又無是非候、龜田事若者之者候間、定而一廉可相稼候、三河守先年一乱之時、茂無二候、其上年頃與云無申事候、山本寺事者名字與云、其身若與云、代々弓箭之家與云、此時定而是非可被思候、方々如此無思事者有間敷候、且又信州口仕置隙明候間、此節出馬、北國弓箭之可付是非候、依之先勢能州、長遊佐家中、三宅、温井其外上條彌五郎、齋藤下野守、差越候、今日能州衆打立候、彼飛脚見届候間、可有才覺候、直馬三日可爲跡候、直馬無之以前、松倉其地江重而差越人數、示

正親町天皇正十年

合一擬肝要候、目出度猶其地可申越候、恐々謹言

六九六

卯月十三日 景勝

- 中條越前守殿景泰
- 寺島六藏殿資長
- 藤丸新助殿俊勝
- 石口采女殿宗廣
- 長與次殿宗未
- 竹俣三河守殿綱慶
- 龜田小三郎殿乘長
- 安部右衛門殿吉政
- 若林九郎左衛門殿宗家
- 吉江常陸入道殿信宗
- 蓼沼掃部助殿重泰
- 三本寺松藏殿景長

○景勝の書に直馬三日可爲跡とあれとも、景勝邊に赴援する能之に、延て五

月十五日に至る、又中條景泰等城中既に窮するを以て重ねて赴援を乞ふよ
とい、廿三日條に見ゆ、

二十三日、辛中條景泰等、書を景勝に致して危急を告ぐ、
〔景勝年譜〕 四月廿三日、越中魚津籠城ノ將士ヨリ書札ヲ以テ言上ス、當月五

日、十一日ノ御書、昨日夜陰ニ及ヒ松倉ヨリ相達シ、拜見仕畢ニス、當地ノ儀最前
言上ノ通り、敵兵稻麻竹葎ノ如ク取詰メ、城壁マテ責寄ル、日々夜々四十余日セ
ムルト雖モ、城兵義節ヲ琢磨シ、今日ニ至ルマテ屈伏ノ氣色ニ非ス、シカレトモ
兵糧甚乏ク、其上御出馬モ遅引シ玉フ故、城兵次第ニ神疲勞ス、助救シ玉ハス
ハ、危急存亡此時ニアラン、此故ニ各樋口與六所マテ連署ヲ呈ス、其書云
常月五日、同十一日之御書兩通昨夜亥刻、自松倉到來、謹而奉拜見候、仍當地之
儀最前如申上候、壁際迄取詰、晝夜及四十日雖相攻申候、到今日迄、相拘申候、此
上之儀者、各滅亡與存定候、此由可然様御披露奉頼候、恐惶謹言

卯月廿三日

中條越前守 景泰

竹俣三河守 慶綱

正親町天皇正十年

六九七

正親町天皇天正十年

吉江喜四郎
信景

寺島六藏
長資

蓼沼掃部助
泰重

藤丸新助
勝俊

龜田小三郎
長乘

若林九郎左工門
家長

石口采女正
廣宗

六九八

樋口與六殿

○景勝越中に入り、天神山に陣することは、五月十五日條にあり、
二十六日、越後頸城郡落水城將秋山盛能、越中に入り境を保つ、景勝書を
與へて、之を固守せしむ、

〔景勝年譜〕 四月廿六日、秋山伊賀守ニ御書ヲ以テ仰下サル、先日堺へ引越ケ
ル、吉田源左衛門同前ニ城ノ用心等申付ヘキ旨、仰遣サル、處ニ早々人数召
シツレ、打立ノ由、其間ヘアリ、尤喜悅ニ思召ル、越中表ノ様子、細々注進アルヘシ、
其元地衆ノ證人請取、疾實城ニ差置、堅固ニ勤番申シ付ヘキ由、嚴命アリ、其御書
云

安部右工門
政吉

吉江常陸入道
宗信

三本寺松藏
景長

正親町天皇天正十年

六九九

正親町天皇天正十年

七〇〇

先日者堺江打越彼城用心吉田者共同前可申付山中越候處早々人數召連打立由喜悅候押詰人數可差越候條其内用心堅可申付肝要候條又越中表之様子細々注進待入候其元地衆之般人取之費實城堅固番可申付候料万吉重而

四月廿六日 景勝 秋山伊賀守殿

〔参考〕

〔三州志〕

新川郡 宮崎 治又作南城山 境但ハシ境巴別也

下辨 景勝 三多 一 壯也 在三 位 傳 見 今 各 本 九 名 呼 立 所 力 別 址 可 十 間 分 出 九 尺 許 記 申 下 辨 景 勝 三 多 一 壯 也 在三 位 傳 見 今 各 本 九 名 呼 立 所 力 別 址 可 十 間 分 出 九 尺 許 記 申 下 辨 景 勝 三 多 一 壯 也 在三 位 傳 見 今 各 本 九 名 呼 立 所 力 別 址 可 十 間 分 出 九 尺 許 記 申

云、此古城ハ文化七年四月長屋左近ニ内膳ノ正之者也、北越太平記ニ城川物ヲナシ、是ハ境ノ切通邊ノ小山ト方人傳言ス、今此處ヲ丸山ト云、今城川物ニトス、

五月 朔戊午

九日、温井景隆、景勝の命に従ひ、越中を援ひ能登に進まんとす、是日、景勝書を與へて重賞を約す、

〔景勝年譜〕

五月九日、能州七尾城主高山修理大夫義則カ入臣ノ内、温井備中守ハ兼テ越府ニ志ヲ通シケル所ニ、今度織田信長ニ攻付ラレ關國一變ニ騒動ス、コレニ因テ備中守ロリテ、越府ニ内通シケルハ、此戰陣ニ付能州ニ乱入シ玉ハ、我輩一命ヲ輕ンシ忠功ヲ勵スベキ旨申上ルニ付御賞書ヲ玉フ、其御書云

今度到于能州乱入無二輕一命可被勵功之由、威悦不淺次第候間、本領之儀者勿論、別而一切之圖於有之者、重賞可令褒美者也、仍如件

天正十年

五月九日

景勝

温井備中守殿

正親町天皇天正十年

七〇一

○上文四月十三日條景勝中條景泰等の乞援に答ふる書に、此節出馬北國弓
箭之可付是非候依之先勢能州長遊佐家中三宅温井其外上條彌五郎齋藤下
野守差越候、今日能州勢打立候とあるに據れば、景隆は、景勝の先鋒にして、此
時既に越中の地にありしこと知るへし、年譜編者景勝能州に入らば、景隆戰
功を勵まさんと請ふとするは、誤解なり、前田創業記前田家譜に據るに、能登
に入るものを長景連とす、蓋是時長遊佐等並に能登に入りしものにして、偶
景隆の書のみ傳ふるを以て、長以下の事蹟を漏らせしならん、

十五日、中景勝越中に入り、天神山に陣す、

〔景勝年譜〕

五月上旬、越中魚津城ヲ、信長ノ軍士相攻メ急難ニ及ノ由注進ニ

依テ、公御出馬ナサレ、同十五日、天神山ニ著陣シ玉フ、敵兵御出張ト聞ヨリ、人數
出サス、遠ク陣ヲ張テ兵士ヲ出シ、戰フ色モナシ、今日御陣中ヨリ富所伯耆守ニ
御書ヲ下サレ、天神山ニ著陣シ玉ヒ、御一戰ヲ遂ラルヘキ所ニ、敵士城壘ヲ構ヘ
出テ接戰スヘキ色ナシ、斯ノ如キノ牀ナラハ本意ニ屬スヘキ事案ノ内タルヘ
シ、何ソ兵力ヲ費サンヤ、其表油斷ナク用心等嚴重ニ沙汰スヘキ旨、仰下サル、其
御書云

能申遣候、仍此表出馬號天神山地押付候、無二可遂一戰之儀様々帶引候得共、
構陣地不取出候、敵取出候者不延歩行可討取候、其上彌引籠候、此上以一挺可
屬本意事案之内候、可心安倍又其表無異儀由肝心候、万端之儀無油斷可申付
事專用候、謹言

五月十五日

景勝

富所伯耆守殿

〔村田清左衛門覺書〕

上杉文
非所藏

宗心様御代之御事

天正十年四月廿日、春日山御立越中、天神山之御陣

〔甲陽軍鑑〕

高坂彈正存生之時申さるゝふ、國持大將の弓矢つよき弱ハ死

後ふしるゝとありつるか、謙信の弓矢強、盛光ハ景勝當五月の手柄なる武勇な
り、子細は能登の内に、景勝ゝハの城あり、甲州勝頼公三月十一日、御切腹あ
りてより、信長越後景勝を、應可有退治と有故、柴田修理を大將にして、前田又左
衛門、佐々内藏助、佐久間玄蕃、徳山五兵衛、柴田伊賀など、云衆を都合四萬五千
の積ふて、加賀越中、能此年廿八歳ふて後詰なり、人數は五千ふて出る、甲州勝頼

切腹ありて、大身の北條家まで頭をかたるけ、奥州迄もひらをしと申、國を隔たる大身衆も手を失ひ力を落たる躰なるふ、景勝越後、佐波二ヶ國ふても少も愁たる色なく、大事は喜平次、我身にかゝりたると思ひ何様一合戦と存つめ、七日路のかりの處を後詰して、天神山、大岩寺野ふ陣取居らるゝ、其下に成願寺川とて、餘の大河にてもなく、中の川あり、是を柴田修理見て、信長にて一の弓矢ふ功者故、謙信の弓矢を能まり、總軍へ觸をまひし堀をほり、土手を筑まかりある、前川又左衛門、佐々内藏助を始各中の柴田修理何とて、か様に慰病なる事を申され候、喜平次人數ハ三千ならては有ましく候とて、殿或時、柴田修理下知を背き、景勝陣取の下成願寺川へゆき、五月之事なるふ、馬をひやし、馬をせめ、四百騎あまりつれて行候へハ、難兵二千餘にてゐさつにかゝつて、景勝を脱、柴田修理ハ功者故、西樓に上りて是を見る、案のとく、景勝衆只三十騎出て盡退散、二三騎切て番す、難人は十四五人も馬にて就ころとす、さすかの内藏助なども、笠のこまとひをひきつめて、にくも士、手なくハ大勢を切おとさるへきに、堀を堀、土手をつき、候故大事なし、柴田修理後各をよひ、る様に有可きと存候處に、土手をつき、堀をほるとて、柴田修理はあしく仰られ候と見かん見申さるゝハ、断なり、其時

赴たる侍大將ハ前田又左衛門能登一國、佐久間玄蕃加賀、佐々内藏助越中、徳山五兵衛、柴田伊賀以下なり、其後景勝衆五騎十騎にて土手きこまで、度々働候、其時節神保殿家中に便て越中に罷在、此城を信長方にて委見申候、

〔前田家譜〕

二月織田公、甲斐ノ國主武田勝頼ヲ伐ツ、三月越中罷言ス、甲ツ伐ツノ師大ニ敗スト、土寇就ヒ起リ所在基時ス、上杉景勝兵ヲ出シ之ヲ助ケ、其將尻高左京、鐵橋左工門等ヲシテ魚津城ニ據ラシム、利家、柴田勝家、佐々成政、佐久間盛政等ト土寇ヲ平ラケ、五月、兵ヲ進メテ魚津城ヲ圍ム、城兵急ヲ春日山ニ告グ、上杉景勝師ヲ卒ヒテ來リ援ケ、天神山ニ次ス、利家諸將ト數騎ヲ以テ出テ將ニ敵營ヲ覘フ、越後ノ兵士之ヲ覺リ來ヲ出シテ來リ薄ル、利家叱咤ス、敵敢テ前マズ、諸將天神山ヲ襲ハント謀ス、成政、盛政先鋒ヲ爭フ、利家曰ク佐々氏既ニ此ノ國ニ主タリ、宜シク先鋒タルヘシ、然レモ佐久間氏モ亦人ノ後タル可カラサレハ、當ニ左右ニ陣ヲ張リテ齊シク進ムヘシト、勝家以下之ヲ可トシ、日ヲ刻シテ天神山ヲ攻ム、

六月丁未

四日、庚辰景勝、森長可の越後を侵せしを以て軍を旋す、柴田勝家、中條景泰

を誘殺す、是日京師の變報至る、勝家、長可等皆罷め去る、

〔村田清左衛門覺書〕

上杉文
書所載

宗心様御代之御事

天正十年四月廿日、春日山御立、越中、天神山之御陣、五月廿七日御納馬、

〔甲陽軍鑑〕

然間、川中島より森勝藏、普高坂、彈正やきせる處まで、越後の内へ勝藏焼働仕る、此一左右をき、景勝越後へ歸られ候、次日信長御切腹なりと申來る、其少前ふ、景勝の、への城をも景勝ひるまゝるを見て、城を渡まとして、左内藏助、能者共皆討殺さる、左右人敷家滅却仕るへき驗あり、

〔管窺武鑑〕

大田切口へ向つ、敵森勝藏、信州ノ高坂源五郎、真田、芦田、小笠原ヲ初彼此相催シテ二萬三千許ニテ働來リ、五月廿八日大田切ノ彼方ニ着陣シ、廿九日己刻取懸ル中、大田切、廿九日一戰、味方關山マテ引退候様子、六月朔日ノ夜、注進ヲ景勝公於越中、被聞召、同日越中表ヲ聞被納御馬候、是ハ味方關山へ引退タレハ、敵競進關山マテモ味方失勝利ヘシ、然レハ勝藏春日山迄働入ヘシトノ御氣遣ニテ如此依之、魚津ノ寄手佐々、柴田悦城中へ申入、景勝今朝當表被引拂候、義森

勝藏大田切口ヲ破リ春日山へ取還候故ト合推察候、各モ是ニ無詮籠城可被仕ヨリハ、城ヲ被渡、旗本へ加勢可爲尤候ト申越、城中衆談合ニ此城ヲ抱持テモ春日山落城ニ及ハ、益ナシ、勝藏信州或ハ甲斐、上野迄ハ、語ヒ集テ働ト聞ヌ、御旗本許ノ後詰危ケレハ我々モ差加可然儀ナレ共、敵ニ被方便出失命ナハ此志モ水ニナリ、此城ヲ枕トシテ可死處ニ命ヲ惜テ城ヲ渡シタリト、アル批判ニアハ、一身ハサテオキ主君迄疵ニナルトテ、同心モセサリシヲ又柴田、佐々方ヨリ各ノ命ノ義ハ下々迄至構間敷候、望ニ任セ人質ヲ渡シ可申候ソレヲ召連ラルヘシト、再三申越就其評議候へ共、春日山ノ儀無心元、加勢ノ者深切ナルヲ以テ六月三日、佐々方ヨリハ甥ノ新右衛門、柴田專齋ハ修理從弟ニテ武者奉行ヲ申付タル剛士也、右兩人ヲ質ニ取、城兵皆三之曲輪へ宥ミテ本丸ヲ佐々ニ渡ス、佐々本丸ヲ請取ト其ママ弓鐵炮ヲ放テ内外ヨリ取包テ越後衆ヲ攻ル、城主吉江織部松倉ノ河田豊前時既に死セリ、此戸山末盛兩城代、此城ノ加勢ノ各十三人、此上ハ力不及トテ右兩人ノ人質ヲ刺殺シ、三ノ丸へ所攻入ノ敵中へ突テ入散々ニ相戰敵ヲ追退ケテ引入切腹仕ル、同心被官ハ思々ノ分別ニ仕レト申置故、何モ言合敵中へ入切死ニ仕モアリ、切ヌケテ越後へ歸モアリキ、魚津終ニ落城

ナリ、敵ニ被方便如此無本意仕合也、扱景勝公ハ同日ニ春日山御歸城、關川ニテ甘數武略ヲ以テ敵被斬崩候ヘ共、于今大田切ヲ塞テ在陣ノ山ヲ被聞召、五日ニハ可有御出馬トノ處、信長父子舍弟信房共ニ六月二日、惟任日向守光秀逆心シテ被弑給由、四日ノ夜中聞ルト、ソノマ、森勝藏大田切ヲ捨テ、信州海津ヘ引入、ソレヨリ上方ヘ上ル、越中ノ佐々内藏助モ魚津ヲ捨テ、戸山ヘ退、柴田修理モ越前ヘ引テ入也、

〔景勝年譜〕

天神山ニ三日御在陣ナサレ入馬ヲ休メ玉フ、然ル所ニ前田又左衛門、佐々内藏助ハ雜兵三千余計ニテ發向シ天神山ノ勢ノ多少ヲ伺フ、兼テ天神山ノ麓ニハ軍備ヲ立ヲカレケル間、此人數ヲ以テ敵兵ノ後陣ヨリ出合セ討テカ、ル、敵兵敗北シケリ、少々歩卒ヲ討取リケレハ彌敵ハ引退キ遠卷シテ在陣ス、味方ニモ軍士ニ下知シ玉ヒ不日ニ弱敵ヲ追退ント軍議一決シ玉フ、時ニ越府ヨリ告來ルハ、信州海津城ニ楯籠ル信長ノ軍士森勝藏出張シ、信州越府ノ境野尻邊○野尻ハ、信濃ノ水内郡ニアリノ在家ヲ放火スルニ依テ、隣里近郷ノ土民騷動スルノ由注進ス、公聞シ召レ、信甲ニハ信長カ軍將在陣シ、越府ニハ新發田五十公野籠城ス、此時ニ當テ一入御心元ナク思召レ、先松倉、魚津ノ援兵ヲ指向ラルヘシト

テ須田相摸守滿親、楠川出雲守將綱、管名但馬守綱輔、岩井備中守信能、其外軍士ヲ殘シ置レ、同廿三日ノ晚景ニ御馬ヲ納ラル、

天正十年夏六月六日、敵兵ハ御歸陣ト聞ヨリ否、魚津城ヲ四方ヨリ攻寄スル、城兵相談シケルハ、縱防戦スルトモ公ニハ既ニ御納馬ト聞ケレハ、重テ御出馬モ間隔有ヘシ、其上兵糧モ絶ケレハ力戰モ叶フヘカラス、然ル後ハ敵士ノ爲ニ生捕ラレ武名ヲ汚ソモ口惜シ、各一同ニ腹カキ切テ名ヲ後代ニ殘ント云、各尤ト一決シ、板札ニ姓名ヲ書付、耳輪ニ穴ヲ明ケ、件ノ姓名札ヲ結付テ、各腹十文字ニ搔切テ同枕ニ死ス、時ニ同月三日ナリ、所謂忠死ノ輩ニハ中條越前守景泰、竹俣三河守慶綱、吉江喜四郎信景、寺島六藏長資、藤沼掃部助泰重、藤丸新助勝俊、龜田小三郎長乘、若林九郎左衛門家長、石田采女正廣宗、安部右衛門政吉、吉江常陸入道宗信、山本寺松三景長等ナリ、然ル所ニ去ル二日、信長ハ惟任日向守光秀カ爲ニ京師本能寺ニ於テ生害シ玉フ、秋田城介信忠ハ二條ノ亭ニテ自殺ノ山、同七日ニ、信甲越ニ相聞エ、信長ノ軍士コレヲ聞ト齊ク、此行誰カ爲ニカ戦ントテ各前後ヲ分ツテ上方ヘ登ルモアリ、領所ニ走歸ルモアリ、分崩離散シテ一日一夜ノ内ニ螻蟻ノ如ク集タル信長勢、今ハ一人モ留ラス、悉皆引退キ、甲州信州、越中

ハ大風ノ止カ如クニ靜謐ス、コレニ付テモ魚津籠城ノ諸士、運命ノ盡ル所、五三日ヲ期スナラハ喜悅ノ眉ヲ開クヘキト、今日猶惜ヌ者ハナシ、松倉在城ノ諸士モ辛キ命ヲ遁レケル、越府ニテ公モ聞シ召シ所々ノ城主ヘ御書ヲ以テ此旨ヲ仰下サル、色部修理大夫ニ御書ヲ下サル、上方ニテ信長生害ニ依テ、越前ノ柴田、賀州、能州、越中ノ者トモマテ悉ク敗軍ス、此節ニ臨ンテ御仕置トシテ御出馬アラハ、一變ニ手裏ニ入ラルヘキ事案ノ内ニ思召サル、ノ由ニテ、件ノ趣ヲ本庄彌次郎方ヘモ仰遣サル、間、定テ相達スヘキ旨ナリ、其御書云

態申届候、仍上方凶事依出來、越前柴田、賀州、能州、越中ノ者共迄悉敗軍候、然者爲仕置可令出馬候、巨碎本庄彌次郎方江申届候間、定而可相達候、謹言

六月八日

景勝

色部修理大夫殿

○本書京師變報の信、甲、越に達するを七日と云、何に據るを知らず、恐くは景勝八日の書に據て推書せしものあらん、上文管窺武鑑、下文前田家譜並に四日と云、蓋此報の西國に達する例を推せし、武鑑、家譜所載其當を得るに似たり、故に之に従ふ、此時松倉在城の諸士も辛き命を遁るとし、上文三州志よは、

松倉城兵等旌旗を張り疑兵を設けて去るとし、管窺武鑑にハ松倉城將等は城を棄て魚津に入り共に拒守すとして之を景勝天神山出陣の前に係けり、然れとも此事他の證とすべきものなく、之を斷する由なし、

〔前田家譜〕

五月、海津ノ城主森長可越後ヲ襲フ、景勝警ヲ聞テ軍ヲ旋ス、諸將機ニ乗シ魚津ヲ抜ク、將ニ與ニ越後ニ入ラントス、六月四日、飛檄京師ヨリ至リ、曰ク織田公父子明智光秀ノ爲ニ弑セラレ上國大ニ亂ルト、是ニ於テ各軍ヲ班ス、

〔利家夜話〕

越中魚津の城を北國の人数柴田殿惣大將にて御取巻の時、景勝越後より後卷心に天神山迄人数出し被申候を、柴田伊賀、佐久間玄蕃、佐々内藏介其日先手を諍ひ被申候、利家被仰分候之處、柴田御出にて此由御聞候て、又左の御入候に、悴共か何事を申と御叱之由、其外色々御物語共御座候、

〔三州志〕

二十三、日、瀧川一益、三國嶺信濃上野、越後ニ到リ、森長一大田切後ヨリ芋川城ヲ陷シ、越後二本木ニ入り、春日山ヲ襲ハント各甲兵ヲ進ムル注進アリ、景勝越中ニ在リ之ヲ聞テ驚キ、二十七日、越後ヘ却ソク、二日トス、六月三日トス、然レハ景勝五月二十三日ヨリ對陣、景勝長寄手多勢、半在松倉城、者退キハ

正親町天皇天正十年

其日數五日也。勝家等此機ニ乗シテ火急ニ松倉ヲ攻ム、魚津城ハ河田豊前、吉江追考スヘシ、勝家等此機ニ乗シテ火急ニ松倉ヲ攻ム、魚津城ハ河田豊前、吉江織部ハ固ク之ヲ守リ、容易ニ拔クヘカラサルヲ知リテ、土肥記ニハ之奇計ヲ以テ柴田專齋勝家ノ弟、佐佐新右衛門成政ノ甥二人ヲ質トシ、城ヲ舉ケテ關領セハ講和ヲ爲ント、城將ヘ言送ル、河田等吾ヲ欺ムカストオモヒ、即チ諾シ、成政ヲ内城ニ延キ河田、吉江ハ外羅城ニ出ツ、即城ノ内外ヨリ河田、吉江ヲ挾撃ス、二將暨ヒ中條越前、寺島六藏等血戰苦撃死力ヲ窮テ斃レ、城遂ニ陥ツ、實ニ六月二日ノ平旦也、北越ニ此時、山口山ノ方ハ攻場アラズ、各自カラ首札ヲ掛ケテ、白殺ストアリ、又江川ハ、魚津ノ下、今米鹽ノ官倉、其邊ニアリ、ヨリ攻ム、守將乃降ル、斯クテ城ヲ取リ、地士ハ丸ノ下、今米鹽ノ官倉、其邊ニアリ、ヨリ攻ム、守將乃降ル、斯クテ城ヲ取正シ、天々、景勝ヲ離ル、向ヒ、魚津城ヘ押寄タル織田カク軍兵ヲ取破リ、又、藩翰譜ニ天ハ、柴田、又、魚津ニ寄リ、河田豊前ハ、天正九年五月、松倉城ニ病死ス、トアリ、然レトモ、茲ニ欺カレ死ス、ト、北國太平記等諸記ニ載スル、今、水江村、山ノ方ニ、四塚村アリ、是ヨリ松倉ノ守兵、城上ニ旌槍ヲ羅列シ、守禦ノ形勢ヲ伴リナシテ、夜越後ヘ去ル、織田方ノ諸將之ヲ知ラス、安リニ近ツカスト云フ、我公ハ然ラストシ、單騎ニテ城下ニ到テ見量ヒ玉フニ、果シテ空城也、因テ斯城、一箭ノ費ナクシテ、城ヲ得タリ、〇十年譜ニ、此魚津役ヲ九年ニ掛ク、然レトモ、諸

〔參考〕

〔景勝年譜〕

五月十日、越中松倉在城ノ士、河田軍兵衛、栗林肥前守、黒金刑部少輔、直江將監、志田源四郎、山田修理亮、上野九兵衛、大石兵部少輔、加地安藝守、山浦源五ヨリ、信州多賀大僧正ヘ連署ヲ以テ、筋ニ鐵砲ノ玉藥ヲ箱詰ニシテ五箇ツカハシ、且告テ云、先達テ越府ヨリ頼置カル、荷物同前ニ差置カレ玉ハルヘキト申シ送ル、則預リ置御用ノ砌遣ハスヘキトノ返翰ナリ、斯ノ如ク信州ニ兵器ヲ差置カルル事ハ、勝頼滅亡シ、甲信ノ諸士多クハ越府ニ志ヲ通ス、公モ時日ヲ伺玉ヒ御出馬有ン爲ナリ、此大僧正ハ代々越府ニ内議有テ、兼テ諸事御祈禱致サレシカハ今又斯ノ如シ、其返書云、

芳徽辱存候、仍鐵砲玉藥之箱五箇被遣候、從越府預置候荷物同前納置候、不依何時御用之砌可被仰聞候、然者今其地御在陣之由、各御所勞察入存候、因茲御祈禱之儀蒙仰候、具得其意候、涯分可抽精誠候、就其護摩卷數銘々令進入候、猶以朝經、暮咒、勤行無油斷武運長久之丹誠、不可有一心候、隨而凶徒進退之儀御使江申合候間、可有口上候、恐々謹言、

五月十日

多賀大僧正

正親町天皇正十年

七二三

- 河田 軍兵衛殿
- 栗林 肥前守殿
- 黒金 刑部少輔殿
- 直江 將監殿
- 志田 源四郎殿
- 山田 修理亮殿
- 上野 九兵衛殿
- 大石 兵部少輔殿
- 加地 安藝守殿
- 山浦 源五殿

〔三州志〕

景周曰、此一段、武徳、太平、北越、太平、前田、北陸、等諸國、志、機、田、所、
 紀、本、朝、三、國、志、武、徳、太平、北、越、太平、前、田、北、陸、等、諸、國、志、機、田、所、
 五、折、反、シ、此、本、文、曲、筆、ノ、濫、節、更、ニ、小、器、二、百、年、前、ト、ナ、景、周、之、全、ク、病、ミ、今、諸、
 且、坊、本、魚、津、松、倉、二、城、ヲ、ハ、ス、恐、ク、ハ、組、歸、ル、炭、者、ノ、他、邦、頭、鼓、掌、ヲ、其、地、招、ク、
 間、ノ、口、談、ク、魚、津、城、主、ト、モ、ハ、成、政、計、策、ニ、テ、坂、川、ヒ、有、シ、是、ノ、他、邦、頭、鼓、掌、ヲ、其、地、招、ク、
 音、ニ、曰、ク、魚、津、城、主、ト、モ、ハ、成、政、計、策、ニ、テ、坂、川、ヒ、有、シ、是、ノ、他、邦、頭、鼓、掌、ヲ、其、地、招、ク、
 ミ、ク、但、捨、シ、ト、余、仁、傳、ヲ、以、テ、又、持、返、ス、カ、成、政、計、策、一、年、ノ、十、一、年、テ、魚、津、城、ヲ、固、ク、
 加、地、安、藝、守、殿、大、石、兵、部、少、輔、殿、山、浦、源、五、殿、

肥、引、殿、入、富、山、津、城、ニ、テ、力、ヲ、合、セ、十、年、ノ、冬、中、ハ、同、記、城、ニ、景、勝、リ、ヨ、リ、有、サ、ル、成、政、モ、雪、中、ニ、成、
 正、十、年、六、月、ノ、義、同、九、月、ト、ア、リ、然、レ、魚、津、城、固、ハ、一、年、ト、ア、リ、同、十、一、年、四、月、ノ、以、
 文、正、十、年、六、月、ノ、義、同、九、月、ト、ア、リ、然、レ、魚、津、城、固、ハ、一、年、ト、ア、リ、同、十、一、年、四、月、ノ、以、
 下、文、ト、見、レ、ハ、此、説、引、證、確、ニ、シ、キ、カ、然、レ、魚、津、城、固、ハ、一、年、ト、ア、リ、同、十、一、年、四、月、ノ、以、
 也、後、哲、是、ヲ、選、ヘ、テ、六、月、二、日、明、智、光、秀、京、都、本、能、寺、ニ、テ、信、長、公、ヲ、弑、シ、又、信、忠、君、
 ヲ、追、撃、シ、二、條、城、ニ、テ、弑、ス、ル、旨、騎、置、ヲ、以、テ、同、三、日、越、中、ニ、告、勝、越、後、へ、歸、ル、
 ア、リ、此、告、諸、將、愕、然、惘、然、タ、リ、諸、兵、卒、ノ、駭、擾、筆、舌、ニ、盡、ス、ヘ、カ、ラ、ス、因、テ、諸、將、各、越、
 ノ、陣、ヲ、引、キ、或、ハ、上、洛、シ、或、ハ、分、國、ニ、退、ク、一、説、此、時、魚、津、邊、ノ、上、杉、家、ノ、黨、上、方、
 邊、シ、テ、至、テ、歸、リ、向、川、邊、攻、テ、進、拂、フ、津、城、ヲ、守、
 六、月、朔、丁、亥、

二十三日、肥畠山氏の臣、温井景隆、三宅長盛等、上杉氏の兵を假りて、能登
 を襲はんとし、是日、越中の妻良浦に上り石動山に入る、後利家及佐久間盛
 政に敗られて死せり、

〔太閤記〕 昔日、信長公に己之國を追出されし諸侯、大夫、或庄官、或一揆大將等
 多き中に古しへ能州の守護畑山修理太夫義則之八臣、神保安藝守、長九郎左衛

門尉温井備前守三宅備後守平式部遊佐混田伊丹など云て有しか近年遊佐温井三宅は長尾喜平次景勝を頼み越後也温井之郎徒小南内匠筒井雅樂助廣瀬隼人正山庄藤兵衛尉三宅か郎徒鳥藏内匠小山田甚五兵衛など云勇略兼備りし者有し也石動山衆徒中の溢者共方より遊佐温井三宅方へ云送りけるは信長公不慮に今月二日於京都亡ひ玉ふなり其國へもとや聞え申べく候此節おぼしめしたち御入國あれかし随分合力し如前に樂可申談通使僧口上に其沙汰委し彼人々是天之あたうる所の幸なりと同心し其旨及返章けり石動山密々のとに堅くこしらへしか共衆口は制し難き故にや有けん温井三宅事石動法師共と心を合せ本國縁住の望をなし近日歸國の沙汰有然るにより能登守護前田又左工門尉より柴田修理亮勝家同甥にて侍る佐久間玄蕃允兩人へ、應以書簡伸恩意畢仍雖不實之義候能登之國士温井三宅兄弟近年在越後と云共就信長公之義窺時節語越後勢成歸國之望由衆口同音申鳴候若於事實者注進次第御加勢奉頼存候恐惶謹言

六月十九日

前田又左衛門尉利家

柴田修理亮殿

佐久間玄蕃允殿

人々御中

匠作玄蕃何も不寄何時注進次第早速可令出張旨委及返章けり、温井三宅思ふやう石動よりの使僧所願之幸也及遅々なは其沙汰廣く成行不意を討ん便も宜しかるまし、いざらば急き入國せんとて景勝より合力勢を申請三千余の勢を催し船に取乗りおし出し、天正十年六月廿三日曉方越中國免良之浦に着岸し、石動山へ同日夜半斗に着し、衆徒等にあいぬ、其比前田孫四郎利家は越前府中に在、父利家は能州七尾に在しか急き石動へ取かけ打果さんと息まきていらてけるを、家老共諫るやうは越後勢數多参りたる由也、懇の事を仕出し敵に氣を付玉ふては不可然の條急き勝家並玄蕃允へ内々被相談候つる、加勢之義飛脚を差越され宜しく可有之旨達て申ければ、應其義即以飛札被申けるは

先日申談候遊佐温井三宅昨日廿三日、越後勢同道仕、石動山へ取入、近邊荒山と云所を要害に構へ候はんと今曉歟初之山中來候、今明之間不去兩葉可用、斧柯覺之、早速於御合力者可爲本望候、恐惶謹言

如此認め、六月廿四日早天に申入けり、

〔三州志〕

能登石動山、天平寺の狡僧、石動山ハ能登分界ノ地ニアリテ、最高門
カノ道ヲ殺シテ介介ノ骨ヲ多シ、且平日温井三宅ハ人民ヲ苦シム、故ニ歸其軀ニメ
頃ヲヒテ、客我公石動山邊ニ至リテ、暴雨滂沱タリ、狡僧空シク中ノ途ヨリ歸山シ、志
ナ失ヒ、尤多シ、天其人ヲ助ケル者疑フコト和漢古、姦計ヲ温井景隆、三宅長盛ト
今此類尤多シ、天其人ヲ助ケル者疑フコト和漢古、姦計ヲ温井景隆、三宅長盛ト
後ニ澄居ス、合セ、能州ヲ奪領セントス、中、斯テ狡僧、猶虎狼心ヲ懷キ一人ノ辨僧
ヲ越後ニ間行セシメ、温井三宅ノ爲ニ公ニ敵セント姦策ヲ言送ル、景隆等拊躍
シテ喜ヒ、渠カ爲メニ援兵ヲ景勝ニ乞フ、景勝乃介士ヲ與フルコト若干也、因テ
温井三宅カ將山庄藤兵衛、小南内匠、筒井雅樂、廣瀬隼人、鳥藏内匠等軍儲ヲ議シ
甲兵三千ヲ率イ、兵艦數十帆ニテ本月廿二日、太閤記、作ノ黎明ニ越中妻良浦周
郡ノ大泊村トノ間ニ女真ト昔テメラト唱フ、射水郡ニカキ、又日羅ト昔ク傳寫ノ
案誤シテ後能登ノ古地圖ニ得ル也、此圖ニハナシ、ニ到ル、是ヨリ石動山ニ上リ、天
平寺ノ般若院、伏存、大宮坊立、玄接トモ、般若院ノ石動山、兼、能、一、本、加、大、宮、坊、萬、存、院、等
ト商議シ、廿四日堡障ヲ荒山ニシテ、鹿島郡ニ覆テ、又新山ニモ作ル、此山ト形、四方ニ
方ハ射水郡小瀧村ノ高地也、此山ノ腹通リ、岸川村ヨリ越中道、是ヲ荒山越ト云、此
荒山ヨリ北ノ方ヘ高低三十町許、登ンハ石動山也、芝峠ト云フモ、此間也、又一圖

ニ般若院ノ勝山ハ石動山ノ北ニ、川村ノ領也、此山ニモ、末森記等ニ此荒山ヲ勝山
ト不詳、荒山ト混ス可カラズ、或ハ、荒山ハ石動山ヨリ一里モト云、般若院、勝山
キト者、猶予能州古墟考中ニ詳也、一書ニ、荒山ハ石動山ヨリ一里モト云、般若院、勝山
酒ノ地アル所ト云、築キ、堞外柵、過半成テ、日既ニ哺ルヲ以テ、天平寺ニ歸ル、此略、下
山ヲ家ヲ左久間盛政ノ報、石動山ノ攻めしこと、な、叙す、今之を、略す、の、荒、爰、ニ、井、津
木、彈、正、淨、正、江、淨、定、曲、景、勝、ノ、命、ヲ、承、テ、三、千、人、一、作、ハ、ヲ、帥、ヒ、艦、ヲ、放、チ、越、中、ノ、窟
ケ、島、ニ、ス、シ、ナ、リ、一、本、五、島、ヲ、界、ノ、大、境、村、ヲ、向、ニ、見、ユ、ル、島、也、女、真、ナ、ト、モ、此
ト、島、マ、ラ、至、リ、温、井、三、宅、ヲ、救、ハ、ン、ト、ス、ル、ニ、既、ニ、皆、斃、レ、ヌ、ト、聞、テ、越、後、ニ、歸、ル、ト、云
フ、

七月 朔丁巳

三日、己景勝、信濃に入らんとし、佐々成政の虚に乗じて兵を出さんとす
を聞き、岩井信能等を信濃より招きて、春日山を守備せしむ、

〔景勝年譜〕

天正十壬午秋七月三日、信州ノ御仕置トシテ御出張アリ、是、ヨリ

先、信甲ノ諸士、越府ニ志ヲ通シ、公ノ御出馬ヲ相待ケレハ、農夫市人モ其職ヲ安
堵セント、悦フ事カキリナシ、同日岩井備中守ニ仰越サル、今日御出馬ニ依テ、佐
々内藏助定テ今度出張ノ御留守ヲ伺ヒ、西濱ノ地ニ相働ヘキト巷説アリ、然ハ

彼地利ニ差置ル諸士並ニ春日山ニ御殘シ置ル諸將ニモ、手堅ク御下知アリ、然
リト雖元御留守中心元ナク思シメサレ尤他國ノ聞ヘアレハ、其許ニ差置ル人
數召シ連レ春日山へ着陣スヘキ由嚴命此アリ、其御書云

急度申遣候仍佐々内藏助爰許至于留守中西濱親地可相助之由風説候彼地
利差置候者共、又者春日山殘置侍共茂手堅雖申付候、留守中之間無心元候、他
國江之覺候條其元人數召連春日山着陣尤候、謹言、

七月三日

景勝

岩井備中守殿 ○岩井備中守、名は信能、上杉守と共に見ゆ、是より先、景勝、信能をして半川越前守と共に見ゆ、是より
守らしむるにあり、此時、彼之を信能より招きし招かれたるへ、命せし書に
は、信能上倉治部少輔と連書すれば、上倉も亦共に招かれたる守備を命せし書に
へし。

七月六日、越府御留守居ヨリ御陣中へ注進ノ赴ハ、佐々内藏助越中西濱筋ニ相
働ニ付テ、岩井備中守、上倉治部少輔ニ人數召具シ早速府内マテ着陣ノ山中上
ル、此ニ依テ備中守、治部少輔ニ御書ヲ以テ外様ノ者トモ召連レ不日ニ府内マ
テ着陣ス、誠ニ深志厚情他ニ異ナリ、彌各相談シ堅固ノ備專要也、從軍ノ諸士ニ
至ルマテ別シテ勞煩タルヘキト思シ召サレ、此旨面々懇ニ申シ達スヘキ山公

命アリ、其御書云

到于西濱筋、佐々相働之由、春日山留守居之者共申届候付而、外様之者共召連
早速府内迄着陣之由、感悅之至候、彌無油斷各令相談、堅固之備任入候、謹言
猶々、何茂同陣之者共大儀之由、可申届候、以上

七月六日

景勝

上倉治部少輔殿
岩井備中守殿

○上倉治部少輔の名、文書所見なし、七月十五日條所收の北越軍記に治部
少輔名は純長、海津羅城守將なりとあれば、則亦信濃に居りし人なり、
五日、辛酉越中の士神保昌國、齋藤信則等書を樋口兼續に遺り、景勝の來援を
乞ふ、

〔景勝年譜〕

七月五

同日、越中ノ諸士神保宗二郎昌國、齋藤次郎右衛門信則神保近江

入道増也、鹽井宗八郎職清、唐人式部大輔親廣、寺島平九郎信鎮、小島六郎左衛門
入道全安方ヨリ樋口與六、狩野新介所マテ書札到來ス、其赴ニ云、今般御出陣ニ
付テ信甲ノ兩州殘ル所ナク御手ニ屬シ、其上關左表儀日ヲ逐テ申寄ノ旨、兵威

正親町天皇正十年

正親町天皇天正十年

七二二

ノ向フ處誰カ敵センヤ當國ノ儀度々松倉ノ鎮將須田相模守マテ相通ス定テ
上聞ニ達スヘシ早速使者ヲ以テ言上スヘシト雖モ所々ノ口留殿敷故延引ニ
及ヘリ千言萬句當上旬ノ内ニ到テ此境ニモ御出張此アルニ於テハ能州賀州
モ思召ノ儘ニ御手裏ニ屬スヘキ事眼前ナリ則一書ヲ以テ樋口與六兼續狩野
新介秀治マテ此ヲ呈ス其書云

急度致言上候其國被立御馬信甲兩州無殘所被入御手殊關左表之儀茂段々
申寄之由誠天下之御名譽無申迄候隨而當國之次第度々須田相模守殿迄申
上候通定而可被達上聞候早々以使者可申候處殿御口留之儀候間乍存無其
儀候此國計策等之儀須田申談候千言萬句盆前於御出馬者能賀迄御一變眼
前候委曲樋口與六殿迄申上候赴宜預御披露候恐々謹言

寺島六郎左衛門入道
全安

七月五日

寺島平九郎
信鏡

唐人式部大輔
廣親

鹽井宗八郎
職清

神保近江入道
増也

齋藤次郎右衛門
信則

神保宗次郎
昌國

樋口與六殿
狩野新介殿

人々御中

八月
朔 戊

成政、土肥政繁を弓庄城に攻む、

正親町天皇天正十年

七二三

〔三州志〕

九 磯 藤 餘 考

八月六日、佐々成政利兵ヲ以テ土肥美作守政繁ノ弓庄城

有淨俊貞曰、永祿元龜天正中ニ至リテ越中國新川郡ノ内弓庄ノ城主土肥美作守政繁ト云ハ、往昔源賴朝公ノ舊臣ト云云然レトモ何レノ代ヨリ越中ノ相繼セシタルヲ知カス、古記録ニ、越中國城主ノ内、土肥ノ名ヲ新川郡ハ大牛ノ領シ、政繁初ノ居城ハ平四郎ト云、新川郡ノ古江紀ナ、按スルニ土肥左衛門藤原大郎等皆同郡ノ稻村城ニシ、肥源七郎コトハ予カ越中古城ニ詳ナリ、藤田丹波ノ政繁討テ出テ白倉豊丞ノ政繁ト鎗ヲ合ス、是ヨリサキ、政繁土肥平介繁時ノ二男ニテ、ヲ送リテ質タラシム、成政之ヲ弓庄城外ニ磔ニス、此跡ナ今城兵怒リテ城門ヲ發シ尸ヲ奪テ入ル、按スルニ今年六月二日、河田豊前、松倉城ニ破モ信長公ニ屬ス、然ルニ信長公今年六月生害ニ依リテ、又景勝ニ從ヒシヲ、成政怒リテ弓庄ヲ攻ムルナリ、景勝ヨリノ書ノ寫、土肥家記ニ從ヒシト云フ、十一月八日夜、政繁府兵ヲ率テ發シ安城ヲ安住城ナリ或云ニ到リ、火ヲ放チ太田新城新川郡ニアリ、予越邊ニテ成政ノ軍ヲ撃チ朽屋半右衛門ノ政繁加藤大藏ノ將ヲ討取ル、四月五日、成政精甲ヲ以テ再ヒ弓庄ヲ圍ミ東北ニ四堡ヲ築ク、因テ城兵モ出撃スルコト日ニ五七タヒ也、政繁援ヲ景勝ニ乞フ果サス、五月五日夜、城兵擧テ出テ成政ノ軍ヲ撃チ朽屋ハ田代與五郎ノ士ト合槍シ、藪田丹波ハ敵將ノ首ヲ斬ル、有澤五郎三郎ノ政繁奮闘シテ、重創ヲ被ル、成政是ヨリ又城

ノ四面ニ虎落ヲ作り城兵ヲシテ出ルコト能ハサラシム、依テ城兵輟爾ノ思ヲナス、後諸ナキニ百日許堅固ニシテ陷チヌト、土肥家記ニ登セリ、此時ニ當リテ秀吉、勝家ヲ滅シ加州へ出軍シ各城ノ守制ヲナス、成政ハ勝家方ナリシヲ以テ大ニ懼レ秀吉ニ降和シ女ヲ質トス、因テ本領安堵シテ富山城ニ居テ許サル、景勝モ亦秀吉ニ通スルカ爲メ、成政ト政繁トノ格闘自然ニ無根ノ事トナリ、景勝遂ニ成政ト講和シ、政繁ハ妻孥諸士ヲ引從へ有澤采女有澤圓三助ノ弟也、此時按スルニ今婦真郡有澤村ニ館跡アリ土人云有澤采女居セシト然レハ此所ニ居セシナラシ有澤ノ族多キカ、泉達録等ニ有澤孫六郎忠治其子忠福等ヲ載セリヲ以テ約信ヲ堅メ、越中境邊ニテ互ニ人質ヲ取カハシ、政繁ハ越後ニ去ル、然ルニ景勝ハ政繁ノ越中ニ在シ時ノ懇心ニ替リ待遇疎略僅カノ扶助ニテ政繁譜第ノ士百餘人ヲ養ヒ、日月ヲ經過ス、景勝ノ先鋒トシテ越中境城ヲ攻ルコトアリ、其後十八年マテ、越後能生ニ在テ病死ス、男子四人アリ、半左衛門平介、次郎兵衛、傳左衛門ト云、此ヨリ後ノコトハ、土肥家記ニアリ、

〔參考〕

〔土肥氏系圖〕

土肥美作守政良公、於北島逝去之所以者、天正七年、春別從信長公、政良公之所領可爲沒收、成政下知、其故天正五年越中五十余萬石者悉從將軍信長公、賜富山之城主佐々内藏介成政爲領地也、依之山見庄館之城主政良

公之所領可爲沒收旨雖以上使入申更不承諾重以杉山小助雖入申曾不爲許容政其公之所領雖有二十一里土肥七騎之第一城而其勢信長公之所憤嫉者政故歟亦外有憤故歟推知攻本願寺事憤歟總領五萬七千石也

良之主從歸依於真宗本願之味方而信長公之爲怨敵故憎嫉彌深依之令成政攻伐政良公者也佐々成政爲下知雖入申再三更不承諾依之內藏介成政憤怒頻也故天正七年己卯三月十五日欲及合戰引率軍兵三千余騎三月十四日晚在日置野佐々內藏介成政佐々平左衛門杉山小助菊池伊豆守前野小平中川增藏永沼右近浦野津太夫本庄青七久世又兵衛木村助作福岡與四郎益木中務丞建部兵庫頭安田將監構陣屋十五日寅之一天舉攻時聲鳴陣大鼓等聞之城中大騷動成政勢渡辰之上刻白岩川唯一戰爲責壞勢如龍虎也於于此城中禦警守護之人々及領地之勇士千二百余人川向出立雖爲防禦難敵對然隆光俊重正時好宗章宗等爲戰死之勇拒諍合戰終及日暮味方多戰死十六日七百三十六人而爲合戰唯時資生照晴好宗等一戰敗亡戰死十七日籠城內漸二百騎雖爲小勢定軍令決議曾不降參成政勢卯刻攻寄基弟隆林開城門走敵陣四方八面伐立數人雖伐探首勢盡惜哉大事勇者爲成政被刎首畢見此分野政良公大爲愁歎向隆光等謂云我生无甲斐死欲洒土肥氏耻辱故可生害隆光諫云戰場者雖先陣有失利後陣得利

事甚多故忍落此地移於松章軒可被成正時汝隨我言主人御供奉可致潔清申述故主從忍落決入松章軒爰成政之勢攻入城內味方散々敗亡然長谷川俊重踏止城門雖身方勢數不足二百騎曾不降參其勢強盛故成政感勇功舉大音曰汝等勇力忠臣實有羨戀故直降參與厚爵祿掃部隆光俊重章宗久高長方等同時各罵曰汝成政大賊國敵不知禮義人倫之義理不知故猶強狗犬丈夫人倫奉事君忠義決无二心雖此首墮於大地不從大賊之狗我等生則土肥之臣也死後爲鬼怨念欲滅亡汝石者雖有破碎更不改冷性我身體雖爲破裂逆賊不降成政聞之大怒武兵可勇可爲進責伐寄來有澤掃部長谷川俊重上田章宗等討死決義奔走入敵陣如醉象處向首无不伐取數多雖伐取於首惜哉遂戰死又爰有澤正時實父依掃部之遺詞雖悲泣離別之淚濕袂美作守政良及政平公政常公同道而忍落過去道程十丁許而觀觀城中城內焰々火勢甚強剩在大南風一時殿屋悉成灰塵也嗚呼傷哉先代土肥實平公十餘代之舊地城跡一戰敵有矣遂主從四人忍落入來松章軒也政良公者忍落於越後國爲風評而隱身松章軒矣于時美作守政良公與政實公與正時公共同從男甥而親緣不淺又政平公政常公與政實祖父孫而親緣又先代廟所及善提寺故潛忍入於北島此砌又有北島村名富樫勘兵衛親恒者親之末孫也

從來之采女正時者、知音講中之事、故親恒勸住居、又領主政良公者、從來之有洪恩、故盡无二之懇念、述此地滯留之義、依之座觀浮生之憂惱、令欣求樂邦之常住、依之更委隱名、主從共同住居於松章軒矣、然天平命乎、纔不過四旬、至定業故歟、政良公忍住居此地之事、聞達成政、依之天正七年四月十八日、爲生捕政良公、引卒軍勢、成政之兵、周匝於寺、故遂逝去、畢悲哉爲生害也、實子若壯之兩男、此日奔而趣、加能兩國之間、雖同道走、未知住所、政實公深爲悲哀也、然天正九年之秋、承傳風聞、大歡喜、其故實、父生害之後、兩子同攻、伐於成政、社度念願、有骨肉、故奔走之日不遑、而御大守前田利家卿、御勤仕奉申上度旨、願上候時、直御承諾、被爲遊致御勤仕居候旨、承被申候、故深致歡喜、被居候由、政采公被申候、雖然惜哉、二子共戰死矣、傳聞也、依之于今、無音信者、全是戰死之故也、雖然血脈不斷、絕、加州土肥氏是也、

九月丙辰

四日、己加賀の士、蜷川新七郎等、景勝に通し、越中の國境に屯す、景勝答書を與へて赴援を待たしむ、

〔景勝年譜〕 同月四日、賀州ノ士、蜷川新七郎、廣瀬四郎、二郎、奥彦四郎、長谷川兵七郎、高梁孫左衛門、山本若狹守、高新左衛門ニ御書ヲ下サル、去月八日ノ書札、當

月三日ニ到來、御披見ノ處ニ各越中境ニ屯シテ門跡ノ逆徒ヲ相守ルノ由、御感悅少カラス、此ニ依テ御出馬ノ義兼テ初秋ト定メ置ルル處、越中ノ諸士色々申シ寄ル子細此アリ、其首尾相調フ間、今ニ於テハ御延引ナリ、近日軍議調フヘシ、然ハ當月中ニ御出馬有ヘシ、其間堅固ノ仕置肝要タルヘシ、並ニ當方ノ義會テ疑心ヲ起スヘカラス、前代以來賀州別テ入魂ノ筋目、今以テ御見除アルヘカラス、兎角越中ノ士申通ル様子、今ヨリ首尾調フヘキ間、御出馬ニ於テハ何ソ敢テ遲滞ニ及ン其砌、和圖ノ狼煙必立ラルヘシ、火ノ手ニ從テ手合セ専用ノ旨、仰下サル、其御書云

去月八日之書札、今月三日到來、儘見届候、皆々越中境、堪忍門跡、手前相守之由、心地能感入候、仍當方出馬之儀、初秋相定之處、越中之諸士共様々申寄子細共候間、其旨赴首尾調之間、於于今延引之様候、近日時宜可相調候間、當月中必可令出馬候、其間之儀如何、茂堅固之仕置肝心候、將亦當方之義無心元存間、敢候、縱如何様之儀候、其前代以來賀國入魂之義候、間見放義有間布候、此段有疑心者、不可有曲候、兎角越中之者、共申寄様有首尾押付可相調候、於出馬者、令必定候間、彼刻從火先、手合専用候、恐々謹言、

正親町天皇正十一年

九月四日

景勝

七三〇

蛭川 新七郎殿
 廣瀬四郎二郎殿
 奥 彦四郎殿
 長谷川兵七郎殿
 高衆孫左衛門殿
 山本 若狹守殿
 高橋新左衛門殿

天正十一年癸未

和元二十二年
百四十三

二月甲寅

七日、庚申豐臣秀吉石田三成等に命して、書を上杉氏の家臣に贈り、景勝をして兵を越中に出さしむ。

〔景勝年譜〕

二月七日、羽柴筑前守秀吉ノ臣石田左吉三成、木村彌市右衛門清久、増田仁右衛門長盛ヨリ秀吉ノ命トシテ數箇條ノ覺書ヲ以テ西雲寺ノ住僧下國ノ序信州貝津城主須田相模守滿親マテ持參ス、近來景勝ト家康ノ御間、他

日和陸アラハ秀吉別シテ馳走コレ有ヘシ、若秀吉ヲ表裏ト猶預アラハ誓紙ヲ取カハシ底蓋ヲ顯スヘシ、又氏政ト景勝御間小田原ニ御存分アラハ秀吉向後氏政ト誓札ノ通路有マシキナリ、第一不日ニ越中御人數ヲ出サレ然ルヘキ由懇切ニ申シ來ル、其辭更ニ疎謾ニ非ス、滿親ヨリ言上並ニ覺書云

覺

- 一 景勝家康御間柄之儀若被仰分於有之者、筑前守是非可致馳走事、
- 一 筑前守表裏與於思召者、如此誓紙御取替候共不及申、此度可有御違變事、
- 一 氏政、景勝御間柄之儀、對小田原御存分有之者、於當方、茂書狀取替有之間布事、
- 一 從此方誓紙其方如御好之、多賀之牛王而無之、熊野牛王而書被進之事、
- 一 先越中被出御人數、急可有御手遣之事、

以上

二月七日

増田仁右衛門

木村彌市右衛門

石田左吉

西雲寺

正親町天皇正十一年

七三一

二十五日、秀吉加賀を徇ふ、成政降を乞ふ、秀吉、利家に加賀の石川河北二郡を加へ、金澤城に治して越中を鎮せしむ、

〔毛利文書〕

廿五日、賀州江出馬諸城雖相踏候、筑前守太刀風ニ驚草木迄も相靡躰よて候ニ付而越中境目、金澤と申城ニ立馬、國々置目等申付候、内々越後長尾出入質、筑前次第令覺悟候之條令赦免、○五月十五日、秀吉、早川左衛門佐に復する書なり、前後略す、

〔前田家藏古文書〕

禁制

賀州

野田村

おしや辻

一 當手軍勢甲乙人、亂妨狼籍事

一 放火之事

一 還住百姓成煩事、付小屋壞取事、

右條々堅令停止訖、若違犯之輩在之者、忽可處嚴科者也、仍下知如件、

天正拾一年四月 日

筑前守(花押)

〔秀吉事記〕

四月

二十五日、秀吉賀州有出馬、叛者討之降者近之、山川洞岳難所之地如草葉隨風一掃歸服、故越中境目金澤城滯留、北陸新屬之國々改旋專政道其刻越後守護長尾喜平次景勝、秀吉成降屬幕下之條取人質、

〔太閤記〕

一 賀州表御出勢之事

廿六日に、加賀國御仕置乃をめ下向有しり、五三日滯留し利家に金澤之城より石川河北兩郡を相添賜す、

〔小早川什書〕

先年柴田對天下企逆心、至江北罷出候處、被途御一戰、悉被討果候、陸奥守も柴田令一味之條、同事可被加御退治與思召、既加州金澤迄被寄御馬之處、走入種々御佗言申上付而、被助置剩越中一國被仰付候、○下略末二十月十四日、淺野彈正少右衛門長盛判、安國寺小早川藤四郎殿トアリ、後年ノ書

〔三州志〕

小松城

景周先祖治部左衛門景政へ國祖ヨリ天正十一年四月廿七日、賜ル御書ニ廿五日小松ノ城我等請取久太堀也、秀へ相渡候、人數足弱以下千代

マテ遣シ、彼城ニ我等十人計附置、廿六日至宮腰著陣候、金澤城今日可相果様子ニ候トアリ、

〔前田創業記〕 因秀吉到加州、金澤守兵請赦宥降秀吉入城、佐々成政亦恐懼秀吉權勢、以女爲質、約盟、從秀吉、劔々畏秀吉、亦收公之先領府中、割加州、而賜河北石川二郡於公、而歸大坂、

〔前田家譜〕 秀吉利家ヲシテ加賀ヲ徇ヘシム、諸城皆下ル、秀吉利家ニ謂テ曰、君宜ク河北石川二郡ヲ并セ領シ、尾山ニ徙リ治スヘシト、秀吉退テ左右ニ語リ曰、前田氏以テ敵ト爲セハ、勅ニシテ當リ易カラス、以テ與國トナセハ、終始頼ムヘキナリ、佐々成政越中ニ在リ、反側尤モ信ナキ者、今余レ前田氏ヲ尾山ニ置ク、復タ北顧ノ憂ナシト、乃チ振旅シテ還ル、是ニ於テ利家遂ニ尾山城金澤ノニ徙リ、佐一久間氏ノ苛政ヲ蠲キ、寛簡ノ治ヲ施ス、統内ノ者悦服ス、

八月庚戌

二十日、己巳成政婦負新川二郡の地を佐々與左衛門に與ふ、又立山祠に寄田して祭祀を懈ること勿らしむ、

〔古文書〕土佐國志前集殘簡

知行方目錄事

- 一六拾七俵之所
- 婦負郡堂村、寺井谷
- 一四拾五俵之所
- 同郡禰の上村、北谷村、そて村、谷村
- 一參百六拾俵之所
- 同郡西きり谷、東きり谷、赤藏
- 一參百參俵之所
- 同郡黒瀬内宮の越村上、黒瀬小原、瀧之口
- 一參百六拾六俵之所
- 同郡黒瀬村
- 一四九拾貳俵之所
- 同郡黒瀬内岩屋村
- 一四八拾俵之所
- 同郡黒瀬内小永谷、兩むかい
- 一六百貳拾壹俵之所
- 同郡下篠原村
- 一貳百九拾俵之所
- 同郡上篠原
- 一貳百五拾俵之所
- 同郡名河原村

- 一八拾五俵之所 同郡井波村
- 一貳百八拾貳俵貳斗所同郡之谷こかこ
- 一五百四俵貳斗所 同郡下條
- 一二百六拾俵之所 同郡小泉村
- 一五百五拾四俵之所 同郡こぶく
- 一六百拾五俵之所 同郡田島
- 一六百七拾參俵之所 新川郡西大森
- 一千五百俵之所 婦負郡さくら村
- 以上七千五百俵者
- 一貳千五百俵者 本地分

右全知行不可有相違候次知行にけ夫分之事相給人與令相談應高以無甲乙之様百姓ニ申付可取分之其上成政江相尋可爲落着者也仍狀如件

天正拾壹八月廿日

佐々

成政(花押)

與左衛門殿... 右文書佐々祐兵衛藏

今按婦負郡新川郡共在越中國成政號佐々陸奥守任從四位下俸從領越中國居外山城天正十五年封肥後國々中起一揆不從其命秀吉怒奪其國天正十六年五月十四日於攝州尼崎自殺

〔越遊行囊抄〕立山權現勤行無懈怠旨被申越之通承届候彌不可有油斷候就中立山之儀從神代後無其隱堂建立並祭禮如先規可被入情之越廿三入之請判得其意候就其爲新寄進岩倉之内三百俵以寺田之内百五十俵合四百五十俵全不可有異儀候若堂塔橋以下大破ニ付而者可被相届候旨急度可申遣候仍狀如件

天正十一年八月廿日

佐々内藏助 成政判

- 院主御坊 寶堂本願 蓬門坊
- 長吏御坊 員林坊 榜嚴坂

正親町天皇天正十二年

七三七

千光坊	花藏坊	中道坊
常住坊	財知坊	覺乘坊
惣持坊	明靜坊	實藏坊
藏積坊	多賀坊	玉藏坊
日蓮坊	無勒坊	實犯坊
玉林坊	一乘坊	以上廿參人

天正十二年甲申 百四十五元二

三月 朔 庚寅

十三日、庚寅秀吉、織田信雄と隙を生じ、將に軍を尾張に出さんとし、書を丹羽長秀に贈り、利家を援けて成政に備へしむ。

〔武德編年集成〕

是日、秀吉ヨリ、越前加賀若狹三州ノ大守丹羽越前守長秀カ方ヘ一箇ヲ贈ル、其趣ハ足下分國ノ手置肝要也、且其附庸加州金澤ノ城主前田又左衛門利家ニ援兵ヲ遣ハシ渠ヲ以テ佐々ヲ歴ヘン事懈ルヘカラス、近日秀吉軍ヲ尾州ニ發スヘシ、蜂須賀彦右衛門家政後阿波守ニ任其兵二千ヲ以テ大坂ノ留守トシ、泉州岸和田ノ城ニハ中村式部少輔一氏三千ヲ以テ守ラシムト雖、根來、

雜賀ノ賊徒大坂ヲ伺ハントスル故、蜂須賀小六至鎮産右衛門カ嫡子前野將右衛門長康、後但馬守ニ任、後阿波守ニ任黒田吉兵衛長政時十四歳、後播州ノ赤松明石泉、州松浦安大夫宗清、寺田、間銅、桑原、千ヲ以テ援兵トシ、城州淀ニ松岡九郎次郎、小野木清次郎重勝、助ニ任、江州勢田ニ長岡越中守忠興、同國甲賀ニ堀尾茂助、吉崎、木村小隼人重茲、又筒井順慶、伊藤掃部治時ハ和州ノ秋山深、芳野等カ賢人ヲ取テ勢州ヘ向ハシム、江州森山ニ羽柴美濃守秀長、草津ニ於次九秀勝、永原ニ三好孫七郎秀次、高山右近友禰、中川藤兵衛秀政、氏家内膳正行廣、一萬五千是ヲ以テ美濃口後詰トシ、勢州ヘ蒲生、長谷川、加藤、一柳、山崎源太左衛門片家、淺野彌兵衛長政後彈正少及ヒ甲賀ノ士ヲ差遣ハスト雖、猶モ其勢不足ニ於ハ森山草津ヨリ是ヲ救フヘキ旨ヲ教令フ、西國山陽道ノ歴ヘニハ浮田秀家備前美作因幡勢ヲ以テスト云、

○此條前田家譜、前田創業記、及び三州志、其他諸書孰れも所見なし、
八月 朔 乙巳

二十八日、中壬成政、信雄に應せんとし、利家を欺きて婚を約す、後利家其の詐を覺り、村井長頼をして朝日山に備へしむ、成政佐々平左衛門を遣りて之を

攻む

〔利家夜話〕

一利家卿御物語被成候、柳ヶ瀬陣の中一年過にて、佐々内藏介殿尾州内大臣と三州家康公江越中さらへ越をよして被參被申談候へ、北國を切て上り可申御本意候者、北國五ヶ國可被下旨申合、越中へ歸城して老表裏を金佐々平左衛門と云同名方其頃村井豊後守江京町人油屋小きんと云者利家公も御存知被成候者、御座候を平左衛門よりひ豊後方迄申越候へ、内藏介は娘計持申候御國並の事、御座候間、又左衛門殿御子息を脊に致内藏介跡をも繼せ可申由、利家卿へ被得御意候様ふと申參候、利家卿御内意被成候故、内藏介殿が佐々平左衛門を使者、御祝儀進物被指越候、利家卿御對面御馳走、刀脇差など平左衛門に被下萬事被御違御返し被成候事。

一諸此方々頼て村井豊後を被遣御禮返し候へんと被仰候へ、七八月を祝儀月ふて無御座候間、此間吉月を御案内可申由の處、八月十七日越中内藏介殿茶坊主せうかうしかうとんと申者參、豊後内小林彌六左衛門と申者昔の出家にて彌六左衛門と智音にて御座候、其ちかきに彌六左衛門方へ參申候を、則豊後爲申聞候様子、内藏介殿謀叛の談合兼々南の矢藏ふて家老衆呼寄

御咄候と申聞せ候、豊後其通利家卿へ申上候へ、利家卿天のゝと御満足ふて、彼坊主は金子貳枚被下候へ、限りなく悦び越中へ入數出被申候、一兩日前より御まらせ可申由、由て罷歸候、利家卿此義いかにと思召候や、此事實證ならぬ以來迄可爲越度の間、此方々其手當可被成由、倍朝日山へ村井豊後を大將、高島平左衛門、原田又右衛門、其外鎧炮大將貳人可被差添候間、則用意被致候事。

一佐々内藏介殿初て入數被出候へ、八月廿八日の由、豊後右のどく朝日山に柵を付、居陣の用意、金澤へ入數歸り申、則豊後を見廻し朝日山へ參、其時利家卿御馬廻り阿波加五郎右衛門、江見藤十郎豊後を見廻し參り候、其時彼人數出申を見付、則金澤へ注進し、兩人被參候へ、豊後申候へ、江見阿波加、耳にも不聞入、急ぎ早飛脚にて被仰上候へ、申候、其時飛脚にていり、同敷の各被參、直に被申上可然候、但此林の道に候や、一揆可起と思ひ、いかにやと豊後申候へ、兩人物も無是非存候、日頃の御懇意添候間、御用に立討死可仕と存候へ、此詞を聞あ、ら注進し不備り以來の越度も可成と涙をあらし、殘多けに馬に乗申候、時に豊後兩人江申候、各聞候後、利家卿へ御申上候へ、豊後討死ま、と聞へ、

我等傲り城々内に有り間敷候城外に可有候間、兩人金澤にて右之通被申上候へといへり、則右之通被申上候利家卿御意に村井又兵衛をり下知かくても無心元事を多く候へ共乍去時を不移、不破彦三、多那村三郎四郎、片山内膳、岡島帶刀其外の大將分御出馬有之候、然共其内に大雨を降り、殊に朝日山に輝り、をる勢を見て越中勢遠巻きに和申候、其時よりして度々御取合被成候由、御物語候事、

一津幡の御城に、前田右近父子御座候事、

一鳥越の城に、目賀田又右衛門、丹羽孫十郎有之候事、

一能州末森の御城に、奥村助右衛門、千秋主殿介、土井伊與、瀧澤金右衛門、其外歴々十人計有之由、此内助右衛門侍大將也、是に付利家様御物語多く有之事、

〔加賀藩史稟〕

六月二十六日はヨリ先キ越中國主佐佐成政、織田信雄ニ應

シ、陽ニ我ニ結ヒ公子利政ヲ養ヒ其女ヲ配センコトヲ請フ之ヲ許ス、是ニ至リテ其臣佐佐平左衛門ヲシテ來リテ幣ヲ納レシム、二十三日は、未詳、記ニ之ヲ七月、從、中、八月十七日、佐佐成政、同朋某來リテ成政ノ密謀ヲ告ク、未詳、記ニ之ヲ、二十二日、議シテ老臣村井長頼、及高島九藏、原田又右衛門ヲシテ兵千五百

ニ將トシ出テ、封境朝日山中ニ城カシメ以テ越中ニ備フ、未詳、記ニ時ニ公兄五郎兵衛安勝、其子播磨守利好、老臣高島定吉、中川光重、兵三千ヲ擁シテ七尾城ヲ守リ、未詳、記ニ老臣長連龍、德九城ヲ守リ、長家公弟右近秀繼、其子又次郎利秀、津幡城ヲ守リ、目加田又右衛門、丹羽源十郎、鳥越城中ヲ守ル、二十八日、佐佐成政五千餘騎ヲ發シ部下佐佐平左衛門、前野小兵衛ヲ以テ將ト爲シ朝日山ヲ襲フ、報至ル、公老臣不破勝光等ヲ以テ先鋒ト爲シ赴キ援フ、會雨フリ敵敢テ迫ラス、公亦軍ヲ班ヘス、我ノ成政ト難ヲ構フル此ニ始ル、未詳、記ニ

〔参考〕

〔三州志〕

十、權、餘、考

先ツ我國祖ヲ賣弄セント密ニ村井長頼ヘ油屋小金ヲ金小

ノ一、古、今、恒、ニ、親、シ、ク、出、入、ス、ル、モ、ト、也、以、テ、公、ノ、次、息、又、若、君、利、政、君、是、也、混、目、ノ、異、説、ア、リ、今、ヲ、乞、テ、己、ノ、女、ニ、又、若、君、ヲ、迎、ヘ、テ、姉、ト、シ、テ、嫁、ト、シ、ソ、ノ、後、ヲ、讓、ラン、旨、ヲ、言、送、ル、長、頼、即、チ、公、ヘ、其、旨、達、シ、ケ、レ、ハ、胥、議、ア、ツ、テ、吉、禮、ニ、一、秀、日、秀、吉、任、關、白、而、參、内、信、雄、秀、長、秀、次、浮、田、秀、家、前、田、利、家、德、川、秀、康、等、扈、從、ト、ア、リ、然、レ、ハ、國、祖、ノ、此、商、賈、ハ、七、月、十、一、日、扈、從、ノ、上、京、ノ、前、ニ、ア、ル、カ、若、ク、ハ、扈、從、ト、ア、リ、斷、國、ノ、上、ニ、在、ル、カ、考、ナ、ル、者、也、隣、國、ナ、レ、ハ、然、ル、ヘ、キ、ト、テ、聽、允、ノ、答、ア、リ、時、ニ、秋、七、月、二、十、七、日、今、村、井、家、記、ニ、從、フ、ナ、リ、成、政、ノ、將、佐、々、平、左、衛、門、村、井、方、マ、テ、來、

途ナ贈リ、竹推寺ノ城、三郎四郎ヲ斬カケルコトニ因テ、後ニ本藩ヲ去ルノ若
 招云レ此後淺野家ノ原彦次郎傳記ハ是ヨリ後ノコトナリ、此守人天正十八年參野
 岡崎城ニ居シ、長五年ノ役、澁州大田城、武部助十郎傳未考、以下銳士五六騎
 進ミキホヒ小原口東ヘ入ル、是亦越ノ中道也、指テ急ケル、日市ヨリ旭行壘ハ本
 道アレハ、公文分メナヘ向ス、玉ヒ、不破以下ハ敵ノ後ヲ遮ラント小原口ヨリ進ム
 ナ立ツ、此文此時佐々前野ハ朝日山ヲ攻ルニ俄然トシテ黒雲起リ、沛然トシテ凍
 雨來リ、風沙面ヲ撲テ、雷霆魄ヲ褫ヘハ、越兵奮攻スルコト能ハス、遠卷ニセシガ、
 公後距シ玉フト開キ富山ヘ緩ソク、公長頼ノ勇敢ヲ賞シ、而シテ諸寨ニ戍兵ノ
 將ヲ置キ、能州七尾城、本丸ニハ前田五郎兵衛安勝君、其子孫左衛門左衛門連
 ナ守ヲ同シテ未森城、五百人、加州津橋城、永福田千右衛門將監助、土肥伊豫
 兵衛守ヲ同シテ其兵二千、同國津橋城、一書ニ越田多右衛門村井羽源十郎、古澤
 其外足輕番頭持也、加州津橋城、一書ニ越田多右衛門村井羽源十郎、古澤
 國界ニテ末森ト云、古七尾ト云、此津橋ト云、馬ノ居ルハ城ノ爲メ能越ア三
 メ本城代ニテ奥村ニ丸ニ村ニ丸ニ伊豫丸ニ土居主殿助ヲ急カセ、ヲ云、是ヲ修尾山
 ニ班軍シ秀吉公へ使札ヲ馳テ此曲折ヲ告ケ王ヲ、秀吉使者ニ者ニ黄金三十兩ヲ賜シ、

是月、成政、神保氏張をして能登德丸城を襲はしめんとす、氏張岩を勝山に築く、前田良繼等來り之を攻む、

〔前田創業記〕

成政亦欲頼兵接兵攻城圍邑之兵畧而、敷聚群臣共得議築數城

於處々、使佐々平左衛門、野々村主水等二千人守俱利伽羅岩、前野小兵衛二千人
 守彌波壘、菊池伊豆其子十六郎如故守青城、神保安藝氏春其子清十郎、成政如元
 守森山城、丹羽權平守境城、同月神保氏春受成政命卒三千人出張能登荒山邊、侵
 德善河原、憐人民、先是長連龍、聞氏春出師而令鈴木因幡將兵守窪田、館氏春欲擊
 破之而遣畑甚左衛門於斥候、窺館邊、鈴木因幡回計略、先是以河水濞沃館邊、田中
 瀦其地使須賀文次郎跪于水中而示瀕瀕於敵、亦因林藪口飄旌旗於風、爲援兵之
 粧、却敵軍亦令飯坂源左衛門爲斥候、時相遭敵斥候、畑甚左衛門是兄弟也、相與握
 手、歡拂積懷、流淚眩、飯坂以爲氏春進兵攻則殆危者矣、故詐言曰、氏春旋軍夫然乎、
 勿敢以圖難、輒拔焉、高壘深溝且兵士惟多、強攻之則溺死泥水亦停滯、則連龍援之、

フシト云、秀吉公左右ニ置キテ曰ク、我壯年ヨリ成政ノ力、校ナルカハシキ、前田佐々
 勇烈智略ノ優劣既ニ先知セリト、即チ使者ニ返答アツテ歸サセ、ルト云、按スル
 皇傳ニ載テ詳ト見ヘテ、秀吉公ノ返書ハ同月八日也、瑞龍公ヨリモ

七尾大兵襲來共戮力來擊乎然則氏春卒告攻何得勝嗟呼不危哉頗鸚鵡之啄驚耳告攻塞之難成畑曰實夫然吾能勸班軍乎相共謝曰廻轉畑馳歸告之氏春可之命應先鋒於荒山記鈴木因帷發箭指揮兵士令步卒薰火繩結之於林藪爲伏殺而追敵取首級免危矣氏春築壘於勝山俾袋井集人守之歸越中自是越兵三出此處剽掠村里屢矣使田畝就荒蕪也前田良繼及高島織部定吉中川清六郎光重發七尾襲攻勝山不得急下之城主袋井拒之城兵師源七郎孫後與笠間儀兵衛交箭鏖笠間右眼田邊將監傷師之右股亦城兵林三丞與田邊相接遂殞命城雖未完因兵士若無依憑遁匿于山林聚檢其兵師源七郎八十山崎喜左衛門石黑采女等僅十三人城已危因轉大白或以木石投之當者摧焉因是數辟易而解圍日既哺故良繼〔定吉班師〕

九月 甲戌

八日、利家書を秀吉に遺りて成政の反狀を報す、是日、秀吉復書して丹羽長秀の來援を待たしむ、

〔前田氏所藏文書〕 四日の御狀今日到來令披見ひ此表之義所々手堅依申付敵方種々有懇望ひ三介殿御料人子女ヲ指ス家康惣領子康十一に成ひを取出

其上家康舍弟定勝ヲ指ス重而出石川伯耆實子源五殿長益ヲ云フ三郎兵衛川利實子出シ尾張國おゐて雖懇望ひ不能許容ひ處處々越前守異見被申ひ條思案半之儀ニ越州廿日比ニは何之道にも可爲開陳シ越中江行幾とや越州と令談合相定ひ間佐々内藏助山取以下何とぞ聊示ある働御無用にしてうぢばに被相構越前守被相越ひを可被待義專用ニシ自然不被待ニ付越度ひ而者不可有其曲候猶使者に申渡ひ恐々謹言

九月八日

筑前守 秀吉(花押)

前又左

御返報

至境目佐々藏助罷出付而各被相動精入御尤候此表丈夫ニ申付人数不入之條惟越五三日中ニ開陣候て則其表へ出陣候其間儀無越度様ニ聊示之働有間敷候爲其申遣候恐々謹言

筑前守

前田孫四郎殿御陣所 ○利政

十一日、^中成政大舉して下河井に至り、神保氏張をして川尻に軍せしめ、自ら坪井山に次し其部將をして末森城を圍ましむ、城將に陥らんとす、利家來り援ひ、成政大に敗れ、鳥越城を過き守兵を入れて去れり、

〔奥村氏所藏文書〕 加賀 此表一昨日如申上候佐々内藏助去九日能州末守取巻の旨注進之條成刻に加州金澤打立能州へ十一日曉則責の所へ不移時日切懸鐘先のためすつき崩藏助家中數人共之首注文付注進上候、其外數千余討捕付而藏助令被軍栗柄へ被罷退ひと申ひ、但體ニ聞不申ひ其競を以七尾に有之、同名五郎兵へ中川清六越中内境目の荒山城へ被懸責崩城主之事の不及申悉別首の付而勝山同前落居候、越中國中へ付入ひ、追付雖可申候自然御意をも不請卒爾之働と被思召ひていかと存不及是非金澤へ打入、人馬之いきをつるせの聞御意次第ニ彼國へ乱入、藏助可刻首を案之内ニ御座候、

九月十三日

前田又右衛門尉

筑州様

今度越中衆打死人名大分注進之候、

- 佐々喜右衛門 野々村主水助
- 佐々喜新右衛門 齋藤九郎次郎
- 久世又兵衛 同 又介
- 堀田次郎右衛門 野入平右衛門
- 山下甚八 佐々間勘介
- 本庄市兵衛 佐々間源六是は打死候と申候

此外首千余討捕之太將分迄付進之候、

以上

九月十三日

〔前田氏所藏文書〕

澁口金右衛門 井上次郎右衛門

惟任(越前守)

金右衛門次郎右衛門兩人あり、^{惟任}惟越への注進狀、十六日酉刻ニ到來令被見ひ、今度お米守被及合戦切崩野々村主水初而數多之討捕被得大利之由申越候、心知能御手柄無申計候、殊七尾を罷出是又荒山、勝山乗取首數多討捕之由、何之口も首尾揃目出度珍重ひ、佐々内藏助栗柄山へ北候由承以、定而右之俱利伽羅にも足を留事成間鋪と令察候、然は此表尾州之内取出下

から一宮後幸田三ヶ所普請丈夫ニ申付、疾過半出来、二三日中に兵糧玉菜以下並人數等四五千計宛入置、廿五六日比ニ岐阜迄令開陣敵之様子見合可隨意候之條お時宜之可御心易、越前守廿日比には可爲歸陣候、猶々被仰合御本意得登、恐々謹言、

九月十六日

筑前守

秀吉御判

前田又右衛門殿

今度佐々内藏助企謀叛以兩勢雖成守、能加奥郡可令發向之行引違、推寄村末森城取圍既及難儀之處、奥村助工門尉盡粉骨之働堅固ニ持靜處、其方早速爲後詰、出勢佐々頭分之旨十三到來、當家無二之忠義、大慶甚深之到ニ、恐々謹言、

羽柴筑前守

秀吉

天正十二年甲申九月十九日

前田又右衛門尉殿

〔多聞院日記〕

九月廿二日、去廿一日ニ越中ノ佐々内藏介ト前田又右衛門ト

〔貝塚天滿移位記〕

歴代所載

九月、越中佐々内藏助敵ニ成、則前田又左衛門ト

及合戰、越中ノ衆敗軍了、十三人傳十二人の大將分首取注文寫被下了、大合戰アリ、九月九日ト十一日、十二日ニ合戰アリ、佐々打負ヨキ軍兵十人余、雜兵數輩討死二千計ト云、又佐々内藏助キリカヘシ、グリカラノウヘニ陣取、加州河北郡令放火云々説ニ不同、

〔利家夜話〕

十二年

同年九月十一日、末森へ佐々内藏助被出候時、奥村助右衛門方より金澤へ注進申上候へ者、利家利長御出陣被成候、御具足御召の時上命を御切

被成候ゆへ、御討死と御究被成候と何茂奉存、由て御上脇へも被仰置候、由、篠原勘六よみ、鉢を相煩候へ共、御意をも不入聞御共に被出候、何茂感し申由て御先手は村井又兵衛、多那村三郎四郎、片山内膳、岡島備中なとひて候、段々に俯候也、金澤御留守居前田藏人殿也、藏人殿も此頃は御中なをられ、利家卿を御頼被成候故如此、其外魚住隼人、篠原彌介なと也、金澤町まで小松より村上周防なと越前守殿より被越置候、倍御父子津幡へ御着被成候時、前田右近殿なと末森のちや落城可仕候、是にて御待被成可然、山被申上候、利家卿其時被仰候、若時、武邊御存知可有候、内藏助於而一度もこされたる事無御座候、奥村助右衛門捨

あろし候て、我等命有ても何かせん異見を御用不被成候、其時右近殿宗加與な
 と博士の上手なと御望候間時、被とも御見せ可然と被申候、其時是非御呼とら
 く合戦と思ふいかいと御意に候、時豊後申上候の御尤に奉存候、一合戦手間
 を不入越中の人数押崩し可申と申上候へ、利家卿御機嫌能元の座敷へ御な
 をり各ふも博士ふ見せ候様ふと、御意有、博士罷出書面を取出を御覽有とかく
 又左衛門後巻るる能見ると御怒どうふて被仰候へ、博士書物を懐ふ入
 て、時分能、星も能御咄候とや、御出馬と御氣色ふ恐れて申上候へ、利家卿
 扱も上手の博士哉、頓て大利を得て褒美可有と、御笑被成、打立及ふを上下名大
 將哉と譽ヌ者とも無御座候由、博士目利上手と何茂申候、津幡ふ御逗留の中、金
 澤勢大かだ追付申候由に御座候、
 一利長被仰るる、右近殿宗與不調法を申物哉と、御まらり被成候由、借何も少
 油断申故、津幡御出候時周章申候故、利長卿御馬印者横山三之介持候て御供ふ
 町口を出候を、皆々三三介を譽申候、利家卿も御譽被成候由、其時弓の衆弓弦を
 とつし申を利家卿殊外御怒り、大垣註○下文三州志大海と申御弓殿弓をそうは
 りに仕を後迄被仰出候事、

一利家卿川尻にて御馬を乗返し御覽被成候へ、御人数貳千五百程ならて、
 不參候、最早合戦の勝と思召候由、後迄御物語被成候、此段上方ふて加藤主斗
 殿、丹羽左京殿御問候へ、夜中ふ是迄附隨人の人数貳千五百の皆死切たる
 人数の候間、敵三萬ふの向へしと存候由へと被仰候へ、御兩人も御尤と御
 感し被成候事、

一末森大手右のとく先手大將ともかけ向ひ、とや豊後内、野間新之丞、吉川平太、
 小林彌六左衛門、江見藤十郎、大窪小五郎、安藤左衛門、杯首を取來る、其時道二
 筋有一筋の内藏介本陣坪山の口也、そふて村井豊後乘向一戦可仕旨申上
 候へ、利家被仰候へ、内藏介もさすり乃者ふ候間、陣所能見届可申候間、末森
 へ參り候へと御意候、重て豊後申候へ、本陣へ懸候へ、内藏介を討事可有御
 座と申候へ、利家御怒り候而此方の下知次第仕候へと御意候ゆへ、任御意
 首共を御覽被成一番首の見様有、今日の軍の勝也と御意候、是の兵を御練可
 有爲也、借大手口越中の先手頭佐々平左工門など、豊後自身突合つき崩手柄
 の段、後々迄利家卿御物語に候借搦手は利家卿御馬廻り、山崎彦右工門、野村
 傳兵衛、鎌合申候半田半兵衛の一番首ふて有之候へ、共、鐵砲打ぬかれ候ゆへ

鍵合不申候へ共、鍵脇一番小有之事御意ひて御知行三人の中ふての千石多
 く被下候、備御小性篠原勘六、北村三左衛門、富田六左衛門、杯鍵下高名候由に
 候事、其外名遠と有て物語共御座候、其時徳山五兵衛利家の御跡に被參候、利
 家首捕參候者共七八人、手柄致候由御言葉御懸候へ、御息切に被爲成候
 間、斗御座候可然哉と申候へ、後迄一段能申たりと御意候事、
 一末森御城奥村助右衛門其外何茂能持りさめ申義、土井伊與十文字の鍵を持
 たる者三十人斗ふて出利家卿順て御後卷可被成候町を敵ふ被破ての無念
 と門を明切て出四方を突立終に討死仕候、是も色々物語有利家卿御物語の
 次てふ此義を被仰出候事、

一内藏介殿合戦ふ負被退候時、御人數御付可被成と積り御覽候へ、競に付早
 利家卿へ人數の千程に見へ申候由、御物語被成、其時村井豊後、不破彦三郎に
 先手被仰付、御討死被成と御意候、兩人忝と御請申上候へ、路次此方より出
 馬の筋悪敷御座候段、利家卿御乘廻し御覽被成御付なく候、其時分鳥越に御
 置被成候、目賀田又右衛門、丹羽源十郎は開落に城を開退申候、内藏介悦鳥居
 へ入被申候由、度々御意被成候、右兩人面目を失ひ何方江被參候共知不申候

利家思召の、若内藏介金澤城へ左も有間敷と心得押懸候てのと思召跡を去
 らひらけに津幡迄御馬を被入され、鳥越の事も被聞召鳥越へ相還り一戦
 と御いらち候へ共、家老衆今日の御手柄日本無双に御座候間、先御馬を被入
 可然と被申に付其通に被成候事、

〔太閤記〕

かゝる所に、佐々内藏介成政、前尾張守護北畠中將信雄に與し、既對
 羽柴筑前守秀吉卿敵之色を立一万五千の勢を卒し末森の城に押寄しりは、奥
 村諸卒を下知し町口へ打出支見んとせし處に、寄手よりよいと會釋ひ付入の
 行に及んとするを、しきを見、助右衛門其道意得たる者なれば、敵のよきふり
 を見するは方便にて有へし、唯引取れや者共とて町をも自焼し引入しかば案
 のとく敵すきまをあらせず引入て込入來りけるに、はら木戸にして、三好勘
 左衛門尉、野瀬次郎左衛門尉返し合せ鍵をもてさきたて追歸し鍵下にて二
 人打捕参り、助右衛門三の丸の外へ打出多勢なる敵にさゆうに去たるくいせ
 む物ぞ、かゝると引とれや者ともと下知しければ、さすが物なれたる兵とも
 なれば、意得たると云ふよりとやく引入に参り、いかゝの去たり参ん三の丸外
 構の揚簀戸をおろさば引しりは、敵得たりかしこしと引付て來りしを野崎孫

介同與左衛門兄弟面もふらす引返し、鎧を合曳し聲を上げ戦しか終にたゞき立大敵を追出し、あけすとを引立、まじくと歸りし、逆弓矢とつての面目此上有へからすとて感しあへりき、風少しなをりければ、二の丸に近き家共を高野瀬左近大西金右衛門尉罷出焼拂ひし故、火矢のきの用心専あり、敵凱歌をかへきりくと取廻し、稻麻竹葎のこくと取巻持楯搔楯つきよせ、せきよせ螺鐘を鳴らし、鐵炮の音、矢叫の聲、寔百千の雷の唯一度にかり落る計に喚叫てそ攻たりける、され共助右衛門尉、中々事ともせず士卒の機を勵まし堅固にこそは抱へけれ、佐々、仕寄之町揚見廻とし來りつ、此勢はつかれたるを佐々平左衛門の勢入代り一揉もめや者共と下知しければ、平左衛門入代て一捫二揉揉んで攻入んとすれば、奥村兵を左右に隨へ、つきくつうけては引て入ま、つまりかへつて守りけり、薬科新介、三輪勘左衛門尉、同彌十郎、野崎新六、高崎次兵衛、前波三四郎、白井四郎、若衛門尉等粉骨を竭し義氣を勵し防戦ひ待りし、は彌攻めあくむてけり、奥村か妻はて、心も最まつかに万の事に物おそれをし、青柳の糸をも欺斗り、けらからぬ女性なるか、信長公の御母堂の事聞つる事有とて、かひくしき女房二三人あひともかひ、長刀をよこたへよるひるの堺をわ

す城を打廻り、戦つられ眠るちある番衆をは事外ふいり禁め、或はをよやかにも睡りをさまし、或はゆるかせもあ久、番をつとめぬる所を假名實名をまゐるく付、さそ草臥さぬらふらめ、やめて金澤より後巻なさるへきとの事にておひくますと、云慰め、或時は粥を大器に入持せつ、所勞の程を感じ、或時は夜寒の袖に露をさらひんかため、紅葉を焼酒を煖め、唄うらの眠をさましければ悦あへりつ、むかしの巴、山吹、閑の前とは一旦の勇こそあらめ、斯籠城にかれもやし給ふやうにおはくますよとて、城中の人々此の義に耻つ、我をたもう事、日々に諸卒の心一致してたのもしうそ見へたりける、助右衛門尉、助十郎、又十郎、あはるあむる能者共、あまた召具し、四方を打廻り各つりれさるやうにしければ、皆々請取の町場を幕場と定へしと、音もせず静まり返り守りし、は、敵も責あ久み、謀計を廻らし城内を引取り見んと、千秋主殿助り所へ扱ひをそあけたりける、此人生國、越前の者、利家府中を領せし初めよりの奮功あるに因て、一方の物かしらとし東の丸を預け置しかり、敵方に親しき因あまたあれば扱ひを入、是非く心を変し内藏助に對し忠節をいたせよ、し、さもあらは能州の内二郡并黄金千兩可被致恩賜、於同心者、聊不可有相違の趣、起請文を

被槍越候へどの事也、千秋思ふやう、今五三日も経なと、頼絶矢種盡只首をひろ
いれん事必定の事たるべし、此義に同してんやと身近き者共に相議しければ、
皆尤なるべしと申したり、さらば本丸に至りて此旨助右衛門尉へとくと談合
し、若同心に頼らすは兎も角も計りみると、我にあらぬ者四五人召具し本丸
の門を叩入給へとて、千秋一人斗を入さりたる、南角の櫓にて千秋ひそかに
かくとさゝやきければ、中々請も付すたゝ千秋を東丸へ歸しかへしありあ
んとて、則此櫓に留め置稠しく番を付置、東丸への助右衛門か弟奥村加兵衛尉
を入替へてけり、城中の人皆此事を聞き扱も古今に稀ある忠臣あるべし、武勇
と云、無欲と云、涼しくも見えつる物なりと、感しあへりつゝ、死を輕し義を重し
戦しかは責め敗らるゝへくはなかりたり、去共俄かなる籠城に依て兵糧もあ
久水の蓄もともしければ、万の不如意事極りぬ、二の丸の門櫓も近き比の作事
にて全備なき事を、敵方によく知、扉を打破既に押入らんとせしを、本丸より勇
士共助來りて、鎧長刀にてつき出しきり、雖然多勢を以、入替くゝ爰をもめやも
めやと喚叫て攻ければ、不叶しそこをは引て一の門をかため、爰を枕にし快く
討死せんより外はなきそと、樂に思日入防き戦けり、此旨金澤へまき波をうた

せ告度は思侍れと、幾重ともなく圍ましかは、あはれ隠形の法もかなと希ひ、誰
か忍ひ出此急難を救ひ見ぬかと、助右衛門尉申ける處に、久々つかへ侍りしも
の進出て、某忍ひ出金澤へ参り見んと申ければ、うれしくも云つる物かな、さら
は参て此旨委しく申上候へ、兎角後卷と急し玉ひかつとや兵糧ともしく、諸卒
つかれて見へ申候、縦ひ千死一生に極りたりとも、扱なとに取結ひ渡す事は中
々候ましき旨を慥に申候へ、汝事は利家よ久御存知の事なれば、書狀までもな
し事故なく歸候へとて、盃を取はし出しけり、案内を知らる事なれば、難なく
忍ひ出、十日の晩金澤に参着し、件の旨かくと申上ければ、げに助右衛門の所存
左も有ぬへしと、利家たのもしく思され、後卷有へしとひしめき給ふ事急なり、
かゝる時のくせとして、浮説まちくゝなるものなれば、とやくゝ扱にし城は渡
しつると云募とも止らせず、利家被申たるは奥村事尾州荒子の城を、信長公御
朱印をも用ぬす、渡さゝりしものなれば、城を持遂る事ならせし、たとひ切腹に
及事は有共扱に致し渡す者にてはなきぞ、唯急き後詰をせんとて、嫡子肥前守
諸共に物具取て着玉へは、籠中御心に思召事もや有けん、熨斗、鮑、搦栗なとり
すへ、手つからあたゝめ酒を持出道途を祝ひ玉ふ内にも、名殘おし氣なるきは

見へなから、門出をいとふ言の葉露よじからず、さすか弓取の妻に備り給ふ、ま
るしゝなと覺え侍る、前田又次郎利家は利家在京などの時は城を預り居侍り
ける人なるか、留守には別人を御置かへ、某も御供申候はんと望みければ、いみ
しくも云つるものゝなとて召連けり、又丹羽五郎左衛門尉長秀より村上次郎
右衛門尉、溝口金右衛門尉、其勢三千余加勢として參、有可致參陣旨達て望み侍
れ共、辭々當地に在て一揆等不起やうに頼入ると殘しおかれ、利家、利長も十
死一生に究め給ふ氣象見へし、驗には、具足の上帶丁としめ、餘る所を小刀して切
て捨立出玉ひければ、伴ひ出る人々までも、思ひ切てそ見へたりける、天正十二年
九月十一日戌の刻、金澤を打出、諸鎧を合せ負けるに、津幡の町にして鉄炮の音
聞えしゝは、扱こそいままた落去はせさりけるよと、とつとき得ひつゝ、利家左右
を見るへり見、誰り早く來りいつれりおそかりし事をも記さんゝため、又は勢
の多少を知んりため、着到を付させ玉ふ、其内に家老の人々をよひ集め、軍評議
有けるか、唯是にて末森へ早馬をつかはされ、一左右を聞合せをし給へと諫る
人も多し、又内藏助、多勢を以幾重共なく取巻、我旗本の勢は金澤よりの助の勢
を防かんとて、末森より一里計罷出、金澤の方に向て陣を固め待居たり、たゝ是

より引返へし、金澤におゐて一合戦有て勝負を決せられん事、可然候はんと衆
口同音に諫め留しもたれかれなり、去共利家父子仰けるは、とかく與村を見殺
なは生涯の不覺たるべし、其上金澤に於て一合戦の勝負を頼み、時刻うつる其
内に居まけになる事、出來るものぞありし、殊に軍をせずし、よじきたゝゝるあれば
軍神も見捨玉ふと也、唯後卷を遂助右衛門を助けんより外はなしと、重て被申
出し處に徳山五兵衛尉進出申けるは、義の向ふ處をするは古の格也、是を義士
といへり、仰の赴可然覺へ奉る、とくゝ急せ玉へ、徳山に於ては御供申さんと、
馬を乗出したるの心ちよく見へてけり、若き人々は内々進み度思ふ處かれは、
我おとらじと乗出したる勢は、寔に天魔破向も向ふべくも見えさりき、與頭等
も猪武者にくみし命を捨る事、今に始めさるそと云つゝ、ひしゝと備を設け
段々におしたり、是よりして猶汗馬を早め行に、佐々陣の備も近きければ、濱
手へ廻り轡のならさるやうに枚をふくませ馳行に、をし明ゝたの雲山の端に
横へ覺束なき比なるに、末森の城の東方に着陣せしと、ひとしく人数を且旦立、
佐々新右衛門尉、野々村主水正などか、攻口に向て凱歌を喧とあけたりければ、
敵も内々後卷の用心してや有けん、さつしたりと云まゝに城を巻ほくし、鍵お

つ取く見えし處に、利家小姓富田六右衛門尉倫をはなれ進出しを、山崎彦右衛門尉、野村傳兵衛尉、北村三左衛門尉、半田半兵衛尉打見て、こは口おしこされけるよと、をしつゝ進み行き一鎧参り候はんと高聲に呼り、鬼神をも欺斗に競ひかゝつて進みしかは、敵にも野々村主水正、佐々新右衛門尉、堀田次郎右衛門尉、齋藤半右衛門尉、野入平右衛門尉、矢島五郎右衛門尉、本庄清七、其弟市兵衛、其勢五百余騎、鎧ふま田を作りてをしかけたるに、彼五六人の者共ためらう氣色もなく、多勢に勝事は唯心を一致にし一度に突かゝり義氣を存するに有そと眞丸に成て、鎧を打入散々に相戦ふ處に、城中大にき得ひあふて、時を合せ突て出、内外より揉合せよや者共と、助右衛門尉下知しければ、意得たると云より早く、三輪新右衛門尉、前波三四郎、野瀬次郎右衛門尉、三輪勘左衛門尉、野崎孫助、其弟與左衛門尉突て出たり、推つゝいて馬廻なる本田三彌左衛門尉、可見才藏、ゑいや聲を揚げ揉合たりしかは、寄手の勢一足も退くな、逆ものゝれぬ道に極りたるぞと、野々村主水正大の眼に角を立ていかゞまひり戦ひける、利家父子大音聲を上、鎧にてたゝきあふか、唯空き倒せや者ともと、すたまをあらせず下知しければ、味方の鎧先つよりけるにや、鎧下にて敵の物頭の士多くうたれ

てこそ、諸勢四方八方へさんじけたれ、斯悉く退散せしに一備のきをくれたるに似て又左も無用有る得に見へたる勢有溢れ、者共いさゝかの勢を追散し討捕んと望けるを、利家辭し度を失つて退おくれたる敵にはあらず、されは齋藤甚助、寺島牛之助とて兄弟なるか弓矢取ての名士なり、卒爾に碎れる者そ、其上思ひ切たる勢を控しければ、能勇士をほまた失ふもの也とて、一人も出し給はされは、取まつめたる躰にもてなし退にけり、

或曰兩年の後聞之、件の時甚介、牛之介方より内藏助へ使者を以云けるは、是にてまはし戰侍るへく候、然は歸し來り被決勝負候へ、城はなんなくかつき可申となり、利家此事を夢にもまらずして、取掛討んと云しを、制し玉ひしは明將なり、まへき所をは物し、まましき所をば、せざる是良狗の云爲也、味方勝に乗て追打に討て行遣るを、利家長追はしをな、はやく歸り候らへと、使番を以再三とめ玉ふ所に、案之とく逆る勢をはにけさせ、内藏助旗本七八千の勢を左右に去たるへ、足をも亂さずまつ久ろに成てを返し來りたる、されはこそ長追せし者共、徳山源七郎、堀喜二郎、其弟左太郎、今宿印齋、其外十騎斗歸し來る先勢に路を取きられ一人も不殘討れにけり、敵之れに氣を得勇みに

非衛ノ後ニ佐々與左衛門ニ與一ニ平齋藤半右衛門ニ作一ニ平櫻勘介作一ニ櫻井ニ
 畫成政ノ後ニ瑞龍公怒リテ北村八衛門ニ命シ斬殺スト云ニ堀田次郎右衛門等ハ今
 右衛門ノ臣平其兵八千麥生ヨリ駒ヶ嶽黒谷以テ上ノ羽ニ上ホリコレヨリ末森
 城下ヘ鼓譟雲聚シ熾熾セントス末森間答ニ云明發ノ此北村平五郎ヲ初メ物
 シク從野ノ町口マテ猛攻シ町口ヲ放火セシテ當リ難ク家野三郎右衛門等
 輪助左衛門同彌太郎馬印持新四郎等二三度返シ合セ助右衛門ニ敵ニ引取
 リ上ケ寶戸ノ家臣野城ニ入ルト云云以上永福ノ家押崩シ助右衛門今與村ノ家臣
 モナシ一人又野入平右衛門等寺島甚助同牛助藩ニ仕テ助ハ兄弟ニテ其後共ニ本
 瑞龍公ニ次耶太夫ヲ賜フ初メ神保氏春ニ仕テ命シテ五百石ヲ賜フ今ノ改ムル
 祖山ニ沿テ若宮丸末森城中三丸ト外羅城トノ後口突門ヲ攻ムソノ勢ヒ甚タ
 猛ケシ外羅城ノ守將土肥伊豫國祖山ノ先鋒左衛門武肥馬也但一瀬ニ森ニ在
 シテ此時末森ニ天文十九年ニ伊豫屋敷末森大手下田子村邊ニ在シ由方人今ニ
 四郎左衛門ノ祖今ノ之ヲ追拂ント兵二百ヲ率キテ長明筆記ニハ三十人許ヲ決
 アリト撃テ出テ末森ヨリ牛里許アル吉田村垣地ノ名テ吉田口苦ケ丸ノ苦ケ
 宮丸ノ苦ケトカ若門際ニテ戦死ス敵將堀虎福十郎首ヲ得伊豫カ從兵七八十人

慶トナル景周接スルニ此若宮丸ト三丸ノ後虎口トナリ坪井山ヨリ上田河原吉
 ナラシメテ古圖ニアリ此邊ニ百年許ヘシ越兵愈銳氣凜然トシテ挫ク可カラズ
 特ニ寺島等奮進シ成政モ此吉田口ヨリ來進シ自カラ指揮シテ兵氣ヲ勵マス
 城中ニハ與村永福守ニ拜ス此年ニ在リ後伊豫其子榮明初メ助十郎ト號ス後河
 石ヲ賜フ同姓采女五千人源左衛門ノ祖此時十五歳也世本ニ千秋主殿助範
 昌次郎吉守ヲ守ルコノ瀧澤金右衛門一書長公ニ仕テ公生害ノ後國祖召シテ千石
 ヌト賜フ實子ナキヲ以テ家絶等死力ヲ盡シテ防守スレトモ越兵果進シ生兵ヲ
 代テ急攻ス羅城ノ守將範昌禦ケ能ハス此時城界僅ニ一重ニナ兵ノ爲メニ死
 スルモノ百許僞屍莽ノ如シ衛門及ヒ其弟左太郎中刻ニ至ルト云然レトモ下注
 考ニ又見ユ併因テ範昌剩兵ヲ引テ牙城ニ保ム本庄清七矢部五郎右衛門左衛門
 アノ族ニ等愈銳氣ニ乘シ外羅城ノ門ヲ破ラントス永福及ヒ其弟加兵衛其餘
 科新助三輪勘左衛門同彌十郎野崎新六同孫助高崎次兵衛前波三四郎前波ノ
 祖ニ自非四郎右衛門高野瀨左近藥科以下九人ノ末孫及ヒ由來傳シテ見ユ但シ
 ハ新助ノ子ナルカ今瀧澤金右衛門等之ヲ強防シ敵首ヲ斬リ或ハ重創ヲ被セ
 テ引トル時ニ霧雨冥濛山路泥滑往來不便ナレハ成政モ一旦坪井山本營ヘ退

我兵玉サハサシムルニ成政果シト勿レ此死地ニ備テ進ルハ其故アルヘシトテ弟秋山進メ
 サセ玉サハサシムルニ成政果シト勿レ此死地ニ備テ進ルハ其故アルヘシトテ弟秋山進メ
 之次ニ耶等ヲ騎許公ノ下知テ切テ引キ進クテ是ニ當リ却テ皆之ヲ取リ玉
 兵成政ニシテ機ヲ察シテ折衷スルコトヲ能ハス景閑周記ノ載シテ同シ諸識者ヲ待ツラス
 没巴成政ニシテ機ヲ察シテ折衷スルコトヲ能ハス景閑周記ノ載シテ同シ諸識者ヲ待ツラス
 此未森人ノ後援トシテ公金澤發兵千五百羽アリ秀ヨリ村口防衛門ヲ上テ次口耶右
 衛門二森人ノ後援トシテ公金澤發兵千五百羽アリ秀ヨリ村口防衛門ヲ上テ次口耶右
 メコトナシ我出戰ノ後金澤勢ノ寇野ナク泉野ハニ卿等陣アルヲ計シヨリ之ヲ押トシ
 コト從軍ニ後加ヘ老練ハス其將コトノ感ノ遠圖アル

〔三州志〕

十載 葉餘考

成政果シテ

津幡城ヲ

襲ハント

内高松ノ

池畔ヨリ

横山ヘ

カ、リ來リシカ、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ
 向ハス、太閤記ニ此時成政、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ
 抱引返シトセル山加賀勢在引所ノ茂テリチ、備ヘシ、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ
 打テ入ル、未森閣城ノ祭シ、實シ、中條村ノ山、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ
 ナテ見テ、成政此疑、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ
 加賀郡正津幡村、右衛門村、三反、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ
 衛門元祖ニ甚ハ公傳ニ後、卷下三、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ
 曉、此邊形ノ峯如クハ疑ニ立テ多ク、津幡ノ方ニ旗旌多ク翻ヘリ、巨兵群備ノ形勢ナレハ乃津幡ヘ

衛門中條村ヨリ見ヘ、當時ノ山々ノ分、門ハニ、龍、妙、二、公、ノ、牛、御、書、門、ハ、此、半、右
 榮ト加茂社ヲ燒拂ハセ、且成政之ヲハ、大、社、ヲ、ナ、シ、カ、此、社、林、ノ、等、伏、兵、ヲ、置、キ、ト、云、
 前後道ハ、シ、テ、放、カ、ト、疑、シ、ム、ト、ナ、リ、山、間、ノ、路、ヲ、押、テ、吉、倉、山、ノ、交、ニ、越、ア、リ、南、ニ、至、
 リ、陣、ヲ、ス、エ、何、レ、此、時、分、條、ニ、按、ニ、今、横、山、ノ、邊、メ、テ、吉、倉、山、ノ、道、ヲ、越、ス、カ、古、圖、ヲ、按、
 ル、高、松、今、此、後、木、津、高、松、川、尻、今、津、道、條、ノ、山、ノ、邊、メ、テ、吉、倉、山、ノ、道、ヲ、越、ス、カ、古、圖、ヲ、按、
 ナ、以、テ、論、ス、ヘ、カ、ラ、ス、猶、下、照、文、ニ、見、ル、津、幡、鳥、越、城、百、七、平、地、村、ノ、山、ノ、邊、メ、テ、吉、倉、山、ノ、道、ヲ、越、ス、カ、古、圖、ヲ、按、
 町、城、ノ、跡、ト、高、津、坂、城、間、三、町、三、云、三、へ、使、ヲ、立、ル、ニ、寥、然、ト、シ、テ、空、城、也、鳥、越、城、
 午、又、右、衛、門、丹、羽、源、十、郎、末、森、城、間、三、町、三、云、三、へ、使、ヲ、立、ル、ニ、寥、然、ト、シ、テ、空、城、也、鳥、越、城、
 越、ノ、ト、古、澤、家、譜、ニ、武、尼、州、記、ニ、仕、成、政、退、合、戰、キ、津、幡、山、ノ、邊、メ、テ、吉、倉、山、ノ、道、ヲ、越、ス、カ、古、圖、ヲ、按、
 ナ、越、勝、利、ユ、チ、得、ル、丹、羽、源、十、郎、末、森、城、間、三、町、三、云、三、へ、使、ヲ、立、ル、ニ、寥、然、ト、シ、テ、空、城、也、鳥、越、城、
 城ヲ得、是ヲ天ノ賜モノト喜ヒ、其將久世但馬ヲ置テ之ヲ守ラシメ、俱利伽羅ノ
 壘、俱利伽羅ノ古ハ、彌波郡ニ、隸、シ、今、ハ、河北郡ニ、隸、ス、ニ、ハ、佐々平左衛門ヲ置キ、是
 ヲ勝利トシテ越中ヘ引キ歸ヘル、按、文、ニ、モ、内、藏、助、栗、栖、山、ヨリ、北、ク、候、由、承、ハ、ル、ト
 ナル、是ニ公末森ニ在テ以爲ク、成政今日敗ヲ取テ憤リ、一旦退クト雖トモ必ス
 却テ津幡城ヲ攻メ、案ノ内ナリ、然レハ津幡寡兵ニテ之ヲ防カン、難カルヘ

シト、即チ末森ヲ發旗、時濱通リ津幡へ着陣アリ、此ノ末森ノ津幡へ着陣ト云者、上
 公トハ別事ニ非ス、一書ニ未森ヨリ東ノ道ハ、過ル也アリ、其東ノ道ニ、寺島兄弟、
 周及ヒ、世ヲ考フ、兵千五百、西ノ道ニ、置テ、歸ルハ、外中ニ、高松、宇野、毛、狩、鹿、野、指、江、津、
 幡ト、歸リ、攻メ、竹、筒、山、利、至、羅、ト、夜、中、ニ、攻、メ、舟、ヲ、引、キ、幸、ヒ、ニ、島、越、空、城、ヲ、取、リ、
 テ、津、幡、ヲ、求、メ、竹、筒、山、利、至、羅、ト、夜、中、ニ、攻、メ、舟、ヲ、引、キ、幸、ヒ、ニ、島、越、空、城、ヲ、取、リ、
 取、道、ヲ、求、メ、竹、筒、山、利、至、羅、ト、夜、中、ニ、攻、メ、舟、ヲ、引、キ、幸、ヒ、ニ、島、越、空、城、ヲ、取、リ、
 攻、外、ヲ、求、メ、竹、筒、山、利、至、羅、ト、夜、中、ニ、攻、メ、舟、ヲ、引、キ、幸、ヒ、ニ、島、越、空、城、ヲ、取、リ、
 城、大、將、不、殘、討、ル、由、音、ク、退、ク、ナ、リ、之、ヲ、幸、丹、羽、越、テ、所、成、政、未、森、ノ、山、々、不、利、チ、取、
 先、見、ス、ル、ニ、ヨ、リ、城、ヲ、ア、ク、退、ク、ナ、リ、之、ヲ、幸、丹、羽、越、テ、所、成、政、未、森、ノ、山、々、不、利、チ、取、
 諸、士、ノ、解、言、ト、シ、テ、後、日、世、人、ニ、見、チ、ト、サ、レ、リ、一、城、ヲ、取、テ、成、ル、チ、ハ、内、外、公、ハ、鳥、越、
 陷、城、ノ、ヲ、知、玉、ハ、ス、末、森、ノ、捷、ヲ、諸、堡、ノ、守、將、へ、告、シ、ト、便、者、ヲ、馳、ラ、ル、ノ、處、小、林、喜、
 左、衛、門、臣、小、越、林、へ、ノ、祖、祖、此、名、見、今、ノ、藩、馳、飯、リ、鳥、越、ハ、陷、城、シ、タル、ト、見、へ、越、旗、既、ニ、禰、
 格、ス、ト、以、告、シ、ケ、レ、ハ、公、目、賀、田、又、右、衛、門、等、ノ、節、義、ヲ、守、ラ、サ、ル、ヲ、怒、ラ、セ、玉、ヒ、後、此、
 野、長、政、等、徳、山、流、五、兵、衛、齊、藤、刑、部、ヲ、以、テ、我、公、邸、へ、同、盟、ノ、諸、侯、宴、會、シ、玉、時、蒲、生、氏、郷、淺、
 ナ、公、モ、乞、ハ、ル、守、城、セ、シ、公、對、ル、武、道、ニ、彼、源、氏、大、將、病、ノ、士、也、然、ト、モ、彼、力、命、ハ、各、ハ、
 進、ス、ル、ニ、テ、藤、井、寺、合、也、按、ス、ル、肥、前、守、忠、賀、先、祖、進、彈、正、忠、信、真、ハ、陣、佐、々、破、ル、無、双、判、官、剛、氏、
 頼、家、人、ニ、テ、藤、井、寺、合、也、按、ス、ル、肥、前、守、忠、賀、先、祖、進、彈、正、忠、信、真、ハ、陣、佐、々、破、ル、無、双、判、官、剛、氏、
 生、者、ナ、リ、ト、云、景、周、哉、公、對、之、賀、田、等、不、音、武、仁、亦、是、大、罪、人、ナ、リ、然、蒲、是、ヨ、リ、速、力、ニ、鳥、越、

ヲ一舉ニ攻屠ルヘシトアルヲ村井不破徳山片山言ヲ一ニシテ諫テ曰ク、公ノ
 神武英威既ニ今朝ノ大捷諸人目ヲ驚カス所ナリ、今此葦爾タル一堡ニ兵力ヲ
 費シ玉ハンテ益ナシ、它日生兵發旌シテ陵城アランニ何ノ晚キトノ在ニヤト、
 公之ニ從ヒ、一説公ニ先金城ニ飯ラセラレ、十三日、金城ヲ出陣、森下、粟崎ニ強
 ト、諫止シテ、奉ルニ、重復也、按、城、ニ、十二、日、ハ、直、チ、金、澤、月、十四、日、公、鳥、越、ヲ、攻、
 四、日、再、ヒ、公、發、旌、ア、ル、ト、疑、ク、濱、邊、ヨ、リ、金、城、へ、壯、刻、ニ、歸、リ、實、刻、又、打、出、森、本、粟、崎、
 加、州、へ、亂、入、ト、聞、ク、ル、ト、疑、ク、濱、邊、ヨ、リ、金、城、へ、壯、刻、ニ、歸、リ、實、刻、又、打、出、森、本、粟、崎、
 告、レ、至、ハ、上、方、勢、ノ、著、物、見、ル、ト、騎、兵、五、六、人、舟、馳、來、リ、引、カ、ス、ト、見、テ、此、説、リ、モ、尤、非、ナ、リ、
 始、夕、見、時、集、ア、リ、ハ、尾、山、城、ニ、凱、旋、シ、玉、へ、ハ、士、農、商、賈、盡、ト、ク、街、尾、ニ、出、籠、食、盡、藥、シ、
 喜、躍、シ、テ、迎、へ、奉、ル、而、シ、公、即、チ、秀、吉、公、へ、聘、使、ヲ、以、テ、末、森、ノ、捷、ヲ、告、ク、秀、吉、公、聘、
 勿、レ、ト、忠、懷、口、ニ、嘆、賞、ア、リ、且、秀、吉、公、明、年、ハ、北、征、ス、ヘ、シ、必、シ、モ、政、設、ノ、不、義、滯、行、ノ、カ、ス、
 惟、ニ、乳、母、ヲ、成、政、力、賀、ト、シ、出、シ、置、ク、ニ、云、フ、女、

〔石碕記録〕

天正十二年十一月六日、利波郡澤川村ノ百姓田畑兵衛ニ其從來
 所有セシ山ヲ賜ヒ、其租ヲ除ク、初佐々成政兵ヲ出シ、末森城ヲ襲ハントスルニ

當リ、兵衛變ヲ金澤ニ上ツル、既ニシテ末森ノ戰、我軍大ニ勝チ、成政敗績ス、是ニ
 至テ、此賞アリ、世々之レヲ襲ハシム、高德公印書

按、兵衛ニ賜ハリシ山若干ナルヲ知リ得カクシ、慶長十年彌波郡檢地ノ時ニ至リ、奉行寺西若狹安原華人、芝山權兵衛、佐垣九兵衛、鶴見左門命ヲ奉シ嚮ニ賜ハリシ山ヲ高十一石三斗ト爲シタリ、田畑、文書、

〔田畑兵衛由緒帳〕

一私先祖田畑兵衛能州口郡之領主三宅彈正家秀より、能州羽咋郡志雄之保南山之地崩十八尾泉原と申山三ヶ所被致扶持候、折紙今以所持仕申候、
一天正拾貳年能州末守奥村助右衛門殿御在城之刻、越中木舟より佐々内藏助殿へ御人數被催末守江被押懸候刻、私先祖田畑兵衛先達而奥村助右衛門井金澤江茂御注進申上候、就夫高德院様江助右衛門殿より御申上候處に御出馬被爲成候、高松濱之手より御通被爲成御後卷被爲遊候處に、佐々内藏助殿御引被成候其後先祖田畑兵衛被爲召出、奥村助右衛門殿御取次を以何様の儀に而も望可申上旨被爲仰出候に付、古より支配仕來候山奉願候處に持傳候山爲御扶持、天正十二年十一月六日、御書頂戴仕、名を高乘兵衛と被爲成下候、然處其以後亂妨に逢申刻右之御書御文言之内さきとられ者や仍如件と御座所、高乘兵衛と御宛所御判、年號、月、日付迄殘御座候故、奥村助右衛門殿江其段御斷申上候、右

御判之物さきとられ候、御文言之寫井御判年號、月、日付又は相殘、御文言高乘兵衛と御座候所今以所持仕申候、

一右亂妨に逢御書さきとられ候に付、天正拾九年に奥村助右衛門殿御取次を以て持分之山前々通爲御扶持、同年十一月七日、高德院様御印御改被爲下名を替田はた兵衛と被成下御印頂戴仕、其御印を以二代目田畑兵衛、三代目田畑兵衛茂無相違支配山被爲下成候、則御印今以所持仕申候、

十月甲申

十四日、町利家、鳥越城を復せんとして之を攻め、火を放ちて還る、

〔末守軍記〕

同年の十月十四日、利家卿鳥越近邊へ御馬を出させ越中堺目民屋とも焼拂ひ給ふ、此城ハ山城ホキモ切所みて、あは責候ハん事如何あらんと仰させは、不破、村井、種村申やうは責落さんハいやまかるべし、乍然城中も二千余騎入置候よし承候間、味方三分一は損し可申候、成政數萬の勢みて富山にひらへ申候得り、大事を御かへ候て是程の小城に人數を損せらせん事然るへからま申せり、尤とそ仰ける、併城中より何とそおき出し候へと、宣へとも、城中にも久瀬但馬守大將として能兵を籠まさせ、足輕を出させ、とかく

相働之山候之條、兼而被申合首尾爲後詰、越中向境(のむ)に要害押詰在々令放火候、從景勝以直書被申入候、近日此口へ可爲進殿候、今般能加兩州堅固之御備誠以御勇力不淺存候、貴國當方被申談上は、佐々内藏(助殿)可討果事不可回踵候段、此方被差上候、飛脚下向才覺分近尾州表秀吉公思召儀由、目出珍重候、尙委細河口定左衛門可令演說候、恐々謹言。

七月十八日

○本書七月は、恐く誤寫なるべし、本文を推考するときは、下文を九月となす實を得たり。

須田

滿親(花押)

前田又左衛門尉殿

御宿所

雖未申通候、令啓達候、仍而佐々内藏助栗柄小原江相働山之條、當方被仰合首尾爲御後詰、須田相模守初め隨分衆數多之同心、越中向境之要害ニ押寄在々令放火候、近日可爲出馬候、今般能加兩州堅固之御備誠以御勇力難進、番面存候、貴國當方被仰談上者、佐々内藏助滅亡眼前候、隨而前田又左工門殿、各以書狀申入候條、可然様御取成奉願存候、彌爰元時宜可心安候、猶重而可申宣候間、不能于細、恐々謹言。

々謹言

土肥美作守

政繁(花押)

唐人式部大輔

親廣(花押)

寺島平九郎

信鎮(花押)

齋藤五郎次郎

信言(花押)

神保宗四郎

昌國(花押)

前田五郎兵衛尉殿

(勝安利家兄)

〔三州志〕

續要餘考

冬十月中旬ハ、二十三日カ、上杉景勝(此時、秀吉ニ屬ス)成政ヲ討

ント越中ニ出眼シ、是ニ今年九月、成政秀吉、土肥美作守政繁ヲ先鋒ノ將トシテ、政ニ屬ス、境城新川郡ニ在リ、佐々守ルヲ攻ム、此時土肥ノ手將有澤采女(今、我藩敷臣)

正親町天皇正十二年

七九七

勝興寺還住之事就懇望任其意候然者坊地者守山麓ニ申付候委細者神保安藝守可被申候恐々謹言

十一月十四日

成 政花押

勝興寺

坊主中

態令啓達候仍成政勝興寺御入眼之儀種々令才學申調候依之各へ成政より以折紙被仰候然者坊地之儀當分麓ニ相定候草坊建立其外諸事調以下急度御馳走尤候萬一於御山斷者不可然候間様子專福寺可有演說候恐々謹言

十一月十五日

神保安藝守 氏 張花押

國中諸坊主中

まいる

制札

勝興寺

御馳走尤候萬一於御油斷者不可然候尚様子專福寺可有演說候恐々謹言

神保安藝守

十一月十五日氏張(花押)

態令啓達候仍

成政勝興寺御入

眼之儀種々令才

學申調候依之

各へ成政より以折

帝被仰候然者

坊地之儀當分

國中

諸坊主中

參候

目定候草

能令啓達候仍成政勝興寺御入眼之儀種々令才學申調候依之各へ成政より以折紙被仰候然者坊地之儀當分麓ニ相定候草坊建立其外諸事調以下急度御馳走尤候萬一於御山斷者不可然候間様子專福寺可有演說候恐々謹言

十一月十五日

神保安藝守

氏 張花押

國中諸坊主中

まいる

制札

勝興寺

御馳走尤候萬一
於御油斷者不可
然候尚様子專福寺
可有演說候恐々謹言

神保安藝守

十一月十五日氏張(花押)

態令啓達候仍
成政勝興寺御入
眼之儀種々令才
學申調候依之
各へ成政より以折
帛被仰候然者
坊地之儀當分
麓ニ相定候草
坊建立其外諸
事調以下
急度

國中

諸坊主中

參候

卯水郡代本町勝興寺所藏

神保氏張書狀 卯水郡代本町勝興寺所藏

<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>
<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>	<p>卯水郡代本町勝興寺所藏</p>

- 一 府之分、二圓令寄進候事、
- 一 當御寺内、諸役免許事、付不謂儀申懸置於在
- 一 自御坊御用付而舟於有通路者、舟役之儀、自此方手判可進候事、
- 一 公用無沙汰之百姓等、萬一御寺内へ引入候者、可及其屆間、早速可被相掃若理不盡、錠責於入置者、被相留可有注進候、速可申付候事、
- 一 不依貴賤、其身へ有在所就商賈以下御寺内別家を可有立置類候、彼輩中不謂働在之者、曲事之旨申付候共、於御寺内相立候家者、不可及其尋候事、
- 一 不論甲乙、依爲犯過人、可加其成敗之處、御御寺内へ於進入族者、爲御寺内、彼者可有追放事、
- 一 自在々參詣輩、諸渡舟賃馬のひゝ二錢、人のひゝ一錢つゝたるへき事、附參詣坊主衆、并御寺内者ニハ一圓有免事、
- 右條々聊不可有和違者也、仍如件、

天正十二年

十二月日

神保安慈守

氏 張花押

正親町天皇天正十二年

尙々遠路示預忝候、萬端重而可申上候以上、
尊札拜見忝次第候、仍寄進申候、於府地之内何與哉内々理申者有之山承候、既田
畠一圓ニ寄附仕候上者、何之者雖爲知行分府之内於在之者、毛頭不可有相違候、
一宮分之儀者替地を渡可申分ニ相定候間、旁不可有異儀候、此旨一宮衆徒中へ
も申付候、尙以御用之子細候者、可被仰下候、委曲今村藤五郎あたより可申上候
間、可然様可預御披露候、恐々謹言、

神保安藤守

三月五日

氏 張花押

下間右衛門尉殿

十二月癸卯

二十五日、丁、成政立山を踰え、信濃を経て濱松に赴き、徳川家康、及び信雄
に説きて秀吉を撃たんことを以てす、

〔家忠日記〕 十二月廿五日丁卯、越中之佐々藏助、濱松へこし候、吉良信雄様御
鷹野に御座候、御禮申候むらゐりみてふる舞候、

〔當代記〕

頼テ歸國上
下信州ヲ通

〔太閤記〕

佐々内藏助、眞忠、雪中さらく越之事、

抑佐々内藏助成政、元は尾陽春日井郡平之城主たり、其後信長公被封于越中守
護、されハ先君の恩惡を不忘して、一とせ信雄卿與秀吉卿及鉢楯有しとき、信雄
卿御味方に與し、越中にして義兵を茂こし、秀吉卿みは敵對せり、天正十二年、霜
月下旬、深雪をもいととま、さらくこへとて嶮難無双之山路み行迷ひぬ、是と
何の地をさして思召立給ふそやと従ひし士共問し、は、遠州へこへ行、家康へ
相勸申、來春は羽柴筑前守を討亡し、信雄卿可被達御本意謀を盡し可及歸國也、
兼て汝等に去らせ度は思ひけめと、於賀州無沙汰様にと、ふるく忍ひ出しみ依
て、左もあかりし也、富山を出てより十日計は、前田知ましほの聞てより決定之
間、五日かくて陣用意五六日はあらんや、上下廿日には歸城すへし、其間は病と
號し、伽之者五六人のよひの小性十人計みの起請をあらせ、此義を知せつゝ、毎
日膳をもまへ、常々有やうみこしらへ、茂きしなま、あく思ひ立てよどは、只急
んより外よろしき事はなき様とて、雪になつまぬわらきはらを、百人のありめ

二月四日とす誤れり、又本書既に秀吉、信雄の講和を十月二十日とし、然るに今又此條成政越中に歸るの後、信雄、秀吉と和睦ありとす、大に誤れり、

〔寛永諸家系圖傳〕

高力正長與次郎 土佐守 權左衛門 同年天正十二年二月四日、越中國

佐々陸奥守成政、潛み遠州濱松いゝりて大權現に謁したてまつる、大權現是
我饗應したまふ、時正長を召成政をへりみて宣ひく、此是高力與次郎の先
祖よりこゝろの、代々勇功の士なり、成政のいひく、大權現譜代の勇士多し、諸國
主乃及ところみあらまといふ、此時清長の父正長駿州田中乃城みゑ、正長の濱
松にあり、日夜御前に勤仕す、

〔武徳大成記〕

同年十二月、信雄濱松ニ赴キ、酒井河内守重忠ガ家ニ入り、神君

ニ謁シ功勞ヲ謝ス、神君重忠ヲシテ、信雄ノ先導トシ、吉良ニ遊獵セシム、松平家忠
命ヲ受テ饗應ヲナス、既ニ信雄尾州ニ歸ル、

同月越中ノ國士、佐佐内藏助成政、濱松ニ至テ、神君ニ告テ曰ク、願クハ再タヒ兵
ヲ起シ、秀吉ヲ撃チ玉フヘシ、然ラハ我レ越中ヨリ軍ヲ起シ、京師ヲ挾ミ、撃チ、速
カニ秀吉ヲ誅シ、永ク麾下ニ屬シ、寸忠ヲ竭サン、神君曰ハク、我レ秀吉トモトヨ
リ遺恨ナシ、先日ノ事ハ、信雄ノ爲ニ、義兵ヲ起スノミ、我カ力既ニ五州ヲ平ク、豈

汝カ力ヲ借テ、秀吉ヲヒスヘケンヤ、成政望ミテ、失フテ空ク去リ、直ニ尾州ニ赴
テ、信雄ヲ勸メテ、再ヒ秀吉ヲ撃シ、事ヲ議ス、信雄ユルサス、成政空ク本國ニ歸ル、
一説ニ秀吉北國ヲ撃ントス、成政是ヲ聽テ大ニ驚キ、濱松ニ至テ、援兵ヲ請フ、
神君許諾シ、玉フ、成政喜ンテ、國ニ歸ル、神君人ヲ遣シ、越州ノ路ヲ巡視セシム、
山路險難、嚴寒雪深フノ入ルヘキノ路ナシ、故ニ使ヲ成政カモトシ、遣シ、援兵
ノ事ヲ止ム、

〔武徳編年集成〕

○廿三日、越中國主、佐佐内藏助成政、信雄方トシ、前田利家ト

合戦シ、光陰ヲ送ルト雖、信雄ハ思也、神君ト相議シ、雌雄ヲ決セントス、然レモ
成政、越中ヲ發セハ、利家其虛ニ乗テ亂入セン事ヲ恐レ、猶豫セシカ、熟按スルニ、
成政在國無テ其説有テ、利家其虚實ヲ伺ハンニ五六日ヲ歴ヘシ、既ニ實ナルヲ
聞テ、兵ヲ催ニ、又五六日ヲ過スヘシ、兎角ノ廿日ヲ歴シ、其間ニハ成政歸國ス
ヘシトテ、往來ノ間ハ病ト稱シ、伽ノ者五六人、近習ノ士十人ノ外、曾テ知セス、常
ノ通り飯食ヲ寢室ニ運ハセ、壯者百人ニ櫓ヲ掛サセ、今日外山城ヲ發シ、更々越
ノ難所深雪ヲ踏分テ、信濃路ニ赴キシカ、賊臣ノ國家ヲ掠ル事ヲ嘆息ノ餘リ、一
首ノ倭歌ヲ賦ス、

カクハカリ、替リ果テタル世ノ中ニ

シラテヤユキノ、白ク降ケン、

○朔日(十二月)佐々成政、千辛萬苦ノ信州諏訪ニ着ス、諏訪安藝守頼忠、驛次ノ羽書ヲ濱松ニ捧ケ是ヲ告ル、神君乘馬五十匹、駄馬百匹ヲ以テ、早速迎ヘ玉フ、成政カ駿州ニ至ル頃來着シ、上下歡ヒ是ニ騎テ遠州路ニ赴ク、○四日、佐々内藏助、濱松ニ至ル處、大久保七郎右衛門忠世カ宅ニ於テ饗セラル、○五日、神君佐々成政ニ御對顔、成政曰、公今般信雄卿ヲ救ハレ、先君ノ筋目ヲ違玉ハサル事、海内孰カ是ヲ感嘆セサランヤ、再ヒ兵革ヲ起シ、秀吉ヲ亡シ玉フヘシトテ、信長ヨリ賜フ所ノ脇指ヲ以テ是ヲ獻ス、神君曰、吾嚮ニ秀吉ト銚楯ニ及フ事ハ、信雄ヲ援ハン爲也、完ク國郡ヲ侵ス志ナン、然レトモ、秀吉重テ信雄ノ味方セシ族ヲ亡サン爲ニ、足下カ分國越中ヘ兵ヲ出サハ、是ヨリ援兵ヲ授クヘキ旨、御約諾有テ是ヲ盟ヒ玉フ、成政重テ曰、信長公數國ヲ領シ玉ヒシカモ、謙信、信玄、同意ノ北陸道、中山道ヨリ攻登ラハ、必敗亡疑ナシ、今公ハ舊國二州ノ外、信玄カ分國、駿甲、信三州ヲ領シ玉フ、成政早クモ謙信ノ分國、越中ヲ治ル上ハ、信玄、謙信、同意スルニ似タリ、勝利掌中ニ有旨ヲ稱シ、暇賜ハリ、是ヨリ尾州ニ赴キ、信雄ヘ再舉ノ企ヲ勸ムレ

モ承諾ナク、空ク歸國ス、

高力家傳ニ、神君其臣高力與次郎正長後土佐守ニ任ラ呼テ、佐々ニ謁セシメ、是累代壯勇ノ士也ト宣フ、成政曰、當時ノ諸侯ニ公ノ如キ、譜代壯勇ノ臣多キニ及フ人無ト云々、

○佐々歸テ後、酒井忠次曰、當家ニ於テ信長ノ弓箭ヲサヘ向上ニ思者無、況ヤ成政ヲヤ、昨今迄信長ノ臣也、今己ヲ英雄ノ謙信ニ替ヘ、君ヲ信玄ニ擬テ、對々ノ弓矢ト述ル事、奇怪也、此度ノ盟ヲ破リ玉フヘシト諫ム、且人ヲノ參河ヨリ越中ヘノ通路ヲ見セ玉フニ、險阻隘路ニシテ、然モ春彌生ノ頃迄ハ、深雪馬蹄ヲ泥ムル旨歸リ報ス、是ニ依テ使節ヲ越中ニ遣シ、援兵ノ事ヲ止メ玉フ、○廿五日、信雄暇ヲ、神君ニ請テ濱松ヲ發ス、時ニ酒井河内守ヲ先容トシテ、信雄ヲ伴ヒ、參州吉良ニ放鷹アラシム、信雄大ニ是ヲ耐シ、遊獵畢テ尾州ニ歸ル、

○北條太閤日記追加、前田創業記、秀吉譜、武徳大成記、東遷基業編年集成、並ニ成政の濱松に來るものは、成政、家康を懲惡し、俱に秀吉を撃んことを云ふ、神君年譜、御庫本三河記載する所、及び大成記、東遷基業引く所の一説に據れば、單に成政、秀吉の己を攻めんことを恐れ、援を家康に請ふとなして、其家康

に勸め共に秀吉を撃つことを云はす、是諸書と其趣を異にす、故に又成政清洲に至り、信雄に面せしことをも載せず、神君年譜等の説、恐らくは非なり、蓋太閤記以下諸書載する所實を得たり、今之に従ふ、

〔神君年譜〕 十二月廿五日、越中佐々内藏助來、于濱松告曰、秀吉欲攻吾、々不知所爲、願公發兵而援之、故公遣人見出師之路、飯來曰、信飛之險隘、不易出兵、是以止發援兵、

〔末森記〕

カ、ル時節ヲ内藏助幸トヤ思ヒケン、越中立山ニサラサラ越ト云難所ヲ越、其ノ者百許ニテ東美濃へ出、其コロ徳川家康卿ハ内大臣信雄卿ヲ見付給フニヨリ、伊勢美濃境ニテ度々合戦アリシ時、北國ヨリ切テ罷リ出、御味方ヲ可仕候間、加州、澁州、越前三箇國御本意ヲ遂ラレ候ハバ、内藏助ニタマヘカシト、内府公へモ徳川殿へモ能々申入、又サラサラ越ヨリ歸リ申サレ候、

〔三州志〕

天正十二年甲申夏四月、秀吉公ト織田信雄ト尾州長湫ニテ、湫ハ康熙字典ニ北人池水ヲ湫トス、トアリ、本邦尾湫ノ俗池水ニ草生スル者ナリ、湫ト云、尾湫ノ長湫、東美濃ノ細湫、大湫、是也、和訓クテ也、故ニ久手ト書ケル者アリ、對軍、龍兵、一千家、率テ尾州へ出、現シテ、秀吉公、澁州、竹鼻ノ不破、源六ノ守城ヲ攻シ、取ル、功アリ、連龍、其手ニ、神君師ヲ帥テ、信雄卿ヲ輔ケ、秀吉公利ナクシテ、池田勝公

入、森長一ヲシテ、神君ノ封國參河ヲ襲ハシム、神君班交綏ス、此覺ヲ覘ヒ、佐々成政密ニ以爲ラク、我レ信雄卿ヲ佐ケ北國ヨリ出軍シ、秀吉ノ後ニ出テ、信雄卿ト腹背ヨリ秀吉ヲ挾撃セント、乃遠州、時ニ在リ、尾州、信雄卿ニ在リ、面アタリニ其軍議ヲ定メント欲ス、然レトモ、此時北國街道ハ加賀ニ我公アリ、南越ニ丹羽氏アリ、並ヒニ秀吉公ト睦シ、越後路へ出ントスルモ、亦上杉景勝アツテ秀吉公ト通ス、飛驒ノ淫道へ出ントスルモ、敵アリ、金森氏未タ入國ナシ、信州松本へ出ル道ニ沙羅沙羅越ト云所アリ、險甚シ、成政七月此道ヨリ中ニ居永貞云、若キ時越テハ平地也、爰ヨリ三里許、險路ヲ行テ、中宮ヲ蘆崎ト云、按、新宮ニテ岩倉ト云、爰マテハ和字カ、爰マテハ馬モ通フ也、此ヨリ立山御前ヘキマテ、九里餘也、其道上リテ、不險、阻ナシ、傳ヘ、岩ヲ踏ミ、峯ニ上ル、亦難所ノ比、御前ヘキマテ、九里餘也、其道上リテ、不堂ト云、至リ、爰ヨリ立山ヘハ、北ノ方、大ニキリ、沙羅沙羅越ハ右ヘツク、其末ハ知ラス、人ノ常ニ通フ立山ヘハ、北ノ方、大ニキリ、沙羅沙羅越ハ右ヘツク、其末ハ口ハ進退、山家ヘ出ル、夜宿セ、蘆崎ヨリ、十一里許、アツテ、洞穴ニ息フ、由ナリ、信州野馬、大間、記ニ、十月、木曾路カ、伊奈通リ、行キ、十二月、歸州、尾州ハ、出タル、不密カ、シ、ノ、サ、テ、二、月、九、日、至、テ、能、州、末、森、ノ、城、上、後、卷、州、ノ、前、ト、ア、リ、ト、沙、羅、々、々、越、ハ、七、月、ノ、末、日、加、州、上、今、年、十、月、ニ、至、テ、秀、吉、公、ト、信、雄、卿、ト、七、月、ノ、和、平、相、ス、ム、ナ、レ、ハ、霜、月、ハ、深、雪、

正親町天皇天正十二年

八二三

を以、四千俵令扶助畢、全可知行所如件、

天正十三

二月二十八日

利家御判

村井又兵衛殿

二十九日瑞龍公ヨリ御書ヲ村井ニ被下、

今度蓮之間表、燒はらひ可申旨、貴所望に付、利家被仰候は、其方は別而御秘藏之者之義といひ、殊木舟之城きわといひ、其上夜中之義に候へば、引取茂無御心元思召候へ共、目賀田又右衛門、丹羽源十郎、鳥越を明退、御越無念に被思召、此度越中に申入して放火仕茂尤と被仰候様に、彼地不殘燒はらひ、敵數多募付候へ共、其方自身鎧を突、味かたあしをも不亂、遠路之所、靜々と被引取之段、誠に手柄とも不始子今義、不可勝斗、利家御満足不大形候、次に其方寄鎧吉川平太、江見藤十郎など、そはにて手から仕候よし、其方口上次第可有御褒美のよし、利家御意に候、猶期面上候、謹言、

二月二十九日

孫四利勝御判

村井又兵衛殿

略○前 三月二日、秀吉ヨリ御書ヲ村井ニ賜ル、是高徳公ヨリ長頼ガ軍忠ヲ依被達

也、

今度蓮之間表、其方望に付て、利家被致許容候處に、早速彼表を燒働、其上敵大勢にて募付候へ共、自身無比類鎧をつき、誠に感事に候、猶期面上候、恐々謹言、

三月二日

秀吉御判

村井又兵衛殿江

〔末森記〕

一明レハ天正十三年、山々ノ雪モ消、二月十八日ニナリケレバ、利家卿、村井又兵衛ヲ召テ、鳥越ヲ目賀田、丹羽兩人明ノキ、敵勢入替ル事、是無念候間、越中ノ内へ押寄深入シテ、働度由被仰ケレハ、承候トテ、村井内家老共呼寄内談シケレハ、則村井内、小林大納言、屋後太右衛門ト云者本國越中ノ生ニテ能案内知タレバ、蓮ノ間郡波ト申テ、安江ト今石動ノ間ニ足懸ヨキ寺アリ、越中ニテノ名所ト、利波中郡兩郡ノ何モ、メケ者尼、彼地ニ在之間、是ヲ燒立候ハ、敵ノヨハリニテ可有御座ト申處ニ、此由ヲ利家卿へ申上ケレバ、最ト被仰、則私先可仕トテ、村井又兵衛一番、二ノ目ハ松任勢、利長卿、人數近藤善右衛門、山崎庄兵衛ナトヲ大將分トシテ、八百餘騎、右ハ岡島喜三郎、片山内膳、多野村三郎四郎、大將ニテ八百餘騎、其ヨリ不破彦三、武藤助十郎、前田又次郎、其次々段々ニ備、村井千騎

計四井主馬ト云シ夜トウヲモ引クシテ、伴屋後小林ヲモ案内トシテ、加州境目ヲ打出、越中ノ内ヘ四里ノ間、同二月廿四日戌ノ刻ニ出押寄處ニ、四井申様如何ニシテモ此暗キニ無計方候之間、今夜ハ先、人數御引入候ヘト申セハ、村井被申候ハ、利家卿御前ニテ御請申參間、彼連ノ間ヘ我ヲツレ行捨テ、各ハ歸リ候ヘト被申候、サテ明レハ廿五日ノ曉ニ、蓮ノ間近邊彼大寺一度ニ燒立、アタルヲ幸、男女ノキラヒナク、三百計切捨ニスル處ニ、如案木船伊奈美近邊ノ城々ヨリヒシト付タリ、本ヨリ村井物ナレタル大剛ノ兵ナレハ、軍士共ノ機ヲ勵シ下知シ、輕々引退處ニ、兩城ヨリモミ合ツキ懸火出ルホトツキ合、村井内ニテ兵共鍵下ニテ、歷々七八人討死シタリケレハ、殘兵共ツキ立ラレ、村井旗本マテ味方崩ケル處ヲ、又兵衛馬シルシヲ前ニ押アテシテ、大音聲ヲ上テ、イタク鍵ヲ合、能武者ヲ五六人突倒シツキタラシヌル處ニ、返シ合タル兵共ニハ、村井與力、吉川平太、江見藤十郎、大窪小五郎、屋後太右衛門、阿波加五郎右衛門、小林大納言、其外彼是二十騎計、大將又兵衛左右ニテ、鍵ヲ合、吉川江見中ニモ大將ニコサレヌル無念ニ思ヒ、イラチ懸ニツキ合、鍵ヲツキ折、太刀打シテ、鍵下ノ首ヲ取、其儘ツキ崩シ、究竟ノ兵共十三首ヲ討取、勝時ヲ噓ト上タリケリ、サテシツシツト引退、二

ノ目松、任勢請取申候、唯今ハ御手柄ナリト云儘ニ、近藤山崎目ヲクハリ、何レモ利長卿内ニテ勇士共、歷々心ヲ勵シ、鍵ヲスマヲ作リ待懸タル處ニ、越中勢、村井ニツキ立ラレシ事、ホイナシト思、兩城ヨリ出タル兵共、二手ニ揉合、三千餘騎マン丸ニ成テ突懸リ、黒煙ヲ立テツキ合ケルカ、何トカシタリケン、松任勢ツキ立タレ、引退處ニ、村井物ナレタル兵ニテ頼テ、人數ヲ備ケルニ、如案近藤山崎ツキ立ラレシヲ見テ、横鍵ニツキ懸ケリ、爰ニ岡島喜三郎、備ニ平野五郎右衛門、河村善五郎、長田猪助ト云、利家卿鐵炮大將成カ、村井取次ノ者ニテアル間、百餘人ノ鐵炮ニテ助來リ、騎手イタク打立ツキ立、七八十騎討取、高所ヘ、人數ヲ引ノホセ、陣取タルハ、兩度ノ戰ニ、能兵共百騎計討セ叶ハシト思、城々ヘ取コミ、森山、神保方ヘシキナミノ注進シテ、急キ後詰有ヘシ、加州勢足長ニ是マタ働無念ニ存候間、其内ニ富山ヨリ成政モ可有御出、一人モモラスマシキ山申遣ケレハ、其間五里ノ道ナレハ、神保モハカユカサル間、ユルユト加州勢サ、メキ立テ引取ケリ、利長卿御父子、越中國内マテ、御馬ヲ出サレ、味方自然利ヲ失ヒ候ハ、後詰可有之ト待給フ處ヘ、兩度ノ合戰ニ討取首名アル兵共ハ、ミナ御父子見參ニ入申ケレハ、事ノ外御感有テ、村井事加様ノ儀不珍ト被仰付、村井具足羽織ニ矢鍵ニ

テ多ツキツラヌキタルヲ御覽シテ、利長卿、御具足羽織下サレ、御陣ワキサシモ下サレケル所ニ、片山内膳ト云人、今日ノ物語ヲ御前ニテ申トテ、逆ノ間ノ様子語申少ヌシノ威言交リ申ケレハ、利家卿、其威言ヲ又兵衛ニイハセ度ト被仰ケレハ、サラスステイニモテナシケリ、村井兩度ノ戰ニ利ヲ得ノミナラス、越中ノ内へ四里ノ間先手殿エ迄シテ十死ノ身ヲ遁レ、殊ニ手柄ヲ盡、歸陣仕タル事ヲモ威言御前ニテ不被申事、文武ノ侍哉トホメヌ者コソナカリケレ、毋今年ノ軍初心ヨシト悦給フ、利家卿、利長卿、御父子サ、メキ立テ人數ヲ打入給ヒ、金澤城マテ村井又兵衛ヲ召テ、今度ノ働一々聞召レ、吉川平太、江見藤十郎、屋後太右衛門、小林大納言、此四人ニ黃金廿兩、小袖二宛給リケリ、其外十二人、黃金十兩ツ、被下、彼叻來タル三人、鐵炮大將ニハ米百石宛、小袖道服ナト被下ケリ、其品々無殘所被成御感、毋一兩日過候テ、村井又兵衛尉ヲ召テ、二千石ノ加増ノ地ヲアテ行レケル、如此御ハカラヒアリシカハ、上ハ不及申、下カ下ニ至マテ、忠功ヲイタシ度ト、ハケマス者ハナカリケリ、加越末森日、記秘錄同シ

〔前田家譜〕 二月、前田利家長頼ヲ召シ曰、去歲守將ノ孱弱ナルヲ以テ、鳥越城ヲ失フ、余甚タ憤ル、卿爲ニ其償ヲ越中ニ取ヲ圖レト、長頼命ヲ奉シ退テ家臣

ト謀ル、其宰小林彌六左衛門、屋後太右衛門、俱ニ越中ノ人ナリ、善ク其地利ヲ諳シ、長頼ニ告曰、今石動安居邑ノ北ニ逆沼邑ト云有リ、富民墳囑多ク、饒殺ヲ畜フ、佐々氏常ニ軍資トナス、夜ニ乘シテ之ヲ燒カハ、敵兵膽ヲ破ラント、長頼之ヲ利家ニ告、利家聞テ之ヲ可トス、廿四日ノ初更長頼兵千人ニ將トシテ先ツ發ス、諸將次ヲ以テ之ニ繼ク、利家利長ト中堅ヲ率ヒテ、加越ノ境ニ駐リ後援タリ、長頼細作四井主馬ヲシテ嚮導タラシメ、兵ヲ進ム、是夜雲雨晦冥、咫尺辨セス、主馬ノ曰、昏黑此ノ如シ、恐クハ路ヲ失ハシ、敢テ諸軍ヲ旋セト、長頼罵リ曰、余レ君命ヲ蒙リ前鋒トナリ、夜ニ乘シテ險ヲ涉ル、固ヨリ溪谷ニ轉墜シテ死スルヲ懼レヌ、豈暗夜ヲ憂ルヲ以テ徒ラニ軍ヲ旋サンヤ、汝嚮導ヲ難セハ是ヨリ余ヲ棄テ歸レト、部下感奮シテ昏キヲ衝キ勇進ス、黎明逆沼ニ達シ、糧倉ヲ燒ク、延ヒテ人屋ニ及フ、越中ノ將前野小兵衛、井波城ニ在リ、佐々平左衛門ハ貴船ニ在リ、銳ヲ悉クシテ來リ拒ム、長頼ノ家兵死スル者數人、長頼奮怒シテ鎗ヲ揮ヒ、直ニ數十人ヲ殛ス、從兵某々等奮戰シテ之ヲ卻ク、敵復タ衆ヲ戮セテ進ム、山崎長鏡、近藤長廣生兵ヲ以テ之ニ當ル、銃將平野五郎右衛門、河村善五郎、長田猪之助、銃手ヲ麾テ之ニ薄リ、長頼モ亦横ヲ撃ツ、敵兵終ニ潰ヘ走ル、是ニ於テ軍ヲ班ス、長頼本

營ニ來リ首級百八十ヲ獻ス滿鐵ニ矢ヲ被ル蚬毛ノ如ク刀鞘ハ銃丸ニ碎ケ流血淋漓トシテ戰袍悉ク裂ク利家嗟賞シテ親ヲ戰袍ヲ脱シ帶ル所ノ雌刀ヲ以テ之ニ與ヘ振旅シテ還リ功ヲ論シ賞ヲ行フ

〔加賀藩史稟〕

二月二十四日村井長頼ヲ以テ先鋒トナシ越中連沼邑磯波ヲ襲フ

〔三州志〕

十一 餘考

天正十三年乙酉二月十八日越中ノ臘雪稍消エテ東風日

々暖ヲ扇ク是ニ於テ我國祖村井長頼ニ曰フ客冬不虞ニ鳥越ヲ敵ニ奪ハルコト遺憾萬萬我弓箭ノ辱門也此怨報ニ越中ヲ侵掠セハ如何ト命ヲ降シテ村井ニ議セシム村井命ニ應シテ退出シ歷練ノ老兵ヲ聚メテ獻可ヲ論ス時ニ小林大膳今村井ノ臣ニ孫ナシ一屋後太右衛門ハ原越人ニテ其地勢ノ險夷可否ニ通スレハ前シテ曰ク連沼ハ磯波郡連沼村領也一連沼間ニ今猶堅壁在ス安居一作安江ト今石動トノ間ニ夾マリ老樹陰森トシテ越中中ノ勝地也此處ニ磯波郡暨ヒ中郡ノ人民五穀ヲ畜フ先ツ是ヲ焚燬セハ城中ノ守兵子ヲ易テ食ヒ骸ヲ折テ饗クヘシト村井是奇策也必ス奇捷アルヘシトオモヒ即チ此策ヲ公ニ獻シ臣ニ先驅ヲ賜ルヘシト乞フ公許諾シ即チ編伍方略ヲ定メ五隊ヲ

作ル其一ハ村井將タリ其二ハ松任衆近藤長廣善右衛門山崎長鏡ヲ將トシテ甲兵八百及ヒ青山吉次手兵ヲ率テ從フ其三ハ岡島一吉片山内膳種村三郎四郎甲兵八百ニ將タリ其四ハ不破直光武藤助十郎及ヒ前田利秀將タリ其五ハ中堅也殿軍ハ世子之ヲ兼ヌ村井ハ手兵千許ニ四井主馬探細ノ途者後ニ富山ヲ從ヘ小林屋後ヲ嚮導トシテ二十四日發旌シ其夜ノ初更ニ四里許越中へ踏入リ此所ニテ四井曰ク暗夜後先ノ路ヲ失スレハ行軍シ難シ是ヨリ班軍シテ可ナナラシ汝等賊心アラハ我ヲ舍テ去レト激進スト云ハ味爽ニ及フ頃連沼ニイタル明レハ廿五日連沼ノ氓屋並ニ樽林ヲ一炬ニ盡セハ鄉民落膽シ資財ヲ舍テ鼠竄ス一説ニ此時連沼ノ寺百餘ヲ燒キ時ニ木舟アルハ貴布禰ニ作ル磯波郡ニ脚アリ大半釋村ノ右ニ今遺蹟又見ニ作ル古名磯波郡也今猶松島村領ニ在リ此時前野小兵衛之ヲ舟ハ東ニ城端磯波郡方今城端町ノ所評古城地ト云ハ松根河北郡松根村領ニシテ城地ハ磯波山中ニ等ノ城將出旗シテ之ヲ禦ク因テ村井手自ヲ鎗ヲ合ス此戰功ニ付自公ヨリ村井ヘ賜ル書越軍鼓譟シテ我宗士七八人ヲ斃ス姓名ハ怒記村井怒ヲ指揮スレハ村井ガ從騎吉川平太江見藤十郎阿波加藤八郎大窪小五郎屋後小林其餘壯士二十人許進テ交鎗シ敵首ヲ斬

大ニ御威有テインカセ給ヒケリ、彼者共早懸出スハ何レモ金澤城二三九ユヘ、一番カイヲ聞ト有合セタル兵共計ニテ、馬引寄打乘懸タリケル、殊ニ村井ハ二丸ニアリケレハ、彼地ノ注進聞モアヘス打出懸タレハマツ先ニコソ出ニケリ、如右又兵衛急キケレハ、越中勢深シテ、イブセキトヤ思ケン、少々在所一二ケ所焼立輕々ト引ニケル、然ル加州越中境ニテノキヲクレタル兵、三十八騎、村井不破手ヘ討、其ヨリ追討ニ打處ニ越中ヨリ節所セハミヘ引請、福岡與四郎、佐々平左衛門尉ナトノミ留リ、鎧ヲ入漸引退ケリ、其ヨリ討取タル首共持セラレ、當年兩度ノ戰ニ多ノ首數ヲ見ル事吉例成ト、悦ヒサ、メキタテ人數ヲ打入ラレタリ、

〔前田家譜〕

澤金

三月廿一日、佐々成政、間道ヨリ兵ヲ潜メ夜ニ來シ、我鷹巢ヲ襲ヒ火ヲ縱ツテ抄略ス、利家警ヲ聞キ即チ發ス、左右之ニ從フ者六十餘騎、直ニ牛首ニ抵ル、村井長頼其兵百餘人ヲ以テ先ンシテ此ニ在リ、不破家光片山内膳等三百餘人ヲ率ヒテ之ニ次ク、利家戲レ曰、今夜ノ戰ヒ余自ラ以テ先登ト爲ス、圖ラスモ亦卿等ニ先ンセラルト、誓ヲ聯ネテ鷹巢ニ馳ス、至レハ成政已ニ遁ル、長頼、家光等急ニ追躡シテ數十級ヲ獲テ軍ヲ班ス、

〔參考〕

〔三州志〕

十一 雜考

三月二十一日

夜成政、銳甲ヲ率キテ加州鷹巢

石川郡四市

瀨山上ニ在

スル地也、按ルニ今成政其遺迹ニ據リ、火ヲ近邊ニ放ツ耶、へ出張シ村屋ニ放火

セントス、我觀人之ヲ察シ來リテ告ク、公即チ尾山城ヲ發旗アリ、事火急ナレハ從騎五六十員ニ過キス、前ンテ半里許ニシテ味且ニ及フ頃ホヒ、前途十町許ニ一隊ノ行軍既ニ進ム、是村井ノ附タル馬印ヲ先ニシテ小隨ニ赤キ田、又一隊之ニ次ク、是不破種村片山也、蓋シ村井ハ其夜ニ丸ニ在テ觀人ノ注進ヲ聞クト其マ、ト齊シク、手兵ヲ從ヘ馳出ト云、但シ村井ノ軍ヨ公望ンテ是ン村井不破等ナラント喜ヒ、愈ヨ進マセラル、成政既ニ放火シ反旗セントスルニ、村井不破等越軍ノ後ヲ擊チ首ヲ斬ルコト三十有八級、越兵狼狽スルヲ越將、福岡與四郎、佐々平左衛門之ヲ指應シ、兵ヲ護シテ緩ヲ收ム、我軍モ亦徐々トシテ兵ヲ斂メテ旋ヘル、

〔金澤藩源流記〕

二

二十一日

成政加州鷹柄ニ至テ出張シ在々ヲ放火ス、依之

此所ヨリ金澤へ急ヲ告ル、高德公不破時刻具ヲ被立、金城ヲ御進發有、村井ハ御

出馬ニ先達テ二十四町ヲ隔ハ、是ニ押續テ不破、多野村、片山等採ニモンデ寅ノ

下刻此所ニ力戦ス、成政が先驅、佐々平左衛門、福岡與四郎等更ニ避易シテ引退ク、

四月壬寅

八日、己酉利家、鳥越城を攻む。

〔末森記〕

一、天正十三年卯月八日ニ利家卿、利長卿ヲ先手トシテ、段々ニ人数ヲ備、鳥越へ押寄、近邊ノ山々へ上リ給ヒ、強弱御覽シテ、資度思召共足懸アシウシテ、人数損シテイラサル事ト、先人数ヲ寄鐵炮ヲ打入サセ給フ處ニ、城中ヨリ物見ヲ出シ候ヲ、利長卿先手追拂へト追懸、城際マテ追詰候處ニ、近々ト引請、久瀬但馬守其外籠タル勇士共下知シテ、五百騎計、噓トツイテ出追崩、利長卿旗本近クハラハレケリ、利家卿横合ニ山ノ崎ニ本陣ヲスヘラレケルカ、其様躰ヲ御覽スル處ニ、旗本ノ若者共スハ早ヨキ事ト思ユ、噓ト立ントスルヲ見給ヒテ、我下知ナキニ懸ルヘカラスト被仰、アノ躰ハ未味方足ヲタメラレヌ處也、ヨキ時分ヲ下知スヘシトノタマヒケレハ、御目キ、ノ如ク味方追崩シニ、其時アレニ山崎庄兵衛其外誰々カアルラン、モハヤ鍵合時ニテ候カ如何々々ト被仰候處ニ、御言葉ノ下ヨリ、徳山五兵衛入道御誼ノコトク、鍵只今合セ申候ト相見エテ、

地煙立申ト申ケレハ、扱モホイナシアレヨリツキ返スヘシトノタマヒケリ、誠利家卿御目利露ホトモ違ハサリケリ、然處ニ近邊ノ城々ヨリ助來、歴々成政内ニテノ兵トモ馬上ニ鍵ヲ持、五六十騎計相見エ候、加州勢山崎庄兵衛ヨリ七八間先立テ、鷲津九藏ト云者懸出、一番鍵ヲ入ケルヲ、庄兵衛見捨テ助サリケリ、山崎内ノ者共申ケルハ、九藏殿討死ト見エテ候ト云ケレハ、アレヲ討死サセテコソ我一番ニナレト云テ、九藏ツキタヲサレタルヲ見テ返合ハセ、鍵ヲ合ス、越中方ニ福岡與四郎、一番鍵ヲ合、互ニ名乗合キヒシカリケリ、サテ追崩城際マテ追討ニ打ニケリ、半田源太郎、横山大膳、神尾圖書、三輪主水ナトモ手柄ヲシテ戦ケルカ、ル處ニ、杉江彦四郎ト云兵、成政内馬廻組頭ヲシテ、勇士成カ、近邊ノ城ニ番勢ニ居タリシカ、鳥越ヲ加州勢候ヲ見付助來ル處ニ、利家卿内ニ九里少藏ト云小性、其頃蒙勘當居タリケルカ、スハタニテ、彼彦四郎ニ渡合引クンテ谷へ落ケルカ、上ヲ下ヘト返シケルニ、少藏下ニ成既ニ首ヲトラント、杉江刀ニ手ヲ懸タル處ヲ、下ヨリ少藏小脇指ニテ草摺ノハツレヲ二刀サシ通シ、終ニ杉江ヲ押伏ケリ、然レト少藏クタヒレ息ヲ休メケル處ヲ、片山内膳内ニ伊藤十藏ト云者ノ跡ヨリ來リ、少藏ヲ押除、首ハ相討ト云儘ニ奪取テ利家卿ノ御前ニ參リ見

參ニ入ニケリ、是ヲ初トシテ越中勢倉地猪之助野間兵部、其外歷々廿七騎討死ス、加州勢手々ニ討取、勝時ヲ咄ト上タリケリ、其ヨリ城ニモ漸門ヲサシ、外様ニシテ戰間、加州勢サ、メキ立テ心ヲヨクシテ、人數ヲ打入給フ、其夜利家卿御歸陣アツテ、後日ニ其品々有御吟味テ山崎庄兵衛ニ黃金三十兩、小袖一重被下、其外半田横山神尾三輪ナトニモソレノ被下御褒美ケリ、扱杉江首穿鑿アツテ彌少藏取タルニ相究リ、御前ユルサル、ノミナラス鞍置馬ヲ下サレケリ、扱越中成政、其頃越中ノ面々召集ノ、加州ト取合初ヨ、此方其品々記付ヲカレ、褒美ヲ給ハル中ニモ、佐々平左衛門、前野小兵衛兩人ハ二千石宛加増アリ、其外黃金十兩二十兩宛ニ小袖道服ナトヲ添給ハリケリ、其中ニモ今度鳥越ニテ一番鎧ヲ合タル、福岡與四郎ニハ今ニ初ス働トテ、黃金三十兩刀脇指給ハリケルト後ニソ聞エケリ、前カト秀吉公上方ニテ注進ノ刻ノタマヒシ如ク、利家卿、成政人數ヲ立合候ハ、何時モ利家卿勝利ヲ得給フヘシト、秀吉公ノ御誑少モ違サリケリト申アヘリ、

〔前田家譜〕

四月八日、利家兵五千ヲ將ヒ、鳥越城ヲ圍ム、山崎長鏡先鋒タリ、守將久世但馬壁ヲ堅フシテ出ス、諸將議シテ曰、之ヲ拔難カラス、恐クハ吾兵ヲ

損セン、若カス戰ヲ挑ミ、其出ルヲ待テ之ヲ擊ンニハト、利家之ヲ可トシ、將士ヲシテ四出攻略シ、敵ヲ誘ハシ城中候騎ヲ出シ、吾陣營ヲ覘フ、小塚權太夫、上坂又兵衛、銃兵ヲ麾シテ之ヲ擊ツ、北ルヲ追ヒ城ニ逼ル、但馬之ヲ見テ兵五百人ヲ出シ突擊スル甚ク急ナリ、中軍ノ兵望見テ進ミ戰ハントス、利家聽サス、頃之アツテ利家曰、敵ヲ破ルノ機至ル、長鏡ナニ返シ戰ハサルヤト、言未タ畢ラサルニ塵起ル、利家莞爾ト晒ヒ曰、長鏡果シテ反シ擊ト、長鏡大呼シテ奪戰シ、直チニ數人ヲ殲ス、敵兵披靡ス、敵ノ福將倉地猪之助驍勇ニシテ善ク戰フ、長鏡進ンテ之ヲ刺ス、輕卒細井彌左衛門傍ヨリ來リ搏シテ之ヲ殲シ、其首ヲ截ス、横山長知等之ニ乘シテ力戰シ、斬殺スル數十人、敵兵潰走ス、越中ノ將杉江彦四郎等鳥越ノ急ヲ聞テ來リ援ク、利家ノ近臣九里正貞譴責ヲ被リテ家ニ在リ、是日私ニ軍ニ從フ、彦四郎ノ來ルヲ見テ之ニ當リ、格闘數合ス、彦四郎臂力ヲ以テ聞ユ、鎗ヲ投シ相搏シ轉輾シテ谷ニ墜ツ、正貞籍カル、急ニ短刀ヲ拔キ彦四郎ヲ刺ス、片山内膳ノ隸伊藤十藏來テ之ヲ截シ、呼テ曰、相俱ニ之ヲ殲スト、敵兵皆城ニ入ル、是ニ於テ軍ヲ班シ、大ニ功ヲ論シ、賞ヲ行ヒ、長鏡ヲ以テ最トナス、利家深ク十藏ノ爲ス所ヲ惜ミ、内膳ニ命ノ之ヲ罪セシメ、正貞ヲ賞スルニ鞍馬ヲ以シ、之ヲ待ツ舊ノ

如シ、

〔三州志〕

〔参考〕

〔三州志〕十一 餘考 夏四月八日、二公出師又鳥越城ヲ攻ント、此時秀繼君、不破ト北國、太平記ニ見ユ、城邊ノ峰頭ニ本陣ヲ布玉ヒ、城中ヲ目下ニ瞰シ、銃手ヲシテ放丸セシム、斯時城中ヨリ塘兵ヲ出ス、一説ニトハアリ、松任衆ノ隊長小塚權大夫、三千石、淡路ノ弟也、舊本ニ此大へ原田又右衛門ヲナリ、加上坂又兵衛、卒七百石、將タリ、即チ今ノ嘉藤也、其詳傳ハ大坂役、因幡中ニ播ノ家銃卒ヲ馳リ、之ヲ追テ城下ハ慶長十九年、紀也、其詳傳ハ大坂役、因幡中ニ播ノ家銃卒ヲ馳リ、之ヲ追テ城下ニ到ル、因テ城守久世但馬精甲五百ヲ發シテ擊タシム、其鋒猛烈ニシテ、松任衆ノ先軍潰ユ、此時世子ノ旗本近乃中堅ノ壯士競進セントス、世子之ヲ制シ止メ、少焉アリテ發擊セシム、其勢決河ノ如ク、銳氣倍奮ス、時ニ山崎長鏡、此時、白紙子ノ、單甲ニ朱丸ヲナツク、鳥毛ノ俵ノ指物云、先馳シ、生手ヲ以テ還拒スルニヨリ、此時世子見量シ、玉ヒテ曰ク、ア、山崎等ナリ、今、槍ヲ入ルヘキ期ナルニ如何ト、應フレハ、世子重シテ見ヨ、見ヨ、ア、ノ、聖鑒以テミルヘシ、越中、捷敗ス、時ニ井波、城端、木舟、松根ノ諸傑アリ、聲援シ來リ、印收次郎兵衛、杉江、彦四郎、左門、カ、木、工、藩、左、衛、門、系、圖、ニ、別、留、ナ、ル、見、ヘ、ス、榊、野、小、市、栗、田、傳、兵、衛、佐、江、ノ、祖、也、但、江、譜、ニ

鈴木孫左衛門、飯野權兵衛、福岡與四郎、倉智猪之助、智一ニ地、木村助作、山田角彌等五十餘騎、幕地ニ進ム、我將、横山長知、鷺津九藏、下ノ士トアリ、九里少藏、頭ヲ今ナシ、然ルニ野尻次郎左衛門系圖ニ其先祖ト云ハ、杜撰也、等之ト接撃ス、敵兵強多ニシテ、防クニ堪ヘス、鷺津越將八田甚右衛門ノタメニ討タル、山崎譜ニ乘勝來、應、我、軍、從、山、上、至、山、下、衆、潰、却、走、殆、ニ、百、步、山、崎、長、鏡、下、士、鷺、津、九、藏、與、四、郎、戰、死、上、至、山、下、衆、潰、却、走、殆、ニ、百、步、山、崎、長、鏡、下、士、鷺、津、九、藏、與、四、郎、戰、死、人、散、山、崎、之、期、救、ヲ、待、テ、動、銀、馬、シ、山、崎、首、我、奇、功、ハ、有、ク、九、藏、等、死、力、ヲ、出、シ、テ、血、戰、シ、進、マ、ス、田、平、右、衛、門、譜、ニ、此、祖、誤、ナ、ラ、シ、治、右、衛、門、陸、下、ノ、政、ノ、死、臣、ニ、看、シ、テ、末、孫、カ、ノ、役、ニ、先、鋒、將、タ、リ、此、時、加、州、ノ、仇、ナ、レ、ハ、九、藏、カ、布、市、村、ニ、テ、死、ス、其、子、神、尼、圖、書、取、リ、ニ、瑞、龍、ノ、公、ハ、憤、フ、然、ル、ニ、九、藏、ハ、父、ノ、仇、ナ、レ、ハ、九、藏、カ、布、市、村、ニ、テ、死、ス、其、子、神、尼、圖、書、取、リ、ニ、瑞、龍、ノ、公、ハ、憤、テ、木、戸、ヲ、破、ル、氣、ヲ、取、ル、ヨ、リ、田、原、殺、テ、免、サ、セ、ラ、ル、ト、ア、リ、且、安、中、城、ニ、先、登、シ、但、シ、モ、京、周、按、ス、ル、ニ、九、藏、鳥、越、ニ、テ、死、ス、中、ニ、在、テ、敵、首、ヲ、得、筆、記、及、ヒ、右、澤、武、業、ノ、堀、田、譜、誤、ナ、ル、ト、必、矣、乃、横、山、進、テ、八、田、ヲ、殺、ス、山、崎、此、期、ヲ、見、量、リ、進、鼓、ヲ、搦、テ、福、岡、ト、交、鎗、ス、上、阪、九、左、衛、門、ニ、今、ノ、喜、藤、太、ノ、譜、及、山、崎、ノ、騎、吏、味、島、六、左、衛、門、齋、ノ、臣、孫、今、ナ、シ、續、ヒ、テ、交、鎗、シ、ケ、レ、ハ、我、兵、氣、大、ニ、振、ヒ、竟、ニ、越、兵、折、ケ、北、ル、ヲ、半、田、源、太、郎、今、ノ、半、田、譜、ニ、横、山、長、秀、九、千、喜、二、百、五、十、知、ノ、兄、也、因、幡、フ、又、五、郎、ノ、祖、神、尼、圖、書、千、石、九、郎、賜、ノ、孫、九、三、輪、主、水、後、十、石、志、摩、賜、ノ、孫、七、千、二、百、等、餘、勇、ヲ、奮、ヒ、各、敵、首、ヲ、獲、尼、擊、シ、

正親町天皇天正十三年

利加羅ヲハ右ニ見テ、末森ト森山ノ間ヨリ越中青城ヘサシムケテ、村井又兵衛ヲ先手ノ大將トシテ、原隠岐守、片山内膳、岡島喜三郎、多野村三郎四郎、前田宗兵衛尉、其外宗徒ノ人々都合其勢六千餘騎ニテ青ヘ馳ツカセ、利家卿後詰トシテ馬ヲヨセ玉フ處ニ、菊池父子只五十騎計ニテ出向、御出馬イマタ相延可申ト存候處ニ、存ノ外輕々ト出サセ給フ事、殊ニ惡所ト申御メイヨナリ、又ハ御味方可仕ト申上ルニ付テ、早速御出馬忝儀可申上様モ無御座ト申、則青城ヒラキ渡申、御身ハ五六町計リキニ居住候處ニ、青ノ近邊菊池ニ隨ハサル在々所々燒拂セ給フ處、内藏助ヘ森山城主神保方ヨリ此山度々注進イタシケレハ、頓テ森山マテ成政カケ付、菊池儀口惜次第哉ト一合戦シ勝負ヲ決セント、勇少々足輕ヲ被出ケレハ、早青城ヘハ加州勢入替リ利家卿モ後詰ニ出馬アリケレハ、叶難ク思ハレ、成政人數ヲ打入ラレケレハ、青城ニハ前田宗兵衛尉、片山内膳、高島九藏、鐵炮大將ニハ小塚藤右衛門、長田權右衛門、都合其勢千餘騎被入置先人數打入給ケリ、

〔前田家譜〕

是月、阿尾ノ城主、菊池武勝降附ス、是ヨリ先佐々成政富山ニ於テ新ニ馬埒ヲ造リ、多ク櫻花ヲ植テ諸將ヲ饗飲ス、武勝歡ニ乘シ親ヲ副刀ヲ脱キ、

成政ノ前ニ捧ケ曰、此謂ユル鬼神大王ノ寶刀、謙信上杉公ノ賜フ所ナリ、今祝シテ之ヲ左右ニ獻ス、君此刀ヲ提ケ亦以テ北陸道ヲ定メヨト、成政慨然ト罵リ曰、余常ニ群雄ヲ驅除シ、四海ヲ併吞セント欲ス、僅カ北陸七州ヲ以テ意ト爲ンヤト、武勝赧然ト答フル能ス、其刀ヲ侍者ニ授ケ曰、臣老タリ、眼孔甚タ小ナリ、圖ラサリキ、君ノ雄略此ニ至ントハ、君ハ智勇世ヲ蓋フ必ス能ク天下ヲ統一セン、老臣幸ニ未タ死セズンハ、願クハ北陸ニ於テ一州ヲ賜ランノミト、既ニシテ阿尾ニ歸リ家臣ヲ會ソ曰、成政妄リニ大言ヲ發シ余ヲ衆人廣坐ノ中ニ辱シム、彼固ヨリ人君ノ度ナシ、余レ本此國ノ舊族、今麾下ニ屬スレハ未タ會テ其寸思ニ沾ハス、余レ前田氏ヲ察スルニ、三德兼備シ恩澤封内ニ加ル、カ、ル君ニ仕ルニ非ンハ安ソ功名ヲ立テ榮ヲ子孫ニ傳ンヤ、汝等以テ何如ト爲ト、衆皆鼓舞ノ之ヲ賀ス、乃チ富田景政ニ就キ降ヲ納ル、景政之ヲ長賴ニ謀リ以テ利家ニ告、利家長賴ヲシテ其情ヲ曝カニセシメテ之ヲ許ス、十二日利家歩騎六千ヲ率ヒテ越中ニ入ル、越中森山ノ守將神保氏治變ヲ聞テ大ニ駭キ、急ヲ富山ニ告、成政駭キ且怒リ、直ニ兵ヲ發シテ森山ニ至ル、吾銳當ル可ラサルヲ度リ、敢テ前マス、利家前田利益、高島九藏ヲシテ兵千人ニ將トシ阿尾ヲ守ラシメテ軍ヲ旋ス、是時

長頼ヲノ兵ニ將トシ、越中高窪ノ城ヲ攻シム、長頼銃卒ヲメ火ヲ民屋ニ縱タシム、城兵出テ之ヲ拒ク、銃隊潰テ走ル、長頼衆ヲノ坐ノ走ル者ヲ撞キ倒サシム、之ニヨリ走ル者復タ反シ戰フ、敵終ニ敗走ス、利家之ヲ聞キ嘆稱シ曰、千人ノ兵ハ一人ノ將ニ若カスト、

〔加賀藩史彙〕

十二年十一月八日、書ヲ越中ノ阿尾郡射水城主菊池右衛門ニ貽リ、誘ヒテ款ヲ納レシム、高徳公略中十三年四月、阿尾ノ城主菊池右衛門降ル、未詳略中、秋七月四日、受降條目ヲ菊池右衛門ニ賜フ、中二十八日、誓書ヲ菊池右衛門ニ賜フ、高徳公血判物

〔金澤藩源流記〕

天罰起請文之事

一 今度此方へ同心趣□□□□些如在有間敷候、萬一表裏候は、申願可及斷候、右忠節を徒に成候間、父子三人切腹させ申間舖候事、
一 以書付申談知行方之事、以來共相違有間敷候事、縦知行方の斗策被遣候共、其

方へ申談候、知方某及御斷知行させ可申候付、自然此調義ほくれ候は、右上申談於當家急度かへ可申事、

- 一 秀吉様、御判形縦時延候共、頂載させ可申事、
- 一 其方居城以來共、相違有間敷事に付、其方法牀の義に候間、如此間私宅に可被居事、
- 一 湯山か守山か兩所に一所可申談候事、
- 右之條々若於偽者

上は梵天帝釋、下四天王、惣而日本國中大小之神祇、取分愛宕圓山八幡大菩薩、日光月光扱は氏神、各御罰罷蒙、今生迄は白癩黒癩病受來世にては無間に可墮罰者也、仍起證文如件、

天正十三年七月二十八日 前又た 利家御書血判

菊右入道殿
同十六郎殿

御宿所

〔加賀藩民事志〕

○石

天正十三年四月、菊池肥後、越中國、氷見庄阿尾城ヲ以シ

平左衛門、松根ニ杉山主計等相守テ皆敵地ナレハ津幡ヨリ内高松、夫ヨリ羽咋郡ヘカカリ末森ト飯山トノ間ヨリ射水郡水見ヘ出テ阿尾城ヲ受取タマフナリシルヘ村井先鋒タリ、原、片山、岡島、種村暨ヒ利益此時能州松之ニ在リ、此餘精兵通計六千、阿尾城ニ到ル、菊池父子手士五十ヲ從ヘ城ヲ離ル、コト五六町、韃ヲ屬シテ公ヲ郊迎シ、蒲伏シテ前非ヲ謝シ、而シテ城門ヲ開キ、降服ノ禮ヲ以テ城ヲ村井ニ授ク、村井之ヲ受ケ、其近邑ノ菊池ニ從ハサル民舍ニ火ヲ放ツ、長湫略譜云、三年四月十二日、水見庄ヘ加賀勢、阿尾城主菊池入道兵千許ニテ籠リシ、天正十政ニ恨ミ有テ加州勢ヲ手引シ、加州勢ハ能州口ヨリ廻リテ水見ヘ出テ、阿尾城ヲ受ケ、人散テ依テ神保氏春ヨリ急ニ此旨ヲ富山ヘ告レハ、成政憤リ汗馬ニ鞭ヲ加ヘ、耳後風ヲ生シ、兵ヲ驅テ森山マテ到リ一戰ニ輸麻ヲ決セント健兒ヲ出ス、而シテ我神兵既ニ阿尾城ニ入り代リ、旗幟雲ニ映シ、公モ亦在スト聞ユレハ、成政一肚氣ヲ發スレトモ奈何トモスヘカラス、手ヲ束ネテ富山ヘ飯ル、公乃チ阿尾城ニ利益、高島、九藏、片山等甲士千餘ヲ置テ、一説ニ此トキ隊長ニハ小塚守ラシメ、尾山ヘ旋城、

〔金澤藩源流記〕ニ

四月二日

高德公越中阿尾ノ城ニ御出張アル御先驅村井原、岡嶋、多野村、前田宗兵衛利益、始慶等六千余ヲ卒シ、彼地ニ赴ク、城主菊池伊豆守、後右衛門同子十六郎僅五千余ヲ引具シ、爲御迎、城下ヲ去ル事五六町ニシテ、高德

公ニ奉謁、是ヨリサキ菊地村井ヲシテ云、當城之同州守山ノ城主、神保安藝守氏春、菊地カ返忠ヲ聞テ、成政ヘ告ル、依之菊地父子ヲ討ント、成政守山ニ至テ出張スルト云ヘトモ、早御味方ノ勢阿尾ノ城ニ楯籠ヲ開、戰フ不能、富山ニ引返シ評シテ曰、小矢部川ヲ打越城々ヨリ操合セ戰ント人数ヲ配ル先守山ニハ城主神保氏春、同子清十郎、成政四千五百余、木舟ノ城ニハ佐々平左衛門二千余、井波ノ城ニハ前野小兵衛二千余、増山ノ城ニハ成政カ馬回爲番勢ト入置ク、越後越中ノ堺ニハ丹波權平五百余ニテ楯籠、

十八日、未成政、鳥越、俱利迦羅二城の保つべからざるを度りて、守兵を撤せり、利家之を取り家臣をして分ち守らしめ、又今石動に城きて前田繼長をして之に據らしむ、

〔末森記〕

然處ニ、利家卿日々月々勢付ケレハ、成政ハヲノツカラ枯ハツル様ニ成ニケリ、殊ニ青城主マテモ利家卿ノ御味方ニ參ケレハ、成政家老ノ者マテ

ニ心モトナク成ニケリ、俱利迦羅鳥越兩城モヲノレトヒラキノキ、森山木船伊奈美三箇所取籠、ヲヤヘ川ヲ前ニ當強強ト城ヲコシラヒ、時刻ヲウカ、ヒ合戦スヘシト思ハレケル、扱コソ利波郡過半、利家卿ノ御手ニ入シカハ、加州勢ノ諸

卒ノ機アラタニ成彌忠孝ヲ盡シ度トノミ思入タル有様也、其時利波郡今石動ニハ城ヲコシラヘ給ヒ、津幡城ニ居ラレタル、前田右近子息又次郎ヲ被入置、越中國中ヲ見下給フ、成政心ノ内ニハ謀反人モアリ、利波郡過半利家卿手ニ入候間、定テ勝ニ乗、ヲヤヘ川ヲ越働キツヘシ、其時城々ヨリ出モミ合々戰シテ勝負ヲ付ヘシト思レ、番勢共ヲ方々ニ置給フ、先森山城ニハ神保ヲ大將ニシテ、四百五十余騎、木船城ニハ佐々平左衛門大將ニシテ、二千五百余騎、被入置、増山城ニハ成政馬廻リ替々番勢ニ被入置、我身ハ富山ニアリテ、一万計ノ人數ヲ引付、越後ト越中ノ境ニ城アリテ、丹羽權平五百余騎入置レタリ、扱内藏助越中大國トハ申セ、人數ヲ過分ニ被抱シ事不審ヲ立候事最也、其故前カト書付申コトク、一度謀叛ヲ心ニ懸、尾張内府徳川殿ト一味シテ、北國ノ大將トヨハレント心中ニ思ハレケレハ、越中山ノ多キ國ナレハ、知行ノ内ニ山野マテモムスヒ、或ハ上方ヨリ五千石ト約束シテハ呼下シ、六千石七千石又ハ千石ト云合テ、千五百石ナト判形ヲ被出ケレハ、我モソレモト引ツトヒ、越中ヘト心サシ下リケリ、扱所付ヲミレハ、漸一ツ五歩ニツニタラス物成ニテ、人ノ知タル侍共ハ暇ヲ乞、上洛シ、或ハ加州利家卿ニ留ラレ、暇申モ多カリケリ、其内ニ加賀越中取合出來ケレ

ハ、サスカ兵モ見捨上洛モ成難ク居トマリ申候ユヘ、思ノ外人數多カリケリ、扱モ成政心ノ中無念ヲ晴サント思ハレケルヲ、利家卿心得給ヒ、利波郡ニ取出ヲ四箇所コシラヘ、勝テ甲ノ緒ヲシメ給フ、賊ニ日比ハ輕々シキ大將ト云、又ハ諸手ニテ勝軍ナルニ、此度ツ、シミ給事申モアヤマリアル御事ト、心アル兵共感シ申ケリ、

〔前田家譜〕

四月十八日、成政ノ將、伊香子四郎兵衛土兵ヲ集メ邊邑ヲ抄略ス、

末森ノ守將、奥村永福、千秋主殿介ト夜ニ乘シテ、其營ヲ襲ヒ、四郎兵衛ヲ敵シテ、尾山ニ送ル、

佐々成政、鳥越、俱利迦羅二城ノ保ツ可ラサルヲ度リ、守兵ヲ撤ス、是ニ於テ、利家前田秀繼ヲシテ、越中ニ入り、新タニ今石動ニ城カシメ、兵二千人ニ將トシテ之ヲ守ラシメ、青木善四郎、大屋助兵衛ヲノ鳥越城ヲ守ラシメ、近藤長廣、岡島一吉、平野五郎右衛門ヲノ俱利迦羅ヲ守ラシム、

〔金澤藩源流記〕

二十日、御書ヲ與村千秋ニ賜ル、是成政カ家士伊香子四郎兵衛ヲ夜討ニスルニ依テ也、

猶々人を附置申候、口口可被申越内膳申次第重而可遣候、能々相しめ可然候

は、おこめ干場上野村へ夜討を遣數多打捨に仕、いかに四郎兵衛とやらん討捕のよし、尤手柄共、此中内膳如存分申付令満足、其方より遣候、若山もの共情を入手をくたき申由、内膳物語今不始手柄ともいよ、無油斷かせき候へ共、可申遣候、彼國一圓に申付候て、是非共各々加増を可遣候、今少々候間心掛かせき專一に候謹言、

卯月廿日

利家御判

奥村助右衛門殿

千秋主殿介殿

五月朔辛未

是月、佐々平左衛門等、今石動城を襲ふ、守將前田繼長拒き戦ひて之を卻く。

〔末森記〕

一天正十三年五月ニ木船城ニアリケル、佐々平左衛門尉、伊奈美勢

ヲ語ヒ、五千騎計ニテ未明ニヲヤヘ河ヲ打越、今石動ノ近邊燒立シ處ニ、城々内ヨリ前田右近子息又次郎、千五六百騎計ニテ打出、四方八面ニ下知シテ突合、切合、火花ヲチラシテ互ニヲメキサケンテ相戰處ニ、右近内歷々是ヲセント、防キ戰ヒケリ、又次郎鎧ヲ入來リ給ヒ、平左衛門先陣追崩廿騎計討取勝時ヲ咄ト

上タリケル、其比又次郎イマタ十九歳無比類、働中々申計ナカリケル、其時二陣ニアリケル、前野小兵衛入替リ戰ケルニ、荒手ノシルシ多勢ナレハ、右近勢突立ラレテ武者色悪ク、早善兵五、十騎計ニケリ、カ、ル所ニ俱利加羅ノ取手ニ居タル近藤善右衛門、岡島喜三郎、原田又右衛門、其外彼是千余騎助來リ、何モ名乗懸々々々モミ合突立打立ケル中ニ、利家卿鐵炮大將平野右衛門マツ先進テ、五十余挺ノ鐵炮ヲ打セシヲホメヌ者コソナカリケル、其時平右衛門返合ケレモ、右近又次郎父子大音聲ヲ上爰ヲモメト云儘ニモウタリケレハ、越中勢ホソホウヲヤヘ、川ヲ越引處ヲ追討ニ、五十余騎討取、右近父子サ、メキ立テ人勢入ケレハ、殘ル人數モ俱利加羅城ヘ引ニケリ、此由利家卿ヘ注進申ケレハ、不斜御感ニテ、其時ノ働御吟味アリテ、無殘所被下御褒美ケリ、

〔前田家譜〕

五月、佐々平左衛門、前野小兵衛兵五千人ヲ率ヒテ今石動ヲ襲フ、

守將秀繼城ヲ出テ之ヲ拒ム、其子利秀時ニ年甫メテ十九、驍勇善ク闘ヒ、手カラ數騎ヲ殲ス、敵ノ前鋒潰ヒテ卻ク、利秀衆ヲ麾シテ益々進撃ス、前野小兵衛生兵ヲ以テ我横ヲ撃ン、我兵殲ル、者十餘人、時ニ俱利加羅ノ守將銃ヲ悉シテ來リ援ク、平野五郎右衛門銃手ヲノ敵背ヲ撃タシム、敵兵遂ニ敗走ス、斬敵數十人使

ヲ馳テ之ヲ尾山ニ送ル、

〔三州志〕

一 榎葉餘考

五月成政以爲ク、加賀軍累勝ニ驕リ小矢部川

深ク進マン、我諸堡ト期ヲ約シテ號螺ヲ吹キ、一舉ニ夾撃シテ之ヲ殲サントテ
鳥越、俱利伽羅兩堡ヨリ兵ヲ引取シメ、景周按スルカ、別ニ道兩堡是ヨリ自然ニ我手
見ヘ森山氏其兵四千トシ、木舟トシテ其兵二千五百將井波シテ其兵二千増山波
廻番手ニテ守ル等ノ諸堡ニ兵ヲ加ヘテ守ラシメ、成政ハ富山城ニ介士一萬ヲ
貯ヘテ其期ヲ待ツ、或云成政兵士ヲ過多ニ蓄ヘシハ、山ノ木竹土貢トモニ秩祿諸侯ト
結ヒ、年貢一ツ五分ニシテラマシ、越中ノ山ノ木竹土貢トモニ秩祿諸侯ト
ナ開及テ上國ヨリ之ヲ望テ來リ、色淡シ、而シテ其賦事人等ハ祿高ノ唱ヘ多キ
者多シト云、然レトモ加越ノ争ヒニ時ニ我公鳥越等ノ堡我強内ニ隸シケレハ、
俱利伽羅ニ近藤岡島平野ヲ置テ、成政ノ機謀ヲ量察セシメ、或ハ今石動城ヲ
ニ在ル野村櫻町村鎮ニ在リ、今石動町ノ西北、新築シ秀繼君父子ヲシテ之ヲ守ラ
シメ、四萬石ヲ賜、越中岡州ヲ眼下ニ瞰臨シ、各堡ノ壁ヲ固クセシメ玉ヘハ、景周
ルニ此時鳥越ノ守見ヘス、是ヨリ廢城タルカ、一説ニ此時福波郡ニ成政失計シ
テ之ヲ憤リ、因テ佐々平左衛門前野小兵衛ト議シ、俱ニ甲士五千ヲ率テ小矢部
川ヲ涉リ、今石動ノ近郷ニ火ヲ縱ツ、秀繼君父子利兵一千六百ヲ從ヘテ出城シ、

平左衛門ノ軍ヲ浪撃ス、此時前田利秀享年十九敵乃敗走ス、我軍之ヲ追テ首ヲ
斬コト二十、銳ニ乘シテ関ヲ發ス、此時前野精甲ヲ盡シテ衝撃ス、我軍ノ先鋒潰
ヘ宗兵之ニ死スル者十餘員、時ニ俱利伽羅ノ近藤等一千許ノ兵ヲ以テ敵背ヲ
遮キリ、鼓譟シテ來リケレハ、今石動衆モ還拒血戰ス、中ニモ隊將平野火兵ヲ列
シ、五十餘座ノ銃手ヲ輪放セシカハ、前野カ軍大ニ敗績ス、外ニ觀ル者平野カ顯
功ヲ聲賞セサルハナシ、公此旨ヲ聞テ喝采シ、且諸將ニ賞功ノ賜物アリ、見聞集
秀繼君父子木舟城ヲ乘取トアリ、按スルニ、此說非也、
下文四月八月ノ役ニ成政木舟ノ堅兵ヲ引トルトアリ、

六月

朔辛丑

二十四日、甲子神保氏張氷見を略し、進テ阿尾城に薄る、前田利益出て、之を
拒く、村井長頼來り援ふ。

〔末森記〕

一天正十三年六月、上方ヨリ秀吉公御書ヲ以、此上ハ越中表ヘ利家
ニ人數ヲ被出、聊爾ノ働無用ニ候、度々其表手柄モ首數ノ注文一々承及候、北國
ノ仕置ノタメ、彼是ニ秀吉公出馬可有之間、其心得最ト、度々御使者ヲ添テ被仰
下ケリ、然レ利家卿ハ哀内藏助出候ヘカシト、手立ノミヲ盡レケレハ、成政モ少
スカノ大將ナレハ、聊爾ニ手出シラモ仕給ハストナリ、